

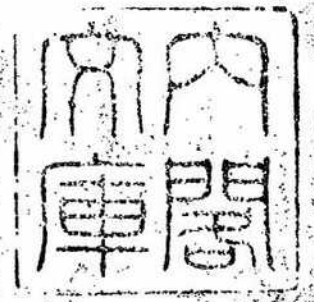
庫	文	開	內
函	三九二二	和	書
架	冊	號	類

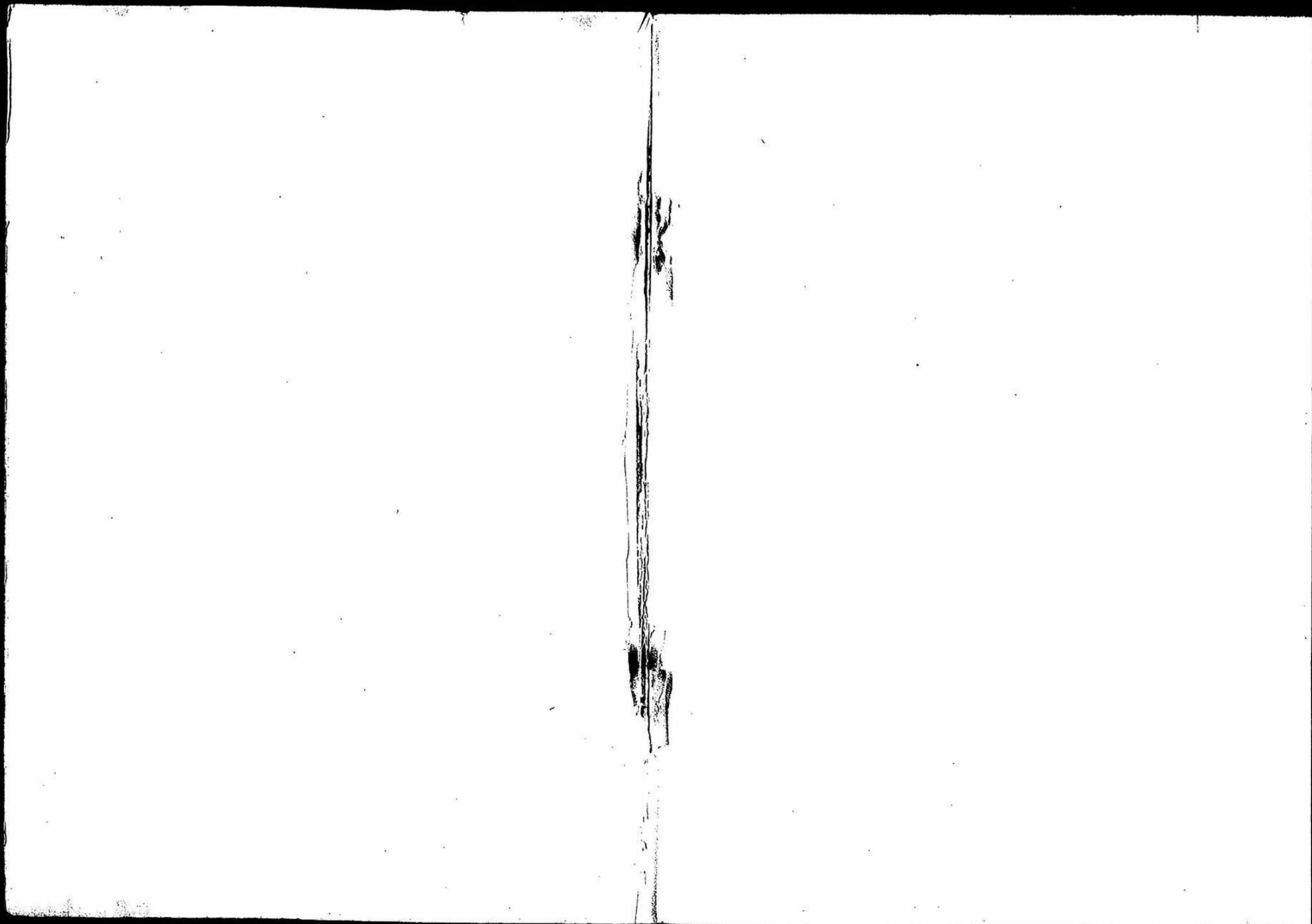
# 昭和二年度古蹟調査報告

第一冊

鷓龍山麓陶窯址調査報告

朝鮮總督府





292  
39172  
8

鷄龍山麓陶窯址調查報告

和三九一七二號

昭和二年度  
古蹟調查報告

第一冊

小職等忠清南道公州郡反浦面鶴峯里陶窯址調査の命を受け昭和二年九月二十九日より十月十一日に至るまで十三日間發掘調査を爲し更に同月廿五日小川技手と共に大田郡鎮岑面の高麗青瓷陶窯址を調査し廿六日歸任せり左に調査の結果を報告致候也

昭和三年十一月

朝鮮總督府雇員 神 田 惣 藏

朝鮮總督府囑託 野 守 健

朝鮮總督府古蹟調査委員長 池 上 四 郎 殿

目次

一	公州郡反浦面鶴峯里陶窯址	一
緒言	………	一
(一)	陶窯址の所在地及現状	二
(二)	陶窯址發掘	三
(三)	陶窯の構造	三
(四)	陶窯の種類	五
(五)	陶器の種類	九
(六)	〔附記〕公州面玉龍里陶窯址	三三
	發見陶器の年代	三四
	〔附録〕(一) 余等發掘以外の反浦面鶴峯里出土陶器	三九
	(二) 現今朝鮮に行はるゝ陶窯の構造	四三
二	大田郡鎮岑面青盜窯址	四九
(一)	緒言	四九
(二)	第一陶窯址	四九
(三)	第二陶窯址	五〇

目次

次

挿圖目次

第一圖 第二陶窯址出土白磁盤及皿……………(澤俊一氏撮影)……四十五

第二圖 第二陶窯址出土白磁盤及皿實測圖……………(野守健撮影)……四十五

第三圖 第二陶窯址全景……………(野守健撮影)……五

第四圖 第七陶窯址出土三島手鉢殘缺……………(澤俊一氏撮影)……一八

第五圖 第八陶窯址出土三島手小皿殘缺……………(澤俊一氏撮影)……一八

第六圖 刷毛目盤……………(澤俊一氏撮影)……三

第七圖 白磁破片の附着せる渣瓶……………(澤俊一氏撮影)……三

第八圖 (一)公州面玉龍里出土陶器破片……………(小川敬吉氏撮影)……三十三  
(二)同 上 出土三島手瓶……………(野守健撮影)……三十三

第九圖 反浦面出土陶器實測圖……………(野守健撮影)……四十五

第十圖 同 上……………(野守健撮影)……四十五

第十一圖 高麗陶磁器實測圖……………(野守健撮影)……四十五

第十二圖 葉誌陶版表面及裏面……………(澤俊一氏撮影)……六十七

第十三圖 葉誌陶版……………(澤俊一氏撮影)……六十七

第十四圖 三島手盤内面及側面……………(澤俊一氏撮影)……六十九

第十五圖 (一)三島手鉢側面及内面……………(澤俊一氏撮影)……六十九  
(二)三島手瓶……………(澤俊一氏撮影)……六十九

第十六圖 (一)景福宮内出土三島手皿殘缺内面……………(澤俊一氏撮影)……六十九  
(二)同 上 三島手皿殘缺裏面……………(澤俊一氏撮影)……六十九  
(三)同 上 三島手鉢殘缺内面及外面……………(澤俊一氏撮影)……六十九

第十七圖 (一)康津郡七良面鳳凰里陶窯……………(野守健撮影)……四十四  
(二)康津郡大日面桂栗里高麗陶窯址……………(野守健撮影)……四十四

第十八圖 康津郡七良面鳳凰里陶窯實測圖……………(野守健撮影)……四十四

第十九圖 (一)釉をかける女工……………(小川敬吉氏撮影)……四十五  
(二)文様を描く女工……………(小川敬吉氏撮影)……四十五

第二十圖 (一)驪州郡北内面五鶴里陶窯……………(野守健撮影)……四十五  
(二)同 上 煙出孔……………(野守健撮影)……四十五

第二十一圖 同 上 實測圖……………(野守健撮影)……四十五

第二十二圖 大田郡儒城面九岩里陶窯……………(野守健撮影)……四十五

第二十三圖 大田郡儒城面九岩里陶窯……………(野守健撮影)……四十七

第二十四圖 同 上 實測圖……………(野守健撮影)……四十七

第二十五圖 公州郡公州面陶窯……………(神田忠藏撮影)……四十七



第二十六圖 同 上 實測圖……………(野守健製圖)……四六—四七

第二十七圖 會寧郡會寧面五洞陶窯……………(野守健製圖)……四六

第二十八圖 同 上 見取圖……………(野守健製圖)……四八—四九

第二十九圖 廣州郡南移面分院里陶窯……………(野守健製圖)……四八—四九

第三十圖 同 上 實測圖……………(野守健製圖)……四八—四九

第三十一圖 鎮岑面第一陶窯址出土陶器殘缺……………(澤俊一氏撮影)……五一

第三十二圖 同 上……………(澤俊一氏撮影)……五一

第三十三圖 鎮岑面第二陶窯址出土陶器殘片……………(澤俊一氏撮影)……五一

第三十四圖 鎮岑面第一陶窯址及第二陶窯址出土陶器實測圖(野守健製圖)……五一

圖版目次

第一 忠清南道公州郡反浦面及大田郡鎮岑面附近地圖……………(陸地測量部五萬分之一地形圖分載)

第二 公州郡反浦面鶴峯里附近之圖……………(野守健製圖)

第三 鶴峯里第一陶窯址附近之圖……………(野守健製圖)

第四 鶴峯里第三陶窯址乃至第六陶窯址附近之圖……………(野守健製圖)

第五 (一)鶴峯里陶窯址遠望……………(野守健撮影)

第六 (一)鶴峯里第一陶窯址……………(神田惣藏撮影)

(二)同 上 B窯隔壁……………(神田惣藏撮影)

第七 同 上 A窯實測圖……………(野守健製圖)

第八 同 上 B窯實測圖……………(野守健製圖)

第九 同 上 C窯實測圖……………(野守健製圖)

第一〇 (一)鶴峯里第一陶窯址出土白磁甕殘缺……………(澤俊一氏撮影)

(二)同 上 出土黑釉壺……………(澤俊一氏撮影)

(一)同 上 黑釉瓶……………(澤俊一氏撮影)

(二)同 上……………(澤俊一氏撮影)

第一二 鶴峯里第三陶窯址陶片断面……………(神田惣藏撮影)

第一三 同 上 出土三鳥手盤內面及側面……………(澤俊一氏撮影)

第一四 (一)同 上 三鳥手小皿殘缺……………(澤俊一氏撮影)

(二)同 上……………(澤俊一氏撮影)

(三)同 上 刷毛目盤……………(澤俊一氏撮影)

(四)同 上 繪三鳥瓶殘缺……………(澤俊一氏撮影)

第一五 (一)同 上 土厨出土彫三鳥陶器破片……………(澤俊一氏撮影)

第一六	(一) 同	上	上層出土繪三鳥扁壺殘缺	(野守健攝影)
	(二) 同	上	下層出土繪三鳥依壺破片	(野守健攝影)
	(三) 同	上	素燒小皿殘缺	(澤俊一氏攝影)
	(四) 同	上	刷毛目小皿殘缺	(澤俊一氏攝影)
第一七	(一) 鶴峯里第四陶窯址出土白磁小皿	上	：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：	(澤俊一氏攝影)
	(二) 同	上	：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：	(澤俊一氏攝影)
	(三) 同	上	白磁平鉢殘缺	(澤俊一氏攝影)
	(四) 同	上	繪三鳥鉢殘缺	(澤俊一氏攝影)
	(五) 同	上	刷毛目盤	(澤俊一氏攝影)
	(六) 同	上	刷毛目小皿	(澤俊一氏攝影)
第一八	同	上	繪三鳥壺平面及側面	(澤俊一氏攝影)
第一九	鶴峯里第五陶窯址發掘狀況	上	：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：	(神田忠藏攝影)

第二〇	同	上	陶層断面及發掘狀況	(野守健攝影)
第二一	(一) 同	上	第六室以上	(野守健攝影)
	(二) 同	上	第六室以下	(野守健攝影)
第二二	(一) 同	上	第六室隔壁	(野守健攝影)
	(二) 同	上	通焰孔間の東柱	(野守健攝影)
第二三	(一) 同	上	煙出孔	(野守健攝影)
	(二) 同	上	第七室出入口	(野守健攝影)
第二四	同	上	實測圖	(野守健攝影)
第二五	(一) 同	上	出土刷毛目小皿内面及側面	(澤俊一氏攝影)
	(二) 同	上	：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～	(澤俊一氏攝影)
	(三) 同	上	三鳥手小皿殘缺	(澤俊一氏攝影)
	(四) 同	上	刷毛目皿殘缺	(澤俊一氏攝影)
第二六	(一) 同	上	繪三鳥盤殘缺内面及側面	(野守健攝影)
	(二) 同	上	繪三鳥水注殘缺	(野守健攝影)
	(三) 同	上	繪三鳥盤	(野守健攝影)
	(四) 同	上	刷毛目盤	(澤俊一氏攝影)
第二七	(一) 同	上	：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～	(澤俊一氏攝影)
	(二) 同	上	：：：：～	(澤俊一氏攝影)





第三〇	(一) 同	上	三島手鉢内面及側面	(澤俊一氏撮影)
第二九	(二) 同	上	刷毛目鉢内面及側面	(野守健撮影)
第二八	(一) 同	上	刷毛目鉢	(澤俊一氏撮影)
	(六) 同	上	刷毛目鉢	(澤俊一氏撮影)
	(五) 同	上	刷毛目鉢	(澤俊一氏撮影)
	(四) 同	上	刷毛目鉢	(澤俊一氏撮影)
	(三) 同	上	三島手鉢	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	三島手鉢	(澤俊一氏撮影)
	(一) 同	上	三島手鉢	(澤俊一氏撮影)
第三一	同	上	三島手鉢内面及側面	(澤俊一氏撮影)
第三二	(一) 同	上	繪三島瓶殘缺	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	繪三島平鉢殘缺	(澤俊一氏撮影)
第三三	同	上	繪三島壺殘缺六種	(澤俊一氏撮影)

第三四	(一) 同	上	繪三島壺	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	繪三島瓶殘缺	(澤俊一氏撮影)
	(三) 同	上	繪三島瓶殘缺	(澤俊一氏撮影)
	(四) 同	上	繪三島瓶殘缺	(澤俊一氏撮影)
	(五) 同	上	繪三島瓶殘缺	(澤俊一氏撮影)
第三五	(一) 同	上	鶴峯里陶窯址遠望	(野守健撮影)
	(二) 同	上	鶴峯里第六陶窯址發掘狀況	(神田惣藏撮影)
第三六	(一) 同	上	出土刷毛目小皿	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	出土刷毛目小皿	(澤俊一氏撮影)
	(三) 同	上	出土刷毛目小皿	(澤俊一氏撮影)
	(四) 同	上	出土刷毛目小皿	(澤俊一氏撮影)
	(五) 同	上	三島手小皿殘缺	(澤俊一氏撮影)
	(六) 同	上	三島手小皿殘缺	(澤俊一氏撮影)
第三七	同	上	繪三島皿殘缺内面及側面	(澤俊一氏撮影)
第三八	(一) 同	上	繪三島皿殘缺	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	繪三島皿殘缺	(澤俊一氏撮影)
	(三) 同	上	繪三島皿殘缺	(澤俊一氏撮影)





第五三	(一) 同	上	繪三島水注	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	三島手瓶	(澤俊一氏撮影)
第五四	(一) 同	上	三島手瓶殘缺	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	繪三島瓶	(澤俊一氏撮影)
第五五	(一) 繪三島瓶	上	繪三島瓶	(澤俊一氏撮影)
	(二) 反浦面出土繪三島瓶	上	反浦面出土繪三島瓶	(澤俊一氏撮影)
第五六	(一) 繪三島瓶	上	繪三島瓶	(澤俊一氏撮影)
第五七	(一) 反浦面出土繪三島瓶	上	反浦面出土繪三島瓶	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	三島手盃瓶	(小川教吉氏撮影)
第五八	(一) 同	上	三島手盃瓶	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	刷毛口瓢形瓶	(澤俊一氏撮影)
第五九	(一) 同	上	繪三島瓶	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	繪三島水注	(澤俊一氏撮影)
第六〇	(一) 同	上	繪三島瓶	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	繪三島瓶殘缺	(澤俊一氏撮影)
第六一	(一) 同	上	繪三島瓶殘缺	(澤俊一氏撮影)

第六二	(一) 同	上	刷毛目瓶	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	刷毛口小盞	(澤俊一氏撮影)
	(三) 同	上	刷毛目盞	(澤俊一氏撮影)
	(四) 同	上	繪三島瓶	(澤俊一氏撮影)
	(五) 同	上	繪三島瓶殘缺	(澤俊一氏撮影)
	(六) 同	上	繪三島瓶	(澤俊一氏撮影)
	(三) 同	上	繪三島瓶	(澤俊一氏撮影)
	(四) 同	上	繪三島瓶	(澤俊一氏撮影)
第六三	(一) 同	上	黑釉水注	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	繪三島盃形陶器	(澤俊一氏撮影)
第六四	(一) 同	上	彫三島符形陶器	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	刷毛目符形陶器	(澤俊一氏撮影)
	(三) 同	上	刷毛目盞	(澤俊一氏撮影)
第六五	(一) 同	上	刷毛目盞	(澤俊一氏撮影)
	(二) 同	上	三島手盃	(澤俊一氏撮影)
第六六	(一) 同	上	繪三島鉢	(澤俊一氏撮影)

第六七	(一) 上	.....	(田野七之助氏撮影)
	(二) 上	.....	(田野七之助氏撮影)
第六八	(一) 上	.....	(田野七之助氏撮影)
	(二) 上	.....	(田野七之助氏撮影)
第六九	(一) 上	繪三島瓶殘缺	(澤俊一氏撮影)
	(二) 上	繪三島把手附鉢殘缺	(澤俊一氏撮影)
	(三) 上	繪三島把手附鉢	(澤俊一氏撮影)
第七〇	(一) 上	繪三島脚附杯	(野守健撮影)
	(二) 上	三島手脚附杯	(野守健撮影)
	(三) 上	彫三島盃脚附杯	(野守健撮影)
	(四) 上	刷毛日盃盤	(野守健撮影)
第七一	(一) 上	三島手鉢殘缺	(澤俊一氏撮影)
	(二) 上	繪三島蓋平面	(野守健撮影)
	(三) 上	繪三島片口	(澤俊一氏撮影)
	(四) 上	三島手片口	(澤俊一氏撮影)
第七二	(一) 上	刷毛日片口	(澤俊一氏撮影)
第七三	(一) 上	.....	(澤俊一氏撮影)

第七四	(一) 上	反浦面出土繪三島依壺殘缺	(野守健撮影)
	(二) 上	.....	(田野七之助氏撮影)
第七五	(一) 上	黒釉水滴	(野守健撮影)
	(二) 上	刷毛日水滴	(小川敬吉氏撮影)
	(三) 上	刷毛日硯	(小川敬吉氏撮影)
	(四) 上	刷毛日托蓋	(小川敬吉氏撮影)
第七六	(一) 上	野崎朝吉氏藏陶器見取圖	(野守健撮影)
第七七	(一) 上	繪三島陶器破片	(野守健撮影)
	(二) 上	.....	(野守健撮影)
	(三) 上	三島手陶器破片	(野守健撮影)
	(四) 上	陶製押型	(野守健撮影)
第七八	(一) 上	彫三島押型表面及側面	(澤俊一氏撮影)
	(二) 上	陶製押型	(澤俊一氏撮影)
第七九	(一) 上	繪三島鉢殘缺	(野守健撮影)
	(二) 上	繪三島扁壺殘缺	(野守健撮影)
	(三) 上	繪三島平鉢殘缺	(野守健撮影)



第八〇	(一) 同	上	三島手植木鉢残缺	(深俊一氏撮影)
	(二) 同	上	：	(深俊一氏撮影)
	(三) 同	上	繪三島丸瓦残缺	(深俊一氏撮影)
	(四) 同	上	白磁皿及鉢残缺	(神田健藏撮影)
第八一	(一)	上	：	(野守健撮影)
	(二)	上	：	(深俊一氏撮影)
	(三)	上	：	(同上)
	(四)	上	：	(同上)

# 鷄龍山麓陶窯址調査報告

朝鮮總督府囑託

野 守 健

朝鮮總督府雇員

神 田 惣 藏

## 一、公州郡反浦面鶴峯里陶窯址

### (一) 緒 言

昭和元年十二月以來忠清南道公州郡反浦面鶴峯里鷄龍山支峯の麓に在る陶窯址から夥しく陶器の残片を盜掘して之を骨董商に賣る者があり骨董商も盛に入入して其歪曲せるもの甚しきは斷片すら高價に買ひ取り遠く東京名古屋大阪等へ送る有様であつた。依て總督府は昭和二年二月の始め小川技手を派遣して之を調査せしめ其結果四月に至り小川野守神田の三人は命を受けて鶴峯里に至り公州警察署長及び土地所有者朴喆熙氏代人鈴木松吉氏立會の上發掘調査の目的を以て附圖面(圖版第三)の如く陶窯址の一部を指定して歸任した。今回野守神田の兩人は是等窯址の發掘調査の命を受け反浦面に至りて朴氏代人鈴木松吉氏の承諾を得九月二十九日より十月五日迄又別に土地所有者朴鏞基氏の承諾を得て同月六日より

一 公州郡反浦面鶴峯里陶窯址

十一日迄發掘調査をなし、更に大田郡鎮岑而寺谷に在る青瓷窯址の調査を遂げて歸任した。今左に調査の結果を報告す。本報告書作成に當り、本府技手小川敬吉氏の助力を得、又遺物の寫眞撮影は囑託澤俊一氏、田野七之助氏を煩はしたことが多し。爰に深く此等諸氏の好意を感謝する。

## (二) 陶窯址の所在地及現状

鶴龍山は忠清南道公州の東南四里に屹立せる道内第一の高峰にして、東國輿地勝覽には「在縣(連山)北二十七里、我太祖初即位、欲移都于山南、車駕親巡卜吉、略定基址、肇興工役、乃以漕運路遠而罷之、至今號其地爲新都溝渠、砌猶在。」

と載す、即ち太祖即位の初め都を此鶴龍山の南に相して新都を經營せんと欲して果さざりし所であり、尙新都内に礎石の數百散在するのを見る。又山麓には東鶴寺、甲寺及び其末寺があり、又山麓の傾斜面に高麗末期から最近に至るまでの幾多の窯址が発見せられ、此所から発見せられた陶器を、今普通に鶴龍山三島と稱してゐる。今回調査した反浦面鶴峯里陶窯址と云ふのは、其東麓に於ける最も大なる窯跡を指すのである。即ち大田公州間街道の約中央、儒城より約一里三十丁の處より左方に分岐して東鶴寺に至る道路がある、其分岐點より約十二丁にして道左右に別れ、右は鶴峯里を経て東鶴寺に至り、左は沙器所を経て李朝太祖の都城候補地であつた新都内に至るのであつて、其溪谷の山麓に多數の陶窯址が遺存してゐる。余等

今回調査の時は既に朴氏所有の一部を除くの外は殆ど全部盜掘せられ、慘憺たる光景を呈してゐた。朴氏所有の處も大部分盜掘されて居たが、嚮きに指定せし地點のみは完全に保存されてゐたのである。今回發掘調査の個所を假りに圖版第一の如く、第一陶窯址、第二陶窯址、第三陶窯址、第四陶窯址、第五陶窯址、第六陶窯址と名づくることとする。

## (三) 陶窯址發掘

**第一陶窯址其一** (圖版第三) 余等嚮に指定せし鶴峯里の部落より約十町、東鶴寺に至る道路の右側の山麓、朴鍾基氏所有七三三番田に於ける陶窯址指定地の下部に於て、中央より右に偏し上部に向つて發掘を始めたが、陶片層なく唯極めて少數の陶片を發見したのみであつた。然るに余等指定地の右側圖版第三に示せる位置に、三個の陶窯址が並列してゐることを發見した。是等の窯の構造に就ては別に述ぶることとする。其附近に於て拾得せし陶片より見れば、是等の陶窯にて燒成されたのは、薄手の瓶類最も多く、片口壺之に次ぎ、其底足は淺く列られて多少内方に傾斜をなし、技術も優れ胎土も緻密である。そして胎土の外表面に鐵釉を施して黒味を帯びたる茶褐色を呈せるもの大部分を占め、又繪三島壺及び白磁も多少は造られたやうである。

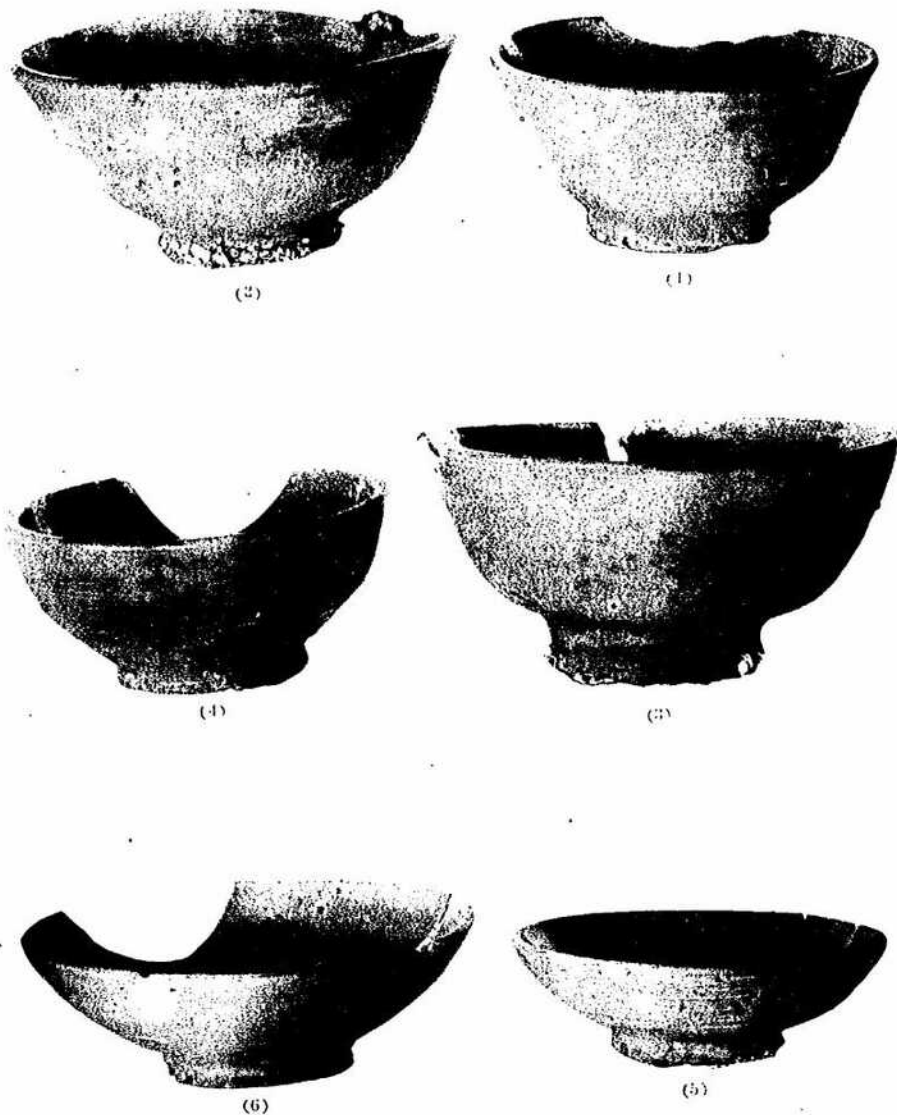
### 本陶窯址發見陶器及殘片種別表

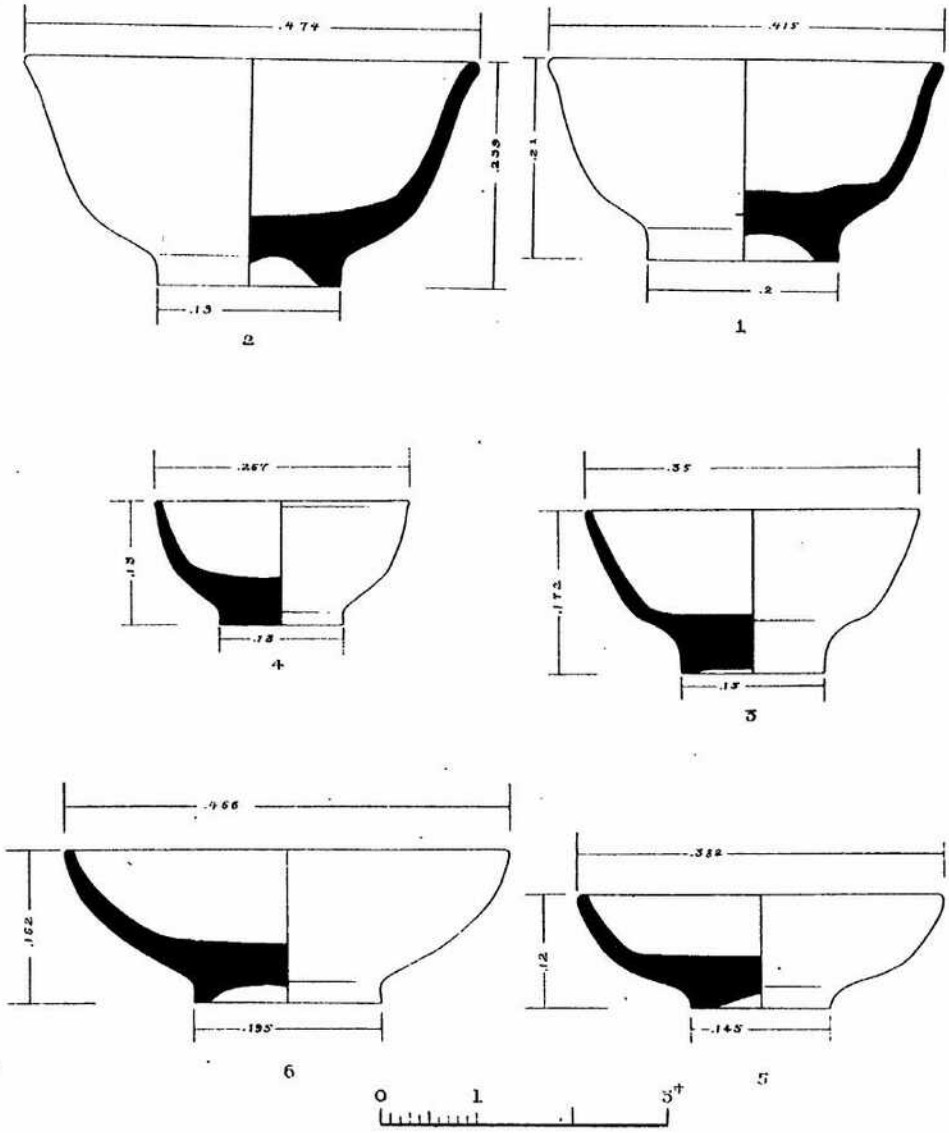
品目	数量	備考
黒釉壺	一個	胎土灰色、釉帶茶黑色
黒釉壺破片	二個	胎土灰色、釉茶褐色
黒釉瓶	二個	胎土灰色、釉帶綠黑色 甲完全、乙底部小破損
黒釉小瓶殘缺	一個	胎土灰色、釉茶褐色
黒釉片口破片	二個	甲胎土灰色、釉帶茶黑色 乙胎土褐色、釉茶褐色
繪三鳥壺殘缺	一箱	胎土鼠色、薄手
繪三鳥片口殘缺	二個	胎土灰色、内面刷毛目 外面唐草文
繪三鳥瓶殘缺	三個	胎土鼠色
刷毛口把手附平鉢殘缺	二個	胎土鼠色、内外面刷毛目
白磁盤殘缺	一個	胎土灰色、釉灰青色

圖版 四

第一陶窯址其二 第一陶窯址其一の南方約五十間の山麓七二四番田にありて、殆ど全部盗掘されて居たが、其陶片より見れば第一陶窯址其一と全く同種類のもの焼成したのである。是れ等と全く同種類のもの焼成したと思はるゝ窯址は、大田郡儒城面花山里の部落の直く後方の山麓にもあり、是れ亦既に盗掘されては居るが、陶窯は尙完全に残つて居る様に思はれる。

鶴山麓第二陶窯址出土 白磁盤及皿





鶴峯里第二陶窯址出土 白磁碗及皿實測圖





景全址窯陶二第 圖三第

第二陶窯址 鶴峰里の部落より約七丁、東鶴寺に至る道路の左側に接し、第一陶窯址の東方約三丁の處にある(一圖参照)。此窯にては厚手の稍や堅い感じのする灰白色の白磁が焼かれ、胎土に帶青灰白色にして底足は平底の者も、又刻られて傾斜をなせる者があるが、手法極めて粗獷である(第二圖参照)。是れ等は最近のものにして約八十年前のものとして認められる。

本陶窯址發見陶器及殘片種別表

品目	數量	備考	插圖
白磁盤	三	一完全他小破損胎土帶青灰白色釉灰白色	1, 1.2, 3
白磁平盤	一	小破損胎土帶青灰白色	1, 6
白磁小皿	四	胎土帶青灰白色, 釉灰白色	1, 5
白磁盞	一	小破損胎土帶青灰白色, 釉灰白色	1, 4

第三陶窯址 圖版第四の5に示す位置、朴氏所有の山麓の傾斜地にありて、普通の刷毛目、三鳥手の外、白磁の破片が散亂して居たから、白磁も同時に焼成されたか否かを明かにする爲め、指定地外なれど土地所有者の承諾を得て發掘を試みた。其断面(圖版第)を見るに地表下約三尺の處より約五尺まで陶片が重つて居り、上層の陶片も下層の陶片も同種類の者で新古の區別がない。三鳥手、刷毛目の小皿盤及び鉢類の破片と僅少の壺の破片があるばかりで、白磁の破片がなかつた。依て日程の都合上發掘を中止して第四陶窯址の調査に移つた。此窯にての發見品の中に、完全なる三鳥手の盤一個(圖版第)があり、素地小豆色を呈し、釉藥は無色透明にして内面唇手、外面刷毛目の逸品である。其他刷毛目の小皿一個、三鳥手の小皿一個及び多數の三鳥手刷毛目の陶片が發見された。

本陶窯址發見陶器及殘片種別表

品目	數量	備考	插圖
三鳥手小皿	一	完全、素地、鼠色、釉藥透明、内面唇手、外面刷毛目	14, 2
三鳥手小皿	四	破損、胎土鼠色、内面唇手、大塗印、外面刷毛目	14, 1
三鳥手盤	一	完全、素地、小豆色、釉藥透明、内面唇手、外面刷毛目	13
刷毛目盤	一	縁多少破損、内面唇手、内面刷毛目、釉藥透明	14, 3
繪三鳥小瓶	一	口部破損、胎土帶綠色、釉藥透明	14, 4
繪三鳥瓶破片	二	上層發見、胎土灰色	
繪三鳥扁壺殘缺	一	上層發見、胎土褐色	16, 1
繪三鳥盤破片	三	上層發見、胎土鼠色、外面唐草及草文	
刷毛目小皿殘缺	三	上層發見、胎土鼠色	
刷毛目鉢破片	一	上層發見、胎土鼠色	
三鳥手鉢破片	一	内面唇手、胎土小豆色、内面刷毛目	15, 2
三鳥手小皿殘缺	三	内面唇手、胎土鼠色、内面刷毛目	15, 1
彫三鳥陶器破片	一	内面無地、胎土小豆色	15, 4
刷毛目小皿	四	中層發見、胎土鼠色、内外刷毛目	15, 4

一 公州郡反浦面鶴峰里陶窯址

刷毛目鉢破片	一個	中層發見、胎土鼠色	八
刷毛目盃破片	一個	中層發見、胎土茶褐色	
三島手盃破片	一個	中層發見、胎土鼠色	
三島手小皿殘缺	三個	中層發見、中一個内外刷毛目 他内面胎手外面刷毛目	15 3
繪三島依壺破片	二個	乙鼠色、胎土甲小豆色	16 2
三島手小皿破片	二個	内層發見、胎土鼠色 内層發見、胎土鼠色	15 5, 6
刷毛目小皿殘缺	三個	内層發見、胎土鼠色 内層發見、胎土鼠色	16 4
刷毛目鉢破片	二個	内層發見、胎土鼠色 内層發見、胎土鼠色	
素燒小皿破片	一個	下層發見、胎土鼠色	16 3

第四陶窯址 圖版第四の4に示す位置にて、第三陶窯址の西南約三十間の處にある。是れ亦前同様白磁燒成の有無を明かにせんが爲めに、白磁の破片の多く散亂して居る指定地外の場所を發掘せしに、一陶窯址を偶然に發見したが、日程の都合上發掘を中止し、其左側に當り、此窯にて燒成せし不完全品を投棄せしものと思はるゝ處を調査した。其上部は本年一月頃盜掘の爲め攪亂されて居たが、地表下約四尺の所は幸無事にして、其處より白磁と刷毛目、三島手の陶片が混合して積重つて居ることを發見した。是によりて白磁も普通の刷毛目、三島手と同時に燒成されしことが明かとなつた。此窯も亦小皿、盃、鉢が大部分を占め、壺は僅少である。

此窯の内部より稍完全の繪三島盃(圖版第(一八)第)が一個發見され、素地鼠色を呈し、釉藥は剝落して光澤はないが、文様は極めて大膽に一氣に描いてゐる。

本陶窯址發見陶器及殘片種別表

品目	數量	備考	圖版
刷毛目小皿	一個	胎土灰色、内外刷毛目	17 6
刷毛目盃	一個	胎土小豆色、内外刷毛目	17 5
繪三島盃	一個	稍完全、胎土鼠色、唐草文	18
繪三島鉢殘缺	一個	胎土灰色、内外面唐草	17 4
繪三島瓶破片	五個	胎土小豆色及鼠色 文様三葉及唐草	
白磁小皿	六個	胎土帶青灰白色 中一個稍完全	17 1, 2
白磁平鉢	二個	胎土灰白色	
白磁鉢破片	一個	胎土黃土色	17 3
白磁平盤	一個	胎土帶青灰白色	

第五陶窯址(圖版第一九) 圖版第四の5に示すが如く、朴氏所有の山麓の傾斜地にある指定地の下部、稍中央より右に偏し上部に向つて發掘を始めたが、中部邊より地表下二尺位の處に、陶器の殘片が深さ約三尺五寸積重つてゐるのを發見した(圖版第(二〇)第)。陶片は上層も下層も同一種

類で新古の別なく、上部に向つて廣さ一間、長さ二間位續いてゐた。然し完全なものは甚だ少く、僅に刷毛目、小皿五個、鉢一個、繪三鳥壺一個及び少し口縁の缺けて居る繪三鳥壺一個を得たるに過ぎず。刷毛目、三鳥手の陶器の破片は多數に發見された。指定地の右端、圖版(第四)の位置に當り古窯址一處を發見した。此窯址に就いては後に述べることにする。此窯は十三室より成つてゐるが、其の第十室(圖版第九)の右壁に接する所より完全なる三鳥手鉢一個を發見した。此鉢は素地綠色を帯びた鼠色にして内面磨手文、外面刷毛目の稀品である。此窯にて焼成せしものは刷毛目、三鳥手の小皿鉢が大部分を占めてゐたが、多少繪三鳥壺、繪三鳥片口も造られてゐた。

本陶窯址發見陶器及殘片種別表

品目	數量	備考	圖版
刷毛目小皿	五個	胎土鼠色、内外刷毛目、中三例、完全他多少破損、刷毛目	25, 1, 2
刷毛目皿殘缺	一個	胎土鼠色、内面刷毛目、外面草文	25, 4
刷毛目鉢	九個	胎土小豆色、内外刷毛目、中二例、完全内外刷毛目	27, 28, 1, 2
刷毛目盤	四個	胎土灰色、内外刷毛目	
刷毛目平盤	二個	胎土鼠色、内外刷毛目、小破損	27, 3, 4
刷毛目皿破片	二個	胎土灰色	

刷毛目鉢	三個	胎土鼠色、内外刷毛目	27, 5, 6
刷毛目平鉢殘缺	二個	胎土鼠色、甲内外刷毛目、乙外面刷毛目、丙内面無文	
刷毛目筒形陶器殘缺	一個	胎土鼠色、内外刷毛目、脚二本缺損	
三鳥手小皿	一個	胎土鼠色、内面磨手、外面刷毛目、多少破損	25, 3
三鳥手皿	三個	胎土鼠色、内面磨手、外面刷毛目	
三鳥手皿殘缺	一個	胎土鼠色、内面磨手、外面唐草	
三鳥手盤	二個	胎土鼠色、内面磨手、外面刷毛目	30, 3
三鳥手鉢	一個	胎土鼠色、完全内面磨手、外面刷毛目、釉藥透明	31
三鳥手盤破片	四個	胎土小豆色、及鼠色、内面磨手、外面刷毛目	30, 4
三鳥手平鉢	二個	胎土鼠色、内面磨手、外面刷毛目	29
無文三鳥手鉢殘缺	一個	胎土、帶黃灰白色	
繪三鳥壺	二個	胎土鼠色	34, 1, 2
繪三鳥壺殘缺	七個	胎土鼠色及小豆色	33
繪三鳥瓶	一個	胎土鼠色、釉藥透明、口部缺損、草文	32, 1
繪三鳥瓶破片	四個	胎土鼠色	34, 3, 4, 5
繪三鳥水注殘缺	一個	胎土鼠色、釉色透明	26, 2
素燒瓶	一個	口部小破損	

一 公州郡反浦面鶴峰里陶窯址



繪三鳥依壺破片	二個	胎土鼠色	二三
繪三鳥盤	六個	胎土小豆色及鼠色、内面 刷毛口外面唐草及草文	26 26 1 3
繪三鳥盤殘缺	二個	胎土小豆色、内面唐草 外面滿文、乙外面唐草	26 1
繪三鳥脚附杯殘缺	一個	胎土鼠色、内面刷毛口 外面唐草	
繪三鳥脚附杯	二個	胎土内面草文、外面刷毛口 外面唐草	30 5.6
繪三鳥平鉢殘缺	一個	胎土鼠色、内面雙魚文 外面唐草	32 2
繪三鳥平鉢破片	一個	胎土鼠色、内面刷毛口 外面波文	
繪三鳥平鉢破片	二個	胎土甲鼠色、乙黃土色 内外面唐草	
彫三鳥平鉢破片	一個	胎土鼠色、内面魚文	
刷毛口片口破片	一個	胎土鼠色	

第六陶窯址(圖版第三五) 圖版第四の6に示せる位置にて、指定地の下部中央より右に偏して上部に向ひ發掘を行つた。指定地の下部は本年一月頃發掘されて混亂し、此處に窯が二つ相並んで築かれてゐた様であるが、既に破壊されて僅かに痕迹を残すのみであつた。發掘せし處の断面を見るに、表面下約二尺の處に厚さ約二尺の陶片層があり、其下に土層が約六寸あり、又約二尺陶片が重つて居る。然し土層の陶片と下層の夫れとは同一種類のもので、新古の

區別がなかつた。發見品は完全なる刷毛口小皿六個、刷毛目壺一個、繪三鳥壺一個、其他多數の陶器の断片である。

本陶窯址發見陶器及殘片種別表

品名	目録	數量	備考	圖版
刷毛口小皿	七個	胎土鼠色、内外刷毛口 中二個完全、他稍完全	36 1.2.3	
刷毛口小皿	二個	胎土鼠色、内外刷毛口	36 4	
刷毛口鉢	三個	胎土鼠色及小豆色、内外 刷毛口中一個完全	38 5.6	
刷毛口鉢	六個	胎土鼠色及小豆色、内外 刷毛口中一個破損、他稍完全	39 1-4	
刷毛口盃鉢	五個	胎土鼠色、内外刷毛口	40 1	
刷毛口壺	一個	胎土鼠色、稍完全	41 1	
三鳥手小皿殘缺	二個	胎土灰色、甲外面唐草、手 乙内面唐草、外面刷毛口	36 5.6	
三鳥手盤殘缺	三個	胎土鼠色及小豆色、内面 唐草、外面刷毛口		
三鳥手盤破片	三個	胎土鼠色、内面唐草、手 外面刷毛口		
三鳥手平鉢殘缺	二個	胎土鼠色、甲内面唐草、手 乙内面木葉、外面刷毛口	39 5.6	
三鳥手瓶破片	一個	胎土鼠色		
繪三鳥壺	一個	完全胎土鼠色、稍完全 唐草文	41 2	

一 公州郡反浦面鶴峰里陶窯址

繪三鳥壺破片	二個	胎土鼠色、口部より肩にかけての小破片	一四
繪三鳥瓶破片	六個	胎土鼠色及灰色	
繪三鳥皿殘缺	一個	文様魚文	
繪三鳥皿殘缺	一個	胎土灰色、内面及魚文	
繪三鳥皿殘缺	二個	胎土草文	37
繪三鳥鉢殘缺	一個	胎土黄灰色、内面刷毛目	42
繪三鳥盤殘缺	六個	胎土草文及木葉文	2
繪三鳥盃臺	一個	胎土鼠色、内面刷毛目	
繪三鳥脚附杯	一個	胎土鼠色、内面無地	41
繪三鳥把附平鉢破片	一個	胎土小豆色、内面刷毛目	38
繪三鳥依壺破片	一個	胎土小豆色、内面刷毛目	1-4
繪三鳥扁壺破片	二個	胎土鼠色、内面草文	
繪三鳥盞	一個	胎土鼠色、内面草文	
彫三鳥盞形陶器殘缺	二個	胎土鼠色、草文	
陶版墓誌斷片	一個	胎土灰色	
素燒蓋殘缺	一個	胎土灰白色	
白磁盤	三個		40 42 2 3

### (四) 陶窯の構造

第一陶窯 窯は圖版第三第五に示すが如く三個左右に相並んで發見された、之れを假りに向つて右よりA・B・Cと名づける。又圖版第三の點線にて示す位置に陶窯盜掘の形迹があり、猶調査せば此外數個の窯跡を發見することと思ふ。

A 陶窯址(圖版第五) 山麓の傾斜面にありて三個の中、右側に位し、長さ六十四尺七寸、廣さ下の方で約四尺、中央で約四尺六寸五分、先端で三尺九寸あり、平均上部三寸、中央二寸六分、下端二寸五分勾配の窯を築いたのである。先づ極めて淺き溝を勾配なりに掘つて、此溝の左右の兩壁から粘土にて穹窿形の天井を架け、後方最高所の後壁に二つの煙出孔を設け、最低所に長さ六尺一寸、廣さ四尺一寸五分の焚口を設けたのであるが、内部の高さは既に破壊されて不明である。此窯の内部は前後に六處の隔壁を設けて六室に區畫し、隔壁の脚部に三個の通焙孔を設けて居る。假りに下端より第一室乃至第六室と名づける。第三室第四室第五室の隔壁の通焙孔間の東柱現存し、猶三個所は區畫の形迹があつたから都合六室に區畫したことが明かである。各室にB窯復原圖に示すが如く焚口兼出入口及び色見孔を側壁に設けたのであらう、窯床には砂を敷いてゐた。此窯は焚口の近くの所より圖版第七の如く右に少し曲つて居るが如何なる理由なりや不明である。

B 陶窯址(圖版第五) 此窯はA・B・C三個の中央に在つて、其遺址最もよく遺つてゐる。傾斜面

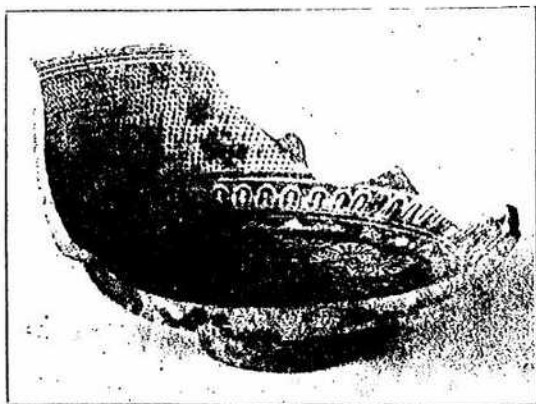
に長さ六十二尺、廣さ先端で三尺七寸、中央で四尺九寸、下の方で廣さ四尺六寸、勾配は上部で平均一寸八分、中部で二寸七分、下部で二寸四分の稍や中腹れのした窯を築いたのであるが、高さは既に破壊されて明かでない。先づ極めて浅き溝を勾配なりに掘つて此溝の左右の兩壁から粘土にて穹窿形の天井を架け、後端最高所の後壁に二個の煙出孔、最低所に焚口を設け、焚口の長さは七尺三寸、廣さ四尺四寸である。此窯の内部は前後に五個の隔壁を設けて五室に區畫し、其隔壁の脚部に各三個の通焙孔を設けてゐる。二處の隔壁は稍完全に遺存し、他の三處は圖面の點線で示す位置に區畫の形迹があつたから、畢竟隔壁を五ヶ所設け、都合五室に區畫してあつたことは明かである。各室には出入口兼焚口及び色見孔を側壁に設けてあつたのであらう。亦窯床には砂を敷いてゐた。窯の内部から白磁の破片一個及び稍完全の瓶二個、壺一個を發見した。何れも鉄釉を施した黒綠色のものである。圖面の點線は此陶窯の復原圖を示したのである。

**C 陶窯址** (圖版第五) 三個中左側に位置して傾斜面に造られた窯で、長さ七十尺三寸五分、廣さ先端二尺六寸六分、中央四尺五寸、下の方で四尺五寸、勾配平均上端一寸六分、中央一寸七分、下端一寸六分にして實測圖(圖版第九)に示すが如く右方に彎曲せる細長い形である。傾斜面に極めて浅い溝を作り、溝の兩壁から粘土にて穹窿形の天井を架け、最高所の後壁に二つの煙出孔、最低所に焚口を設けた窯で、焚口の長さ七尺三寸六分、廣さ四尺一寸である。窯の中央部より稍や下方に隔壁遺存し、其隔壁の脚部に三個の通焙孔を設け、猶六ヶ所に隔壁の形迹があるので、都

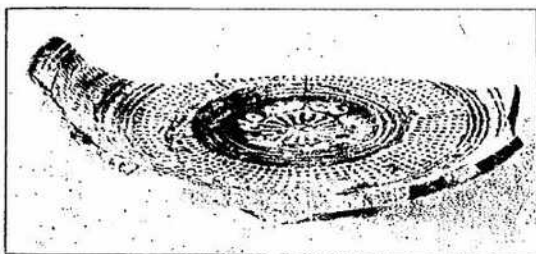
合六室に區畫されてゐたことが分る。各室には出入口兼焚口及び色見孔を設けたのであらうし、亦窯床には砂を敷いてあつた。此窯は前記の者より勾配緩くして横反りが多い。

**第五陶窯址** (圖版第一九) 山麓の傾斜面に圖版第四に示すが如き位置に、長さ百三十七尺八寸五分、廣さ下の方で七尺五寸、中央五尺五寸、先端三尺三寸、第七室より上部は廣さを減じてゐるにして、平均三寸勾配の窯を築いたのであるが、高さは破壊されて不明である。先づ極めて浅き溝を勾配なりに掘つて此溝の左右の兩壁から粘土にて穹窿形の天井を架け、最高所の後壁に二つの煙出孔(圖版第二二)最低所に長さ約七尺四寸の焚口を設けたもので、焚口の所は既に破壊され明かでないが、第一陶窯址の窯の焚口と同形のものであつたであらう。實測圖に示す如く、左壁向つてに接し廣さ元の方で三尺高き六寸、先端にて廣さ一尺九寸、高さ五寸五分の段を設け、内部を前後に十三處の隔壁を設けて十三室に區畫してあつた。今假りに之れを第一室乃至第十三室と名づける。第七室までの各隔壁の脚部には三個づゝの通焙孔を設け、第八室より第十三室までの各隔壁の脚部には二個づゝの通焙孔を設けてあつた。第六室の隔壁(圖版第二三)及び第八室の隔壁は完全に遺存し、其他通焙孔間の東柱(圖版第二四)は五處現存してゐたが、猶六所は圖面に明な様に區畫の形迹があつたから、畢竟隔壁を十三所設け、都合十三室に區畫したのである。第七室、第八室の右壁向つての中央に出入口兼焚口(圖版第二五)の形迹があつたから、各室に出入口兼焚口を設け、又現今朝鮮に行はるゝ陶窯に見るが如き、色見孔を各室後部に設けてゐたのであらう。是れ亦窯床は砂を敷いてゐた。

余等調査の後、朴詰熙氏更に此附近を發掘し第五陶窯址の右側(向つて)に當り圖版第四に點線にて示すが如き位置に六個の陶窯を發見した。是れを第七陶窯址乃至第十二陶窯址と名づける。此中第九陶窯は舊窯の跡に又新窯を造つた形迹がある。猶朴氏所有の山麓の陶窯址を全部發掘調査したならば、更に多數の陶窯址を發見出來やう。是等の窯で匣鉢を用ひず、



第九陶窯址出土三島手鉢片一第 圖四第



第八陶窯址出土三島手小皿一第 圖五第

陶器の高臺の下に數個の硃砂を置き、重ねて還元炎にて燒成したのである。火度は専門家の言によれば、せうげる雫八番乃至十番即ち攝氏千二百五十度乃至千三百度との事である。第七陶窯址第八陶窯址發見のものを見るに、高麗青瓷の上釉の如き透明の硝子様をなせる帶青灰綠色釉の三島手のみを燒成してゐたやうであるが、しかし青瓷の釉とも大に異つ

てゐる(第五圖第四圖) 第九陶窯址乃至第十一陶窯址發見のものは第五陶窯址發見のものと同である。第十二陶窯址は主として白磁を燒成した様である。

### (五) 陶器の種類

既記の陶窯址にて發見せし陶器を、次の六種に分類することができる。

- 一 三島手
- 二 刷毛目
- 三 繪三島
- 四 彫三島
- 五 黒釉
- 六 白磁

又形状より來れる種別を擧ぐれば、  
 獸蹄、依壺、扁壺、胞衣壺、爵形陶器、盞形陶器、鉢、皿、托、盞、合子、脚附杯、水注、水滴、楓、植木鉢、押型、瓦碑版等——多種多様である。

三島手 高麗時代の青瓷象嵌の變化したもので、陶器の表面にあらはされた細小の文様が、昔時の三島屏に似て居るから此名を得たと云ふことである。しかしそれ以外、胎土の表面に白土化粧を施した同種類の者は同しく三島手と稱してゐるが、茲にては後に述べる刷毛目、彫



三島、繪三島を除く他の者を三島手と稱してゐる。文様は押型を用ひて点線文、波状文を縦列に或は蛇の目文、劔先文、雷文等を横列に器物の表面に押付け、白土を其上に塗り、凹所に白土を嵌ませしめ、文様外の白土を削り取り、釉薬を施して焼成したもの、或は篋の類を以て龍、柳、花、唐草、文、牡丹文の如きものを彫つて白土を其上に塗り、凹所に白土を嵌ませしめ、更に釉薬を施したものを、或は押型と篋とを併用したものもある(圖版第五八)。

又内面を三島手文とし外面を刷毛目としたもの、内面を刷毛目とし外面を三島手文としたもの、内外共に三島手文としたものもある。更に細小の花文の密集、或は蝶形文の連続したものを別に花三島と云ふて居る。又往々文字を文様の間に容れたものもある。是等の文字は白象嵌で、慶州長興庫、昌原長興庫、長興庫、長安庫、密具、内膳、内膳、或は鐵釉で、禮賓、内資寺、洪字、大等と書かれて居る。經國大典によれば、長興庫は、掌席子、油籠、紙地等物、内膳は、掌各宮各殿供上二品以上酒及倭野人供儀織造等事、禮賓は、掌賓客、燕享、宗宰、供儀等事、内資寺は、掌内供米、酒、醬、油、蜜、蔬、果、内宴、織造等事とあり、即ち是れ等の文字あるものは皆其官署所用の器具であつたのである。而るに三島手以外の者には是れまで文字のあるものは僅かに「戒」(圖版第六)、(同參照)、「果」と書かれた盃及び鉢が発見されて居るのみである。反浦面鶴峯里にては、成化二十三年、皇明弘治三年、嘉靖十五年の年號銘ある墓誌銘版の断片、其他多數の墓誌銘版の断片が発見されて居る。

**刷毛目** 胎土が鼠色で、且つ層が粗く美しくないから、白土を毛の強い刷毛で一氣に器物の表面に刷いて其上に釉薬を施して焼成したもので、刷毛のあとが明瞭に残つて居るのがある。

(圖版二八)

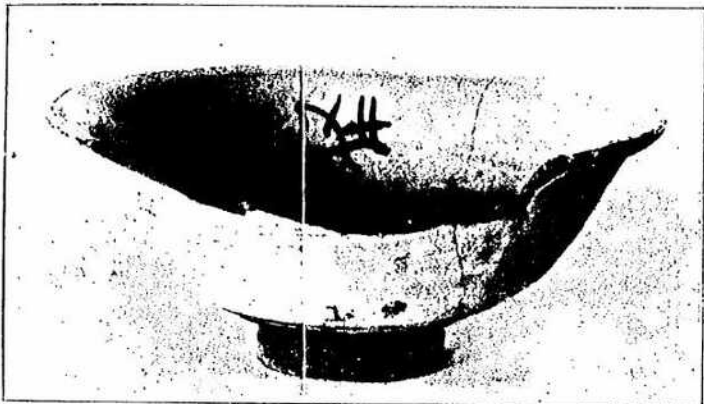
是れ等は刷毛目と云ふ名に最も相當はしい名稱であつて、一種の雅味があり、茶人の最も愛玩する處である。

**繪三島** 繪高麗より變化したもので、胎土の上に白土を塗抹し、其上に鐵釉で模様を描き、上釉を施して焼成したものを云ふのである。其文様は蓮花、牡丹、唐草、草葉、菱形、魚等の如きものを用ひ、頗る豪宕勁健の性質をあらはしてゐる。

圖版第四八は繪三島の代表的のもので、文様の精巧筆力の雄勁なことは他に殆ど類例を見ない。

**彫三島** 胎土の表面に白土を塗抹し、篋の如きものを以て文様を描き、地土をあらはし、更に上釉を施して焼成したのである。其文様は頗る粗大、放膽で、雙魚、木葉、唐草、蓮瓣の如きものを多く用ひてゐる。

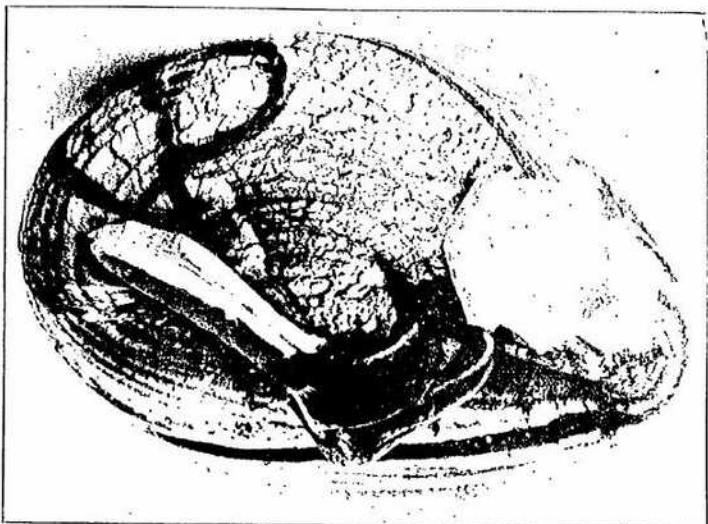
**黒釉** 器物の胎土の上に鐵釉を施したもので、其釉は帶茶黒色をなしてゐる。總して反浦面発見のものは匣鉢を用ひず、高臺の下に數個の硃砂を置いて重ね焼きにし、然るに此手の大部分は硃砂の代りに器物の



第六圖 刷毛目 器

一 公州郡反浦面鶴峯里陶器址

底部に刷毛にて白土帯(圖の(三))を一氣に描き、其所を重ねて焼成してゐるが、第一陶窯址發見

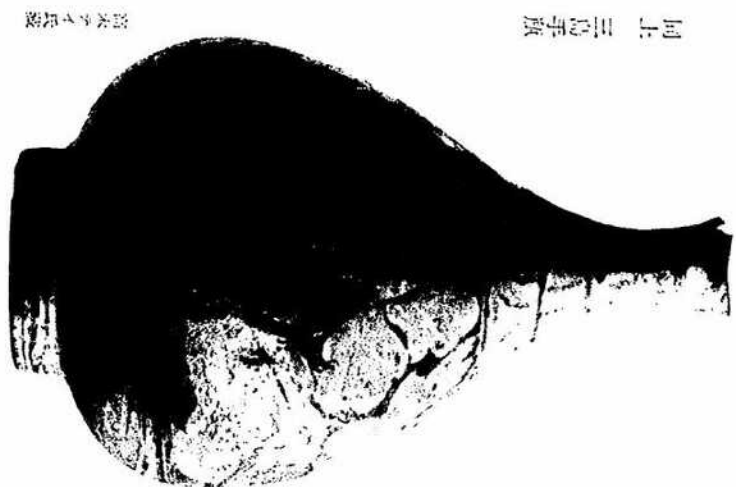


瓶潰るせ着附の片破磁白 圖七第

のものは大部分之に屬してゐる。

白磁 反浦面の陶窯址より多少青味を帯びた白磁が發見され、胎土は帶青灰白色で堅緻である。此種の者は從來三島手、刷毛目より後れるものと思はれて居たが、今回の調査により刷毛目、三島手の破片と相重り、或は繪三島瓶の肩に白磁の皿の破片が附着(七圖第)して發見され、又第一陶窯址B窯の内部よりも發見せられたから、確かに同時に焼成されたものであることが明かとなつた。

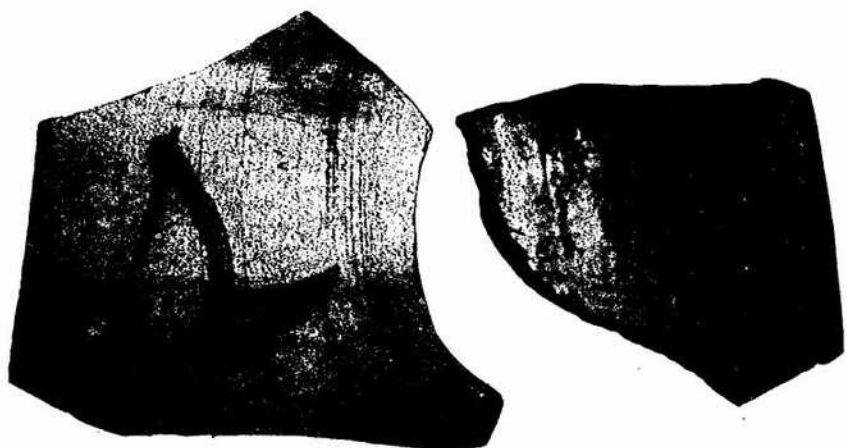
總して反浦面より出土せる陶器は破損、歪曲、焼きず、或は數個癒着して、一として完形の者はないが、一種の雅味に富んでゐるから好事家に喜ばれ、釉薬は透明にして暖く柔みがあつて、胎土は一般に堅緻で、鼠色の者が最も多く、褐色のものは少ない。然しこれは焼成



同上 三島手原

同大 三島手原

同大 三島手原 (三)



公州面玉龍里出土 陶器破片

本館蔵

(三)

時の火度の関係で鼠色とも褐色ともなるのである。底足は内方に向つて斜めに刻られ第一陶窯址のものを除くの外は一般に技術は粗雑であるが、荒削りでは雄大の感があり、又文様は粗大なる曲線で左右對稱的に表はした者が多い。器物には瓶、鉢、皿等が最も多く發見され、往々墓誌陶版に年代銘のある者があつて、反浦面陶窯の年代を決定する參考資料となつてゐる。

(附記)

公州面玉龍里陶窯址 公州大田間街道公州より約四丁、右側の丘陵の裾に陶窯址が遺存してゐることを聞き、野守は反浦面の調査の際之を踏査したるに、既に所々盜掘されたるも、陶窯址は猶完全に遺存せる如く、只日程の都合上發掘調査を他日に期することゝした。散亂せる陶片より見れば普通の三島手刷毛目及び白磁等であつて、反浦面出土のものよりは一般に胎土は良質の様で帶青鼠色をあらはし稍堅緻である。拾得せし其破片の種類は左の如くである。

品名	個數	挿圖
三島手盤破片	六個	81
刷毛目皿破片	一個	
繪三島壺破片	一個	81
白磁平盤破片	一個	

一 公州郡反浦面鶴峰里陶窯址

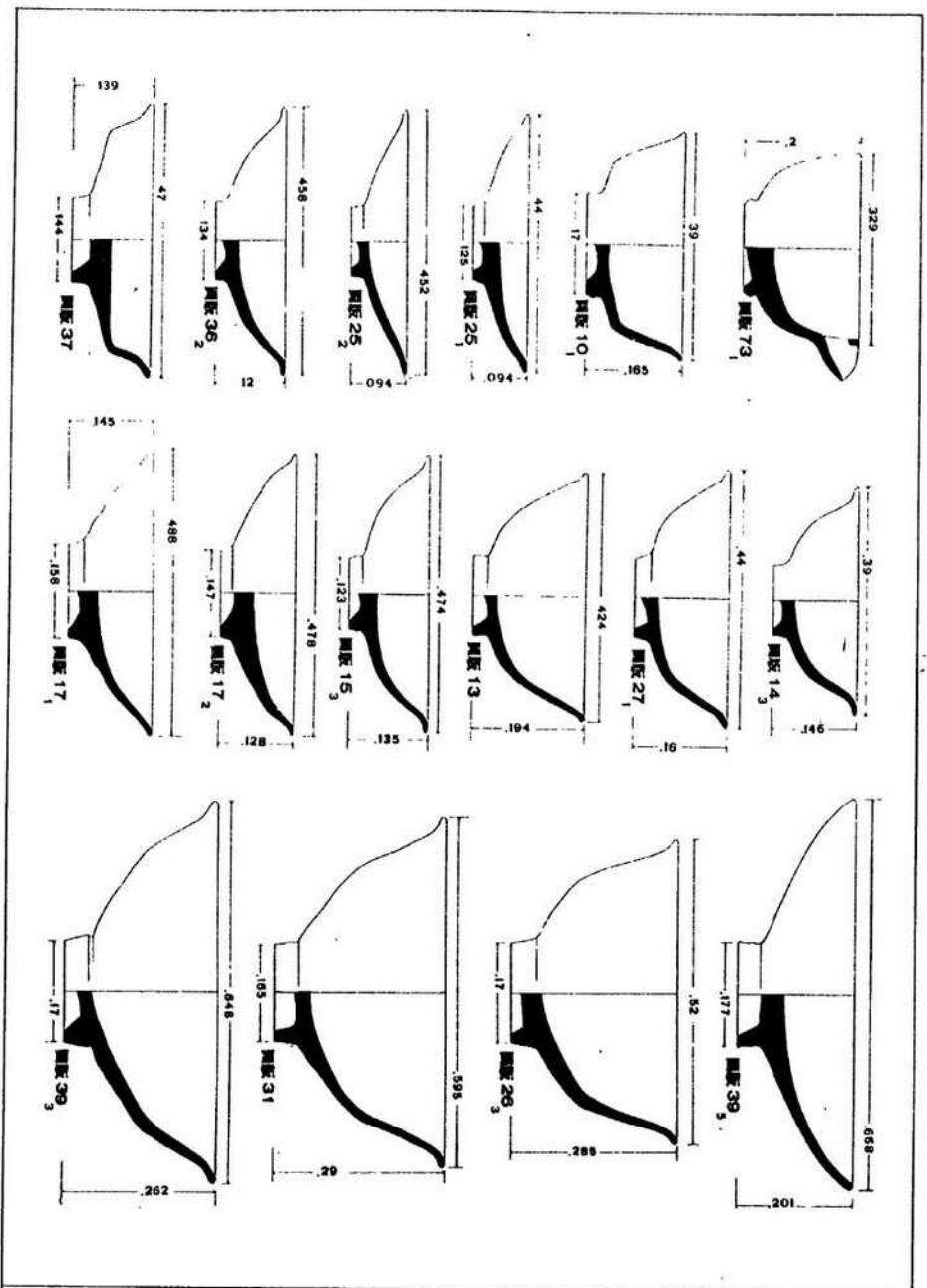
(六) 發見陶器の年代

三島手及び刷毛目の年代は、従来の學者往々高麗末期に始まり李朝に及んで居るものとして居るが、其製作の技巧、釉藥及び文様の性質は、高麗時代の青磁器と大に性質を異にしてゐる。此反浦面窯址出土の者は、三島手、刷毛目の最も優逸なもので、最も細麗にして雄大の特色をあらはしてゐる。而かも其製作が次ぎに論ずるが如く、李朝初期に行はれてゐたことが明白であるから、此種の陶器は主として李朝初期に起りし者にして、高麗時代まで溯らぬ者と考へる。即ち器物の形態及び文様より見れば、各時代によつて、それぞれ特有の形態、文様をなしてゐる。三島手及び刷毛目は高麗時代の青磁器よりは稍や深さを増し、手法の性質により厚手の感が深く、且つ高臺は雄大である。又盞及び鉢の縁の曲線及び瓶の頸から肩にかけての曲線、腰より底部にかけての曲線は、挿圖第九圖、第十圖、第十一圖に示すが如く、彼と多少性質を異にし、亦文様は粗大なるに、彼れは優雅の趣きがあり、形狀、技巧、文様、釉藥共に固有の特質をあらはしてゐる。

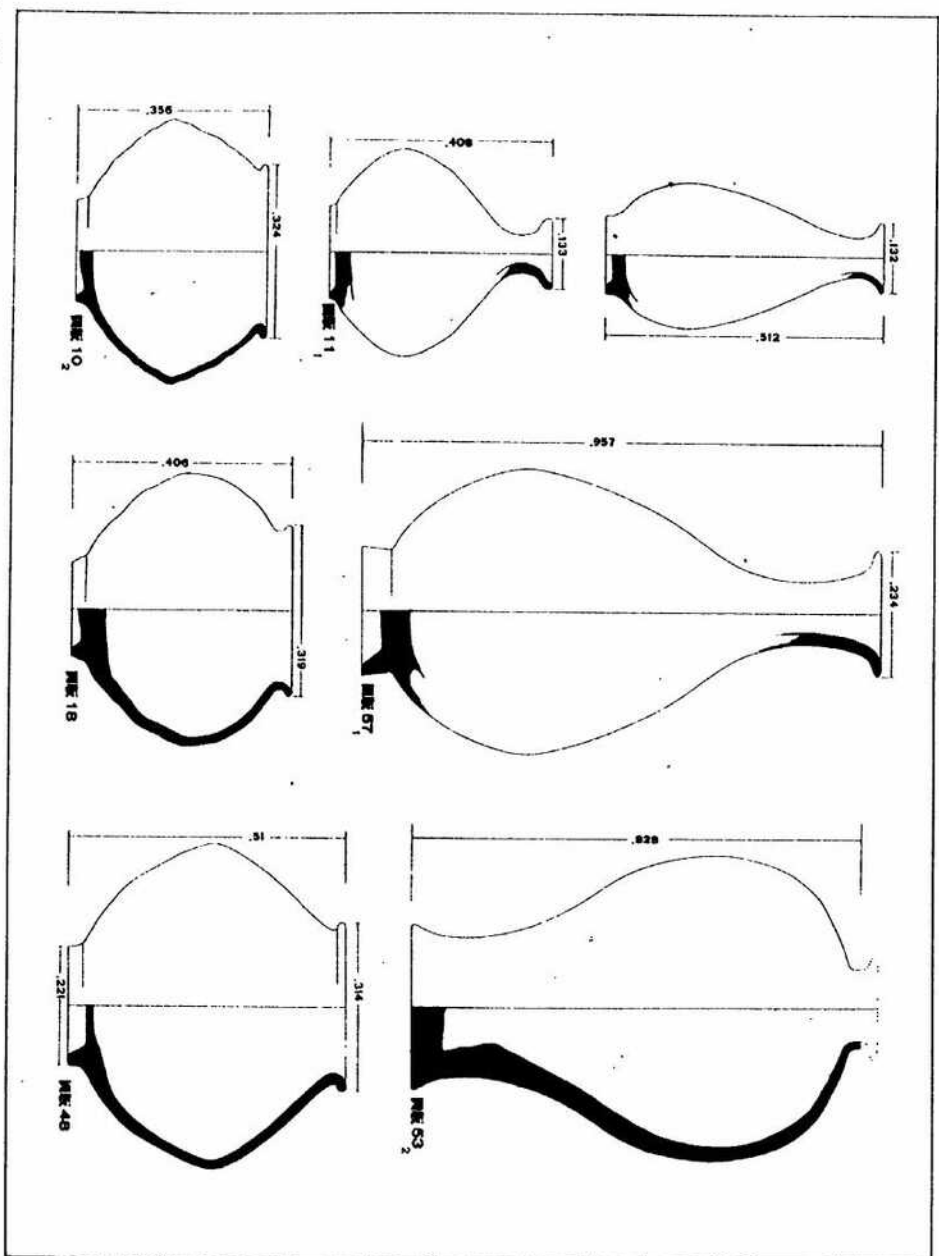
又文献によれば、

世宗實錄地理誌公州郡の部に

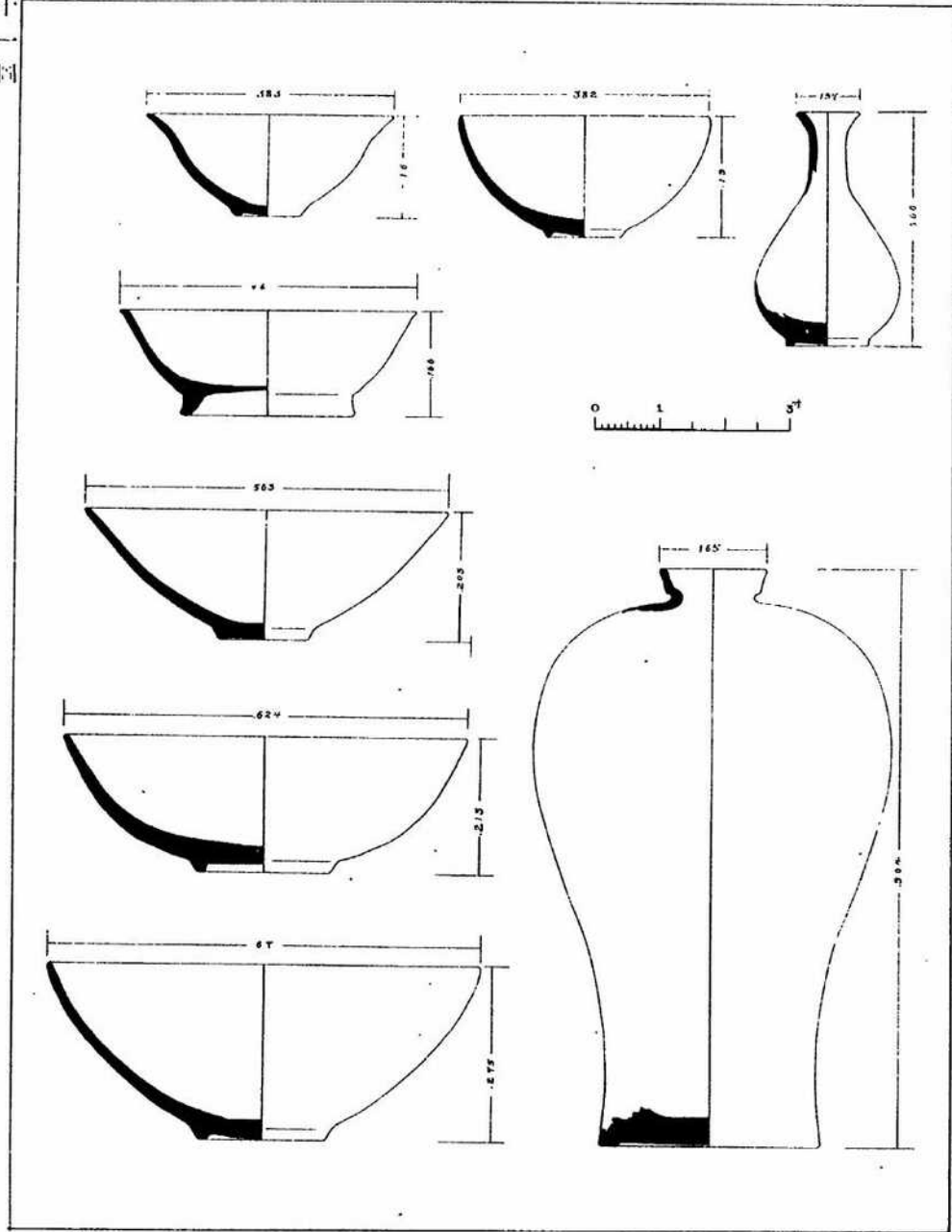
磁器所二 一在州北東知村 一在州東東鶴洞中品



反浦面出土陶器實測圖



反浦面出土陶器實測圖



高麗陶器實測圖

此の東鶴洞と云ふのは、今回調査の反浦面鶴峯里の陶窯址たること明かである。朴氏所有山麓の陶窯址より發見の三島手平鉢の破片の裏面に「内資寺」禮寶(圖七第)と鐵軸にてかゝれたものがある。東國輿地勝覽京都の部によれば、

内 資 寺

在西部仁達坊掌内供米糶酒醬油蜜蔬果内宴織造等事。正、副正、僉正、判官、主簿、直長、奉事各一人。

禮 寶 寺

在議政府南掌寶客宴享宗宰供饋等事。正、副正、僉正、各一人、提檢、別坐、別提、凡六人、判官、主簿、直長、奉事、參奉各一人。

とあるを見れば内資寺、禮寶寺使用のものを反浦面にて製作したのである。内資寺は高麗朝では義成翁と云つてゐたが、李朝太宗三年に内資寺と改名したのであるから、此三島手は太宗三年以後のものでなくてはならぬ。又禮寶は内資寺の陶片と同時に同一窯址にて發見されたから、高麗朝のものでなく、李朝の禮寶寺で是れ亦太宗三年以前に上らず、其以後のものに相違ない。又別に、景泰、成化二十三年、弘治三年、嘉靖十五年等の墓誌銘版(圖版第四五)の破片及び左記の陶版(圖版第三四)が反浦面の窯址から發見された。

宜 寧 郡

承義副尉前正南乙思墳廓

一 公州郡反浦面鶴峯里陶窯址

新龍山墓内密地調査報告

二六

又公州邑附近の墳墓出土のものに反浦面発見の品と同種類なる左の如き墓誌陶版(挿四第)がある。

前隊長仇松、女子仇氏、景泰元年、庚午四月三十日癸卯、身故、一男梁自明、二男承政院別駕梁自敏、三男進義副尉左軍三番銃筒衛梁自昌、一女梁氏、夫進義副尉左軍一番銃筒衛田典秀、二女梁氏、墳墓、裏に

公州東村後金生遺作爲白乎石、

又出所不明ではあるが、反浦面出土のものと同性質の左記の陶版が李王家博物館に藏せられてゐる(挿四第)。

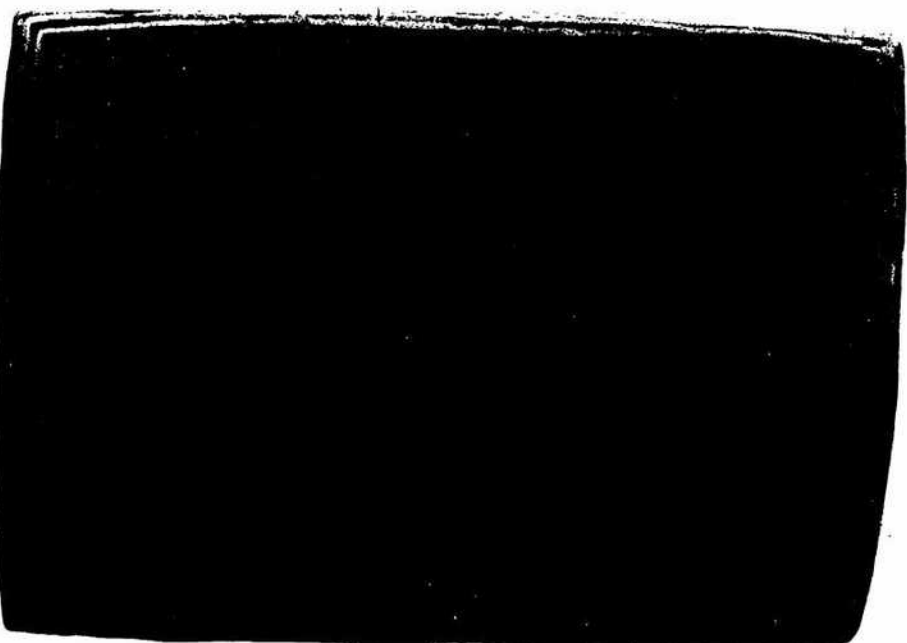
全羅道觀察使曹沅之墓

第十三圖 墓誌陶版(長九寸五分幅二寸二分)

李王家博物館藏



然るに國朝人物志に、



墓誌陶版表面及裏面 本館博物館藏



武蔵山内と其の遺蹟

又公州邑附近の墳墓出土のものに反油面終見の品と同種なる左の如き墓誌附版(抄写)がある。

前隊長仇佐、女子仇氏、景泰元年庚午四月二十日卒、身故、男梁自開、二男亦政、院別駕梁自敏、三男進義、副尉左軍三番、録論、梁自昌、二女梁氏、夫進義、副尉左軍一、番、録論、衛田、貞系、二女梁氏、墳墓。

裏に

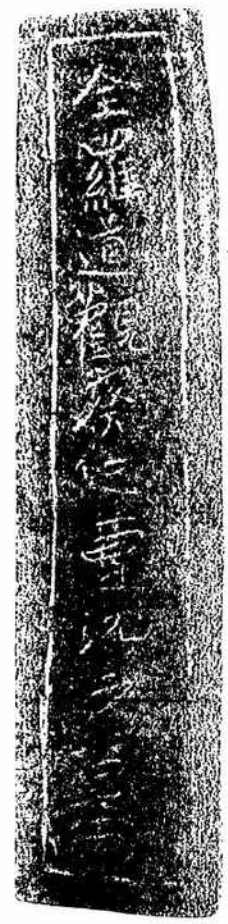
公州東村後金牛遺存、自手、有、

又出所不明であるが、反油面出土のものと同じ性質の左記の附版が、李王家博物館に蔵せられてゐる(抄写)。

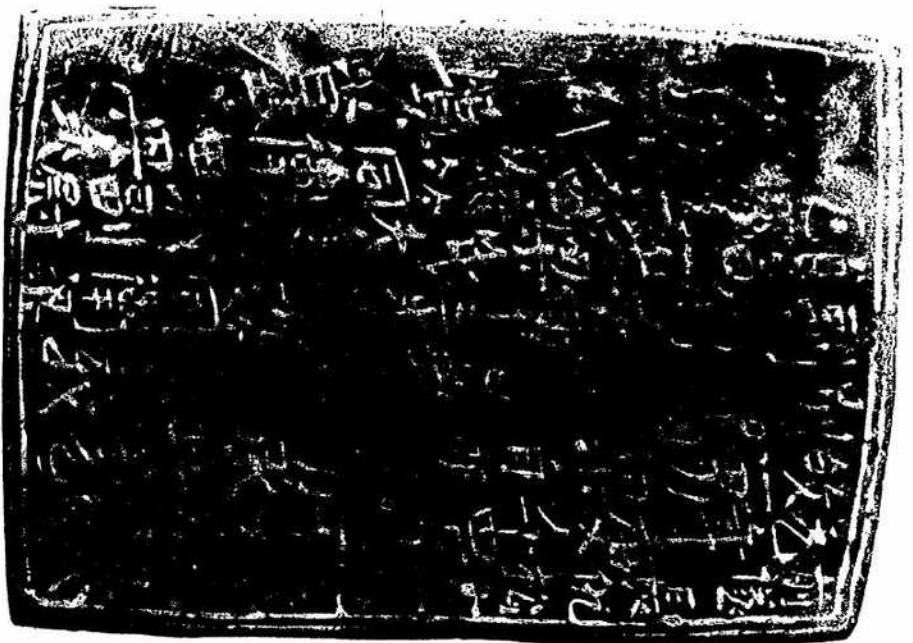
全羅道觀察使曹江之墓

年十三月 墓の石は五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

李王家博物館蔵



然るに因朝人物志に



公州東村後金牛遺存

全羅道觀察使曹江之墓

曹錫文「字順甫初名碩門、昌寧人、觀察使沅子、力學工文、年二十進士、世宗甲寅文科爲修撰、以微罪見罷」

云々とある。即ち曹沅の子錫文は世宗朝の人であるから、此陶版は恐らく世宗朝に焼成された者であらう。

更に反浦面出土の墓誌に左の銘刻ある者がある。

朝鮮公州牧使……

令人姜氏泗川……

憲糾正……

朝鮮公州とあれば無論高麗朝にあらず、李朝に属せしことは明かである。

此の如く形態性質により、内資寺の銘ある陶片により、明の景泰元年や成化二十三年、弘治三年、嘉靖十五年等の年號銘及び朝鮮公州云々とある墓誌版によりて、反浦面に於ける三島手陶器が少くも李朝初期に製作されしこと明白にして、是れと混在して出土せる刷毛目や白磁や乃至黒釉のものも、同様李朝初期に作られし者なることが明白となつた。故に此反浦面の窯址の發見により従來各處より發見せられた陶器銘に「長興庫」(補圖第十四)「内贍」(補圖第十五)「禮賓等」とあるは高麗朝のものでなく、李朝の「長興庫」(補圖第十四)「内贍」(補圖第十五)「禮賓等」とあるは創建にて壬辰役に焼け、其後李太王の初年まで荒廢せし景福宮の敷地内より三島手の鉢の破片の内面に白象嵌で内贍(補圖第十四)又三島手小皿の内面に白象嵌で内贍(補圖第十五)或は底足の

裏に内贖(本圖第十)と彫つてあるものが發見せられてゐる。内贖寺は高麗朝で徳泉庫と稱し李朝太宗三年に内贖寺と改名したものであるから此三島手は太宗三年以後のものであることは明かである。其他景福宮内より多数の三島手の陶片を發見することも、此三島手が高麗まで溯らず李朝初期に屬する者たることを確むる上に於て傍證となり、又濟州島旌義附近の傳將軍塚から副葬品として、手法、性質から明かに李朝初期の製作と認むる蓋附銅鏡一個、鐵製剪刀一個と共に反浦面出土のものと同性質の刷毛目瓶三個、彫三島瓶一個、白磁盃一個、白磁鉢三個、白磁皿二個等が發見されて居るから、之又有力なる傍證となることと思ふ。

三島手盤内面及側圖

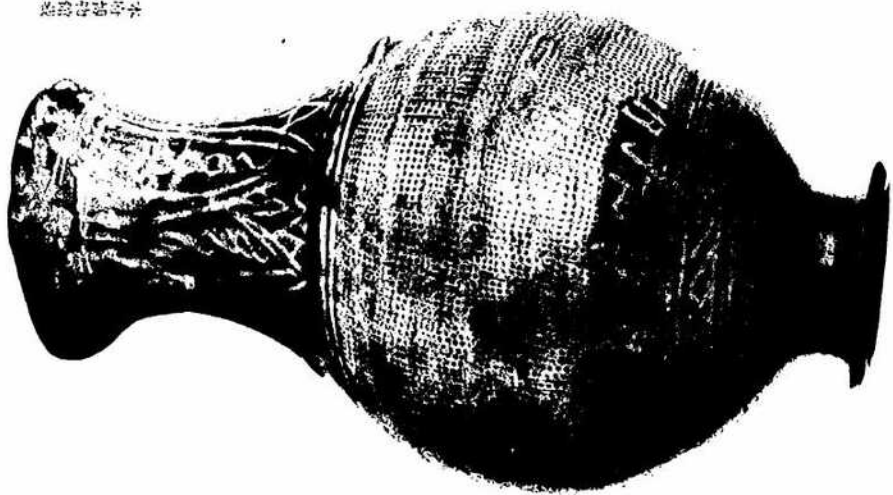


本王家博物館藏



口徑四寸六分  
高二寸三分

三島手瓶



大分県立歴史博物館蔵

第十五圖

口径二寸八分  
高さ二寸五分

三島手鉢側面及内面



大分県立歴史博物館蔵

口径五寸四分  
高さ二寸五分

(1)



(2)

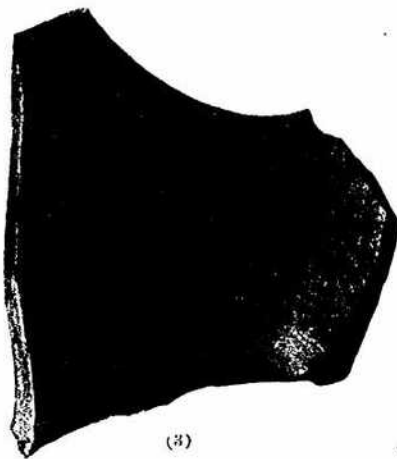


(1)

景福宮内出土三島手皿殘缺内面及三島手皿殘缺裏面



(2)



同上 三島手鉢殘缺内面及外面

【附 録】

(一) 余等發掘以外の反浦面鶴峯里出土陶器

余等發掘の前後に於て、反浦面鶴峯里なる陶窯址より多數の陶器の殘片が發見された。其の大部分は焼き損として窯工から棄散されたものではあるが、中には參考資料として頗る重要な者もある。今特に注意すべき者を挙げ、之を概説することとする。即ち圖版第四三乃至第八一に示す所の者である。

圖版第四三(一) 墓誌陶版斷片

本府博物館藏

墓誌版の右方上部の隅角に當れる殘片にして、朝鮮公州牧使云々の刻銘があるから、此墓誌版が朝鮮時代に屬することが明かである。當初は蓋の在つた形迹が縁の手法に見えてゐる。

圖版第四三(二) 墓誌陶版斷片

本府博物館藏

墓誌版の斷片にして、何人に屬するや明かでない。白化粧を施せし上に鐵釉にて文字を書いたものである。文中明國との交渉が見えてゐるから詳細に研究せば、何時の頃で何人の事績であつたかを推定することができる様に思はれる。

圖版第四四(一) 墓誌陶版斷片

本府博物館藏

陶版の斷片にして、表面及び側面に白土を塗抹し其上に鐵釉にて墓誌文を書いてある。文中に成化二十三年とあるのは、其年代を正確に示す點に於て貴重な參考資料である。

圖版第四四(二) 墓誌陶版斷片

本府博物館藏

墓誌版の斷片にして、胎土鼠色、表面に白土象嵌にて文字を表してゐる。文中に「庚辰」とあるが、單に之れのみにては年代は明かでない。

圖版第四五(一)(二) 墓誌陶版斷片

本府博物館藏

何れも墓誌版の斷片にして、鐵釉にて、嘉靖十五年丙申及び「皇明弘治三」と書かれてゐる。是れ亦此種陶器の年代を判定する上に於て、有力な參考資料である。

圖版第四六(一) 三島手皿側面及内面

本府博物館藏

胎土鼠色、内面は木葉狀を圈外に白土象嵌とし、圈内に鐵釉にて「洪字」と書し外面は刷毛目である。此洪字と云ふのは官著の倉庫の架棚などの號であらう。

圖版第四六(二) 墓誌陶版

本府博物館藏

胎土の表面に白土を濃く塗り、其上に鐵釉にて左記の文字が書かれてゐる。

宜寧郡

承義副尉前正南乙思墳廡

圖版第四七(一)(二) 三島手平鉢殘缺

本府博物館藏

朴基熙氏所有の山籠の陶窯址から出土したもので、胎土鼠色、内外面唇手にして、一は裏面に「禮賓」は「内資寺」と鐵釉にて書かれてゐる。是れ等は大部分缺損してゐるが、此種三島手の年代を定める上に有力なる資料である。

圖版第四八

繪三島壺平面及側面

口径三寸一分四厘 高五寸一分

本府博物館藏

鼠色の胎土の表面に白土化粧を施せし上に、鐵釉にて肩の周圍に雄健なる唐草を描き釉藥を施したもので、釉藥透明にして淡黄乳白色をなし且つ光澤あり、釉色、文様形態よく調和してゐる。蓋し繪三島の代表向のものである。

圖版第四九(一)

繪三島壺

口径二寸六分五厘 高二寸八分二厘

本府博物館藏

胎土の表面に鐵釉を施し、胴部には更に白土を塗抹し其上に鐵釉にて前後二面に粗大なる文様を一氣に描いてゐる。製作上の技巧より見れば、第一陶窯址出土のものと思はる。

圖版第四九(二)

繪三島壺

口径二寸九分五厘 高四寸五分

鈴木武司氏藏

胎土鼠色、表面に白土を刷毛で塗り、頸と腹に二條の轆轤線を作り、鐵釉にて極めて大膽に草葉文を描き上釉をかけて焼成したのである。

圖版第五〇(一)

繪三島壺

口径三寸五分 高五寸二分

野崎朝吉氏藏

胎土鼠色、口稍小、腹部大に、底小さくなつてゐる。肩と腹部に二條の轆轤文を作り、其間に粗大なる三葉文様を描いてゐる。

圖版第五〇(二)

繪三島蓋附壺

口径二寸九分五厘 高四寸八分二厘

李王家博物館藏

胎土鼠色、釉色帯淺褐白、腹部に鐵釉にて一種の唐草を雄健に描き、肩に三葉文を前後二面に對稱的に作り、又蓋にも同様の三葉文を見はしてゐる。古墳より出土した者であるが、釉藥文様等より見れば、反浦面にて焼成したものと思はる。

圖版第五一 繪三島蓋附壺側面及平面

口徑四寸二分八厘 高九寸六分八厘 本府博物館藏

是れは鶴龍山麓の遺業から出土したのであるが、鶴龍山麓の陶器に於て焼成した者であることは、胎土、釉薬、文様等の性質に於て明かである。胎土は鼠色、外面に白土を塗抹し、腹部左右に蓮花文様を作り、其上部を横線にて二層に分ち、上層に唐草文を繞らし、其下部を二層に分ち、下層に蓮瓣を繞らしてゐる。又蓋の表には鈕を廻りて蓮瓣を作つてゐる。釉薬透明、淡黄乳白色をなし、形態文様よく調和してゐる。

圖版第五二(一) 刷毛目横口瓶

高七寸九分 腹徑五寸九分七厘

本府博物館藏

胎土鼠色にして、釉淡褐白色を呈し、腹部大に、上部に至るにしたがつて細く、頂は帽子形をなして口なく、却て側面肩部に突出したる大なる注口徑一寸九分を開ける珍奇の者である。此種の物は反浦而鶴峯里からも出土したことがある。

圖版第五二(二) 繪三島水注

高七寸二分

ガスピー氏藏

歪形をなせる水注にして、蓋を缺失してゐる。腹部以上に白化粧を施せし上に、鐵釉にて一種の唐草を雄健に描いてゐる。

圖版第五三(一) 三島手瓶

口徑四寸二分 高一尺二寸

本府博物館藏

是れ亦反浦而附近から出土したるものであるが、胎土、釉薬及び文様の性質より鶴龍山麓の陶器にて焼成した事は明かである。口廣く、肩張り底に向つて小さくなつてゐる。腹部に牡丹文、肩及び腰に蓮瓣を白土にて象嵌してゐるが、淺紅乳白色を呈し、大物の一好標本である。

圖版第五三(二) 三島手瓶殘缺

册徑五寸七分

本府博物館藏

胎土小豆色、堅緻で全面に白土象嵌を細密に施して、釉色は帶青灰緑を呈してゐる。此瓶は口より腹にかけて半面缺損して居るが、大體の形を推察する事が出来る。

圖版第五四(一) 繪三島瓶

册徑二寸四分四厘

淺川伯教氏藏

胎土の外面に白土を刷毛で塗り、腹部に柳を描き、其上下に轆轤線を作り、釉薬を施した者で、釉薬透明にして文様形態よく調和して輕快の趣がある。口部は後の補足である。

圖版第五四(二) 繪三島瓶

口徑一寸六分五厘 高五寸二分六厘

鈴木武司氏藏

前記の者と手法同一にして、大膽に一氣に唐草文を對稱的に描いてゐる。釉透明中に多少の淺紅色を帯びてゐる。

圖版第五五(一) 繪三島瓶

口徑二寸一分 高一尺

渡邊定一郎氏藏

此瓶は開城附近の墓から出土したるものであるが、釉薬、文様の性質より反浦面の陶器にて焼成した者と思はれる。胎土の表面に白土化粧をなし、腹部二面に一種の唐草文様を描いてゐる。釉薬透明にして淡黄乳白色を呈してゐる。

圖版第五五(二) 繪三島瓶

口徑一寸八分二厘 高八寸七分二厘

李王家博物館藏

前記の者と同一手法にして、唐草文間に草様文を描いてゐる。

圖版第五六 繪三島瓶

册徑五寸九分 高九寸七分五厘

李王家博物館藏

鼠色の胎土の上に白土化粧を施し、更に鐵釉にて腹部二面に魚文を極めて輕快に描き、其間



に蓮花を見はし、釉薬透明にして乳白色を呈し光澤あり、口縁少しく缺損してゐる。出所不明であるが、胎土、釉薬、文様等の性質により反浦面の陶窯にて焼成したものと思はる。

圖版第五七(一) 繪三島瓶 口径二寸三分四厘 高九寸五分七厘 本府博物館藏

本品は前記の者と同一手法であるが、釉薬過半剝離してゐる。

圖版第五七(二) 繪三島瓶 高九寸 口径五寸六分 高木テイ氏藏

瓶の上部を失ひし者にして、前記の者と同形式であるが、腹部に蓮花を描いてゐる。

圖版第五八(一) 三島手漬瓶 本府博物館藏

腹部以下潰れたる瓶にして、肩より上部は胼手とし、腹部は牡丹の如き花と葉の輪郭を残して其内外を削り去り、白土を嵌入し更に釉薬を施した者である。

圖版第五八(二) 刷毛目顯形瓶 口径四寸五厘 住井辰男氏藏

瓶形をなせる瓶にして、形態よく整ふてゐるが、口部は後の補足である。

圖版第五九(一) 繪三島瓶 口径一寸二分八厘 高四寸四分 本府博物館藏

胎土鼠色にして、口部より腹部にかけて白土化粧を施し、肩より腹部に鐵釉にて一種の蓮瓣様を雄健に描いてゐる。釉薬透明淡黄乳白色をなし、口縁及び高臺の手法極めて雄大で、此種の代表的のものの一つである。

圖版第五九(二) 繪三島瓶 口径一寸六分 高五寸七分 住井辰男氏藏

前記の者に似て腹部稍窄く、鐵釉にて一種の蓮瓣様を描いてゐる。形態、文様、釉色亦よく調

和して居る。

圖版第六〇(一) 繪三島水注 高五寸四分 越田常太郎氏藏

口小に胴部長く把手及び注口を有せる水注にして、面には氷裂を有し胴部に花文を雄健に描き肩に蓮瓣を繞らし、形態文様よく整ふてゐるが、口部は後の補足である。

圖版第六〇(二) 繪三島瓶 口径一寸 高四寸七分 鈴木武司氏藏

刷毛目の上に腹部に一種の草文を描き、其上下に轆轤線を繞らしてゐる。

圖版第六一(一)(二)(三) 繪三島瓶殘缺 李王家博物館藏

- (一) 高三寸一分四厘 口径二寸二分七厘
- (二) 高三寸八分七厘 口径二寸五分五厘
- (三) 高三寸一分 口径二寸二分一厘

何れも口部缺失してゐる。腹部には(一)は蓮瓣様、(二)は左右に海藻様、(三)は左右に魚文を描いてゐる。

圖版第六一(四)(五)(六) 繪三島瓶 本府博物館藏

- (四) 口径一寸一分四厘 高四寸五分
- (五) 口径三寸四分七厘 高五寸三分
- (六) 口径三寸五分五厘 高四寸八分

(四)は粗大な唐草文、(五)は輕快な唐草文を描いた瓶であるが、(五)(六)は口部缺損してゐる。

圖版第六二(一)(二) 刷毛目瓶及小壺 鈴木武司氏藏

- (一) 口径八分五厘 高二寸九分

(二)口徑一寸七分五厘 高一寸六分五厘

共に胎土の上に白土を刷毛にて一氣に刷いたもので、形や色に一種の雅味がある。

圖版第六二(三) 刷毛目蓋 口徑二寸五分五厘 高一寸四分五厘 本府博物館藏

胎土鼠色、内外面に白土を濃く塗抹したもので、釉は灰白色を呈してゐる。

圖版第六二(四)(五) 繪三島瓶 朴詰照氏藏

(四)高四寸九分 口徑三寸三分  
(五)高四寸二分五厘 口徑二寸八分

刷毛目の上に鐵釉にて大膽に唐草文様を描いてゐる。(四)は口部缺損してゐる。

圖版第六三(一) 黒釉水注 口徑三寸二分五厘 高三寸八分 本府博物館藏

胎土鼠色、釉は帶茶黒色、口徑稍廣く腹部大に側面に注口を開ける水注にして、腹部に小破孔あり、注口又少しく缺損してゐる。釉色及び技巧上より見れば第一陶窯址出土のものと思はる。

圖版第六三(二) 繪三島蓋形陶器 口徑長七寸一分二厘 高三寸六分三厘 本府博物館藏

四面膨らみを有せる長方形の容器にして、脚を有し蓋形をなし四隅及び前後に耳様突起あり、外面、鐵釉にて無雜作に文様を描いてゐる。祭器の類であらう。

圖版第六四(一) 彫三島蓋形陶器 高三寸五分 口徑長四寸六分 本府博物館藏

胎土鼠色にして内外面に白土を塗抹し、外面二面に人物様を、其間に唐草を彫り更に釉藥を

施したものであるが、釉藥透明にして光澤あり、其形腹部は楕圓形をなし上部に向ひて開き且つ廣き縁を繞らし、下に三足を作つてゐる。縁の大部分と二本の足は補足である。

圖版第六四(二) 刷毛目圓形陶器 口徑長四寸四分八厘 高二寸九分五厘 本府博物館藏

三足を有せる楕圓形の容器の内外面に白土を刷き、釉藥を施した者である。側面に二本の小突起即ち耳があつたのであるが、其一は缺損してゐる。

圖版第六五(一) 刷毛目盃 口徑三寸八分 高一寸八分 住井辰男氏藏

歪形をなせる盃で、内外面刷毛目にて、釉藥透明にして刷毛目のあと、明瞭で、一種の雅味がある。

圖版第六五(二) 三島手盃 口徑四寸五分 高一寸九分五厘 住井辰男氏藏

内面三島手、外面刷毛目で釉藥透明にして形態も美しい。蓋し此種の尤品の一つである。

圖版第六六(一) 繪三島鉢 口徑四寸四分 高二寸一分 有賀光豊氏藏

器物の内外面に白土を塗抹し、外面に草文を雄健に描いてゐる。

圖版第六六(二) 繪三島歪鉢 藏本清次郎氏藏

歪形をなせる鉢にして、内面刷毛目、外面に鐵釉にて自在に一種の唐草文を描いてゐる。

圖版第六七(一) 繪三島歪鉢 口徑長六寸四分 高二寸四分 横田五郎氏藏

是れも歪形の鉢にして、前者と同様の手法、文様にて出来てゐる。

圖版第六七(二) 繪三島歪鉢 口徑長五寸一分 高二寸五分 住井辰男氏藏

手法前記の者に同しく、文様は木葉の如き者を雄健に作つてゐる。

圖版第六八(一)(二) 繪三島鉢

鈴木武司氏藏

(一) 口徑四寸五分五厘 高一寸八分五厘  
(二) 口徑五寸九分五厘 高二寸六分六厘

胎土鼠色、内外面を白土にて塗抹し、腹部に一は一種の唐草を對稱的に描き、一は草葉文を無造作に描き、上下に轆轤線を造つてゐる。

圖版第六九(一)(二) 繪三島瓶殘缺及鉢殘缺

本府博物館藏

(一)は瓶の上部及び腹部の半面を失ひし者にして、鉄釉にて魚文を描いてゐる。(二)は把手附平鉢の殘缺にして、亦前者と同じく魚文を描いてゐる。

圖版第六九(三) 繪三島把手附鉢

朴瑄熙氏藏

口徑八寸九分 高四寸九分

器物の内外面に粗雑な唐草を描いてゐるが、把手は缺失してゐる。

圖版第七〇(一) 繪三島脚附杯

朴喆熙氏藏

口徑四寸六分二厘 高三寸一分

上は盃狀をなし、下に歪める脚を有つてゐる。脚は上窄く下に擴がつてゐる。内外共に輕快な繪文様を鉄釉にて描いてゐる。

圖版第七〇(二) 三島手脚附杯

朴喆熙氏藏

口徑三寸七分六厘 高二寸七分

上は盃狀をなし、下に向ひて開いた稍高き脚を作り、内外に曆手様文様を白象嵌にてあらはしてゐる。

圖版第七〇(三) 彫三島歪脚附杯

朴喆熙氏藏

口徑四寸二分 高二寸九分

歪形をなせる脚附杯にして(一)と同様の形式を持つてゐるが、内面に稚拙な唐草文様を篋書してゐる。

圖版第七〇(四) 刷毛目歪盃

朴喆熙氏藏

口徑四寸二分 高二寸二分

歪形をなせる盃にして、内外面刷毛目で釉色透明にして、刷毛のあとも明瞭にて一種の雅味がある。

圖版第七一(一) 三島手鉢殘缺

本府博物館藏

鉢の底部の破片にして、内面に四魚文を型押しし、周圍にも蝶形文を型押しし、白土を其上に塗り文様外を削り去り釉藥を施したものである。

圖版第七一(二) 繪三島蓋平面

朴喆熙氏藏

徑五寸

盃の蓋の如き者にして、胎土の外面に白土を塗抹し、黒釉を施して、鉢の周圍の嵌手文を白抜きにしたもので、珍らしき者の一つである。

圖版第七二(一) 繪三島片口

住井辰男氏藏

口徑三寸九分 高二寸二分

内面刷毛目、外面腹部に草様文を雄健に描き、其上下に轆轤線を作つてゐる。形狀文様よく調和して古雅の趣がある。

圖版第七二(二) 三島手片口

越田常太郎氏藏

口徑五寸 高二寸三分

外面に型押しにて層々點線文を作り、白土を、其上に塗り文様外の白土を削り去り釉藥を施したものである。

圖版第七三(一) 刷毛目片口 口徑三寸四分 高一寸九分

本府博物館藏

鼠色の胎土の上に白土を刷毛で一氣に刷いたものであるが、口部は補足である。

圖版第七三(二) 繪三島俵壺 長徑八寸七分 口徑一寸七分 高六寸三分

住井辰男氏藏

胎土の表面に白土化粧を施し、鉄釉にて牡丹文を兩面に描いてゐる。是れは墓中より出土せるものであるが、胎土、釉藥、文様の性質により、野龍山麓の陶窯にて焼成したものであることは明かである。

圖版第七四(一)(二) 繪三島俵壺殘缺

本府博物館藏

共に俵壺の殘缺で、前記の者と同一手法であるが、腹部には魚文を描いてゐる。

圖版第七五(一) 黒釉水滴 高一寸三分五厘

野崎朝吉氏藏

器物の上面中央に小圓孔、側面に注口を有せる水滴にして、胎土の表面に黒釉を施したものである。

圖版第七五(二) 刷毛目水滴 高一寸九分四厘

野崎朝吉氏藏

形は第七五に示すが如く、底部に小圓孔、側面に注口を有せる水滴にして、注口少しく缺損してゐる。刷毛目の上に數層の轆轤線を作り、透明の釉藥を施したもので稀品である。

圖版第七五(三) 刷毛目硯殘缺

野崎朝吉氏藏

形は圖版第七六に示すが如く、下部少しく缺損してゐるが、形態よく此種の代表的のもの、一つである。

圖版第七五(四) 刷毛目托蓋

野崎朝吉氏藏

形は見取圖(七版第)に示すが如く、蓋は胎土灰綠色にして内面白土を濃く塗り、外面口邊と腹部以下に轆轤の線條を作り、其間に白土を塗抹した者にして、托は胎土灰青色、内面白土を濃く塗り、外面は刷毛目の痕が明かで一種の雅味がある。蓋し釉藥透明、形態よく整ふて此種の尤品の一つである。

圖版第七六 野崎朝吉氏藏陶器見取圖

圖版第七七(一)(二) 繪三島陶器破片

本府博物館藏

(一) 扁壺の殘缺にして、文様は鉄釉にて蓮花と魚文を描いてゐる。(二) 牡丹文を鉄釉にて雄健に描いてゐる破片である。

圖版第七七(三) 三島手陶器破片

本府博物館藏

胎土の上に柳を彫り、凹所に白土を嵌入し、更に釉藥を施したものである。釉は硝子様をなし、帶青灰綠色を呈してゐる。

圖版第七七(四) 陶製押型 徑二寸四分五厘

本府博物館藏

鼠色の胎土を彫りて、白土を極めて薄く塗抹し、更に釉藥を施したもので、裏面に把手の附着せし形迹が残つてゐる。蓋し餅の押型であらう。

圖版第七八(一) 彫三島押型表面及側面 長徑二寸八分高一寸七分二厘

本府博物館藏

胎土黒褐色、表面に白土を塗り、花形文様を彫り、更に釉藥を施したもので、釉色帶青灰白であ

る是れ亦恐らくは餅の押型であらう。

圖版第七八(二) 陶製押型 長二寸五分四厘 徑一寸二分一厘

本府博物館藏

三島手の押型にして、短き圓形の棒状をなし、兩端は中央少しく高く、そして花形を陰刻してあるが、一方のみ白土を極めて薄くかけてある。釉は鼠色にして半面少しく剝落して褐色を呈してゐる。

圖版第七九(一) 繪三島鉢殘缺

本府博物館藏

胎土鼠色、器物の内外面に白土を塗り、外面に波文を鐵釉にて達者に無雜作に描き、更に釉藥を施した者である。

圖版第七九(二) 繪三島扁壺殘缺

本府博物館藏

前記の者と同一手法にして、唐草文を勁健に描き、透明の釉藥を施した扁壺の殘缺である。

圖版第七九(三) 繪三島平鉢殘缺

本府博物館藏

平鉢の口邊の破片にして、前記のものと同様手法共に同様である。

圖版第八〇(一) 三島手植木鉢殘缺

本府博物館藏

植木鉢の底部殘缺にして、底の中央には一の孔を穿つてある。腹部に蓮文の輪廓を残して他の地を削り白土を嵌入し、更に底部に蓮瓣を白象嵌にして表してある。

圖版第八〇(二) 三島手植木鉢殘缺

本府博物館藏

植木鉢の底部殘缺にして、腹部に柳底邊に蓮瓣を白象嵌にて表したものである。

圖版第八〇(三) 繪三島丸瓦殘缺

本府博物館藏

鼠色の胎土の上に白土化粧を施し、鐵釉にて粗大の文様を描いた丸瓦の斷片である。此時代に繪三島の丸瓦が焼成された事を證する貴重資料である。

圖版第八一(一)(二)(三)(四) 白磁皿及鉢殘缺

本府博物館藏

第四陶窯址附近にて蒐集したもので胎土は帶青灰白色で、堅緻、釉は多く帶青白色である。

### (二) 現今朝鮮に行はるゝ陶窯の構造

現在朝鮮に於て使用せらるゝ陶窯に就き參考の爲め、隧道窯三種、丸窯式登窯一種、割竹形登窯一種を左に説くこととする。特に其中(戊)の割竹形登窯は反浦面古窯の形式と相似てゐるから、反浦面古窯の構造の復原に有力なる參考資料となる者である。

(甲) 隧道窯其一 所在地 全羅南道康津郡七良面鳳凰里

窯の構造は先づ傾斜面に、勾配上部平均二寸二分、中央平均三寸二分、下部平均二寸六分、長さ七十六尺七寸、廣さ上部約六尺一寸、中央約五尺二寸、下部約六尺三寸の細長き溝を作り、其兩壁より粘土を以て穹隆形の天井を架け、其兩肩に高さ約九寸、廣さ約六寸の薪投入孔を右に四十二個、左に四十四個を設け、最高所の後壁の脚部に四個の煙出孔、下方最低所に長さ六尺九寸五分、廣さ中央にて五尺六寸、高さ約六尺五寸の焚口を設け、又窯床は中央より稍下方の所にて、上部と下部とを界する段が造られてゐる。窯の右壁實測圖(十八圖)に示すが如き位置に、二個所

の出入口兼焚口を設け、内部の高さは上部約五尺六寸、中央約四尺九寸、下部約六尺七寸である。此窯にては帶褐黒釉の炆器を盛に焼成して居る。挿圖第十七圖の(二)に示した高麗時代の古窯も此形式である(挿圖第十七圖)

(乙) 隧道窯其二 所在地 京畿道驪州郡北内面五鶴里

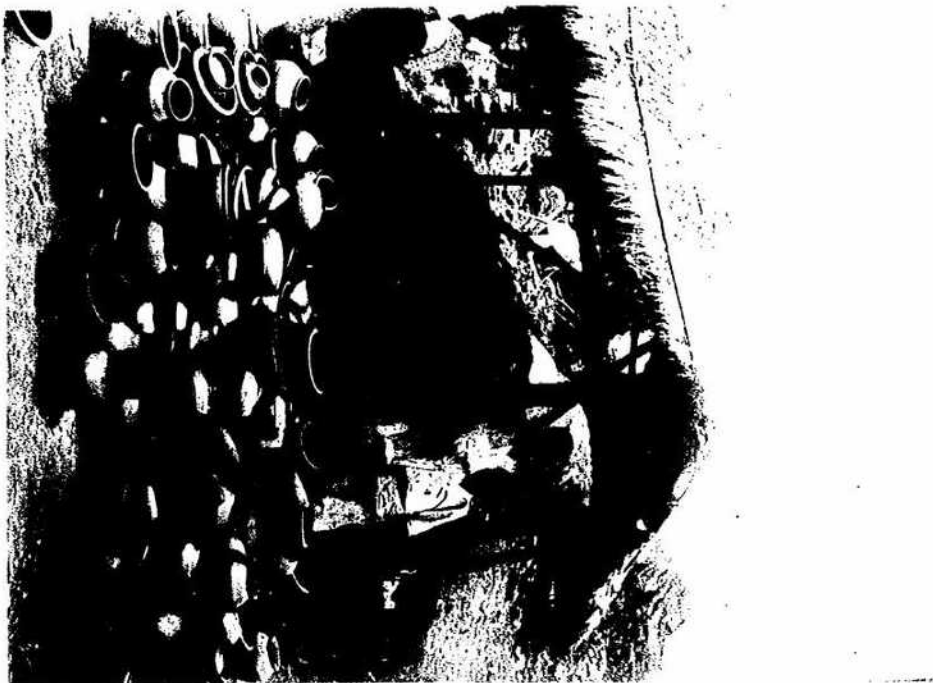
土地の傾斜面に長さ八十一尺五寸、廣さ下端六尺八寸、中央七尺三寸五分、先端八尺五寸五分、平均三寸三分勾配の細長き溝を掘つて、此溝の兩壁から粘土にて穹隆形の天井を架け、其穹隆天井の兩肩に長さ九寸、廣さ四寸の薪投入孔を左に四十二個、右に四十三個を設け、最高所の後壁の中央より稍上部に一個、又脚部に四個の煙出孔を作り、最低所に焚口を設けてゐる。焚口の長さ十四尺一寸、廣さ中央にて五尺九寸、高さ約五尺三寸ある。焚口の上には實測圖(挿圖十四)に示すが如く隔壁を設け、其隔壁の脚部に三個の通焰孔を設けてゐる。窯の内部の高さは六尺内外である。此窯にては帶褐黒釉の炆器が焼成されるのである(挿圖第二十圖第一、第二圖参照)

(丙) 隧道窯其三 所在地 忠清南道大田郡儒城面九岩里

傾斜地を利用して、長さ十四尺二寸五分、廣さ約四尺五寸の溝を作り、後壁に近く丁字形に長さ約四十五尺四寸、廣さ下の端で五尺五寸、中央約六尺七寸、先端で六尺二寸、平均上部で三寸、下部で三寸五分勾配の溝を作り、兩壁から粘土を以て穹隆天井を架け、其穹隆の兩肩に高さ約一尺、廣さ約八寸の薪投入孔を數十個つゞ設け、後壁に幅九寸内外、高さ約一尺九寸の長方形の四個の煙出孔を穿ち、縦溝と横溝との中間に隔壁を設け、且つ隔壁の脚部左右及び中央稍上部に



康津郡大田面九岩里高麗陶窯址



康津郡七良面鳳凰里陶窯

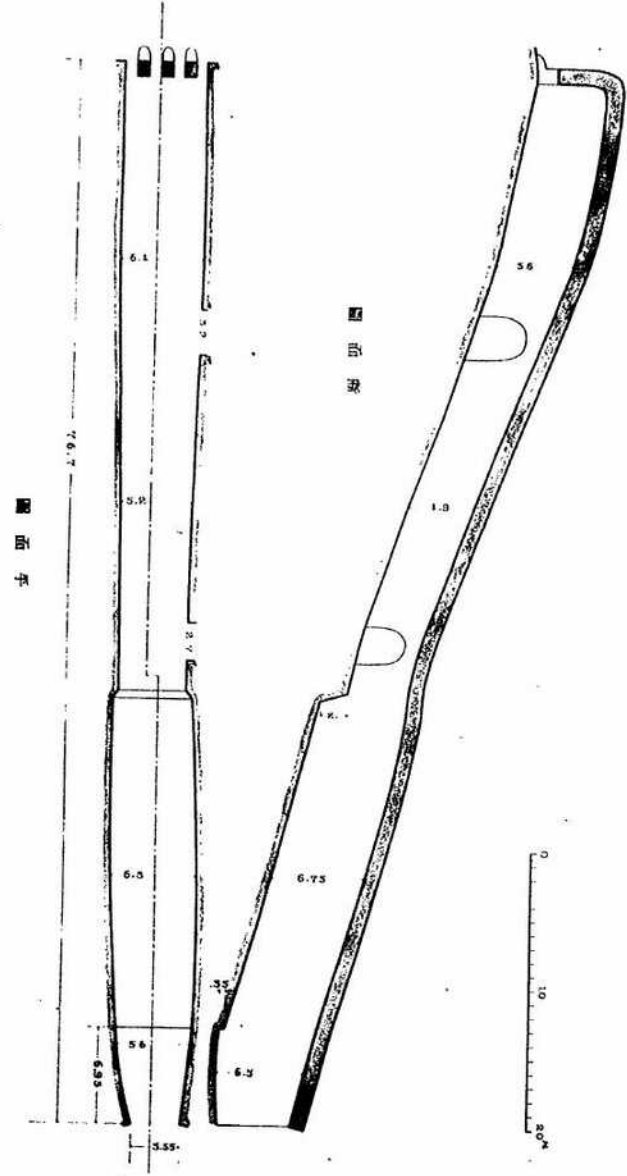


圖 部 梁

康 建 部 七 良 通 風 管 圖 樣



(1)

袖をかける女工



(2)

文様を描く女工





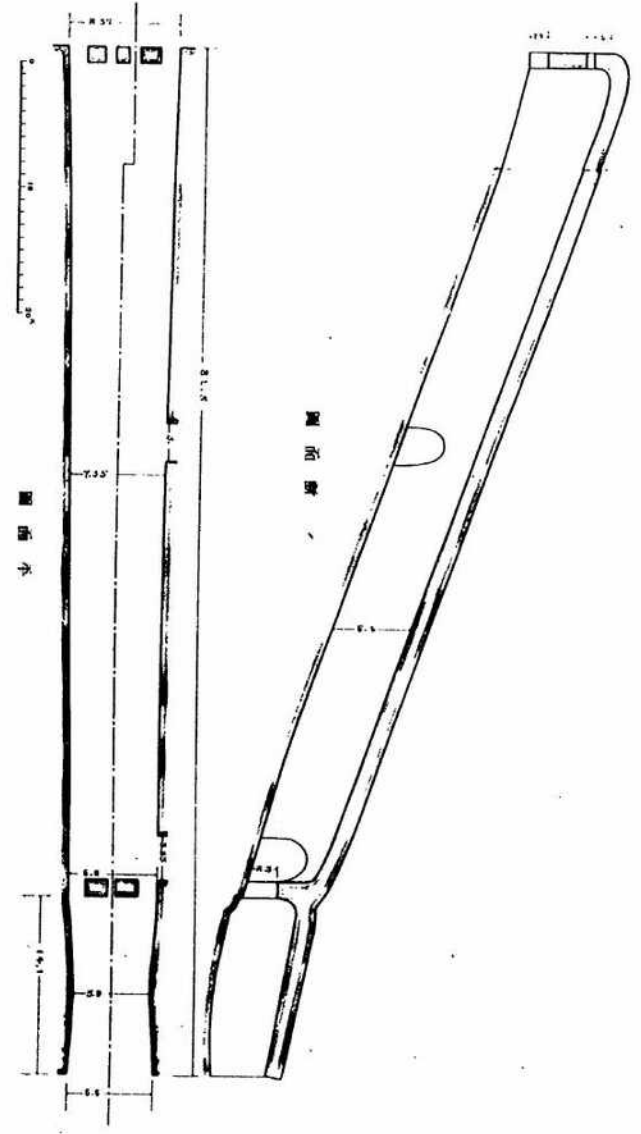
(1)

鹽州郡北内面五鶴里陶窯



(2)

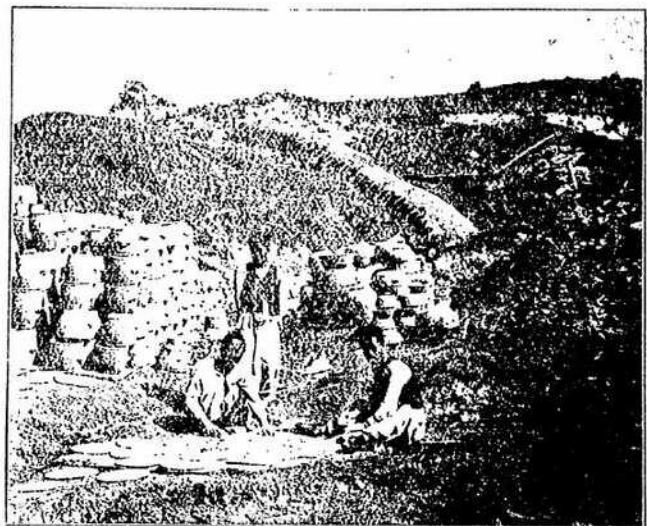
同上  
煙出孔



圖面管

羅州部北內面五德里陶管管測圖

一個つゞの通焰孔都合三個を設けてゐる。窯の内部の高さは六尺内外で、横溝の最下端の左



窯陶里岩九 圖二十二第

側(向つて)に出入口を設けて居る。是れは器物を搬入若くは搬出に便せんがため又は焚口を使用するのである。此窯も帶褐黒釉の妬器が焼成される(挿圖第二十二圖参照)。(丁) 九窯式登窯 所在地忠清南道公州郡公州面

傾斜面に實測圖(挿圖第三)に示すが如く、十二室を前後連接して階段状に築き、登るに従つて室が大きく、内地の丸窯に似て天井は弧状をなしてゐる。全長百九尺二寸五分、廣さ下の方で約六尺三寸、中央八尺八寸、先端十一尺八寸、平均三寸勾配の窯にして最高所の後壁の脚部に十六個の煙出孔、最低所に長さ十二尺二寸、廣さ二尺〇五分の焚口を作り、又各隔壁の脚部には八個乃

至十數個の通焰孔を設け、更に各室前部に一個の出入口兼焚口を後部には底より約一尺二寸

一 公州郡反浦面鶴峰里陶窯址 附録





大田郡儒城面九岩里陶窯

(1)



同上 煙出孔

(2)



窯陶洞五面亭會 圖七十二第

分、平均一寸九分勾配の浅き溝を作り、此溝の左右の兩壁から粘土を以て穹窿の天井を架け、後

の高所に火色又は釉藥の熔香を見る爲めに色見孔があり、窯床には砂を敷いてゐる。此種の

窯では白磁が焼成されてゐる(附

第二十五圖参照)。

(戊) 割竹形登窯

所在地 咸鏡北

道會寧郡會寧面

五洞

土を地上に積

み重ねて細長き

斜面の高臺を作

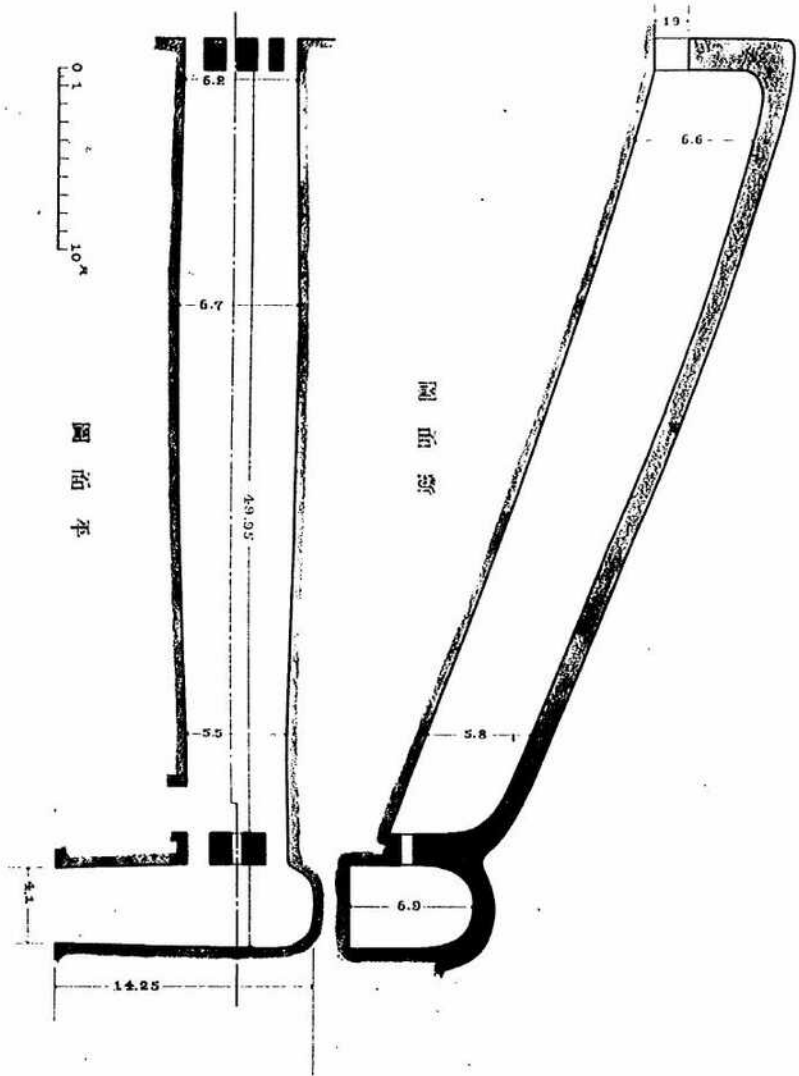
り、其の所に長さ

約八十五尺〇五

分、廣さ下の方で

四尺七寸二分、先

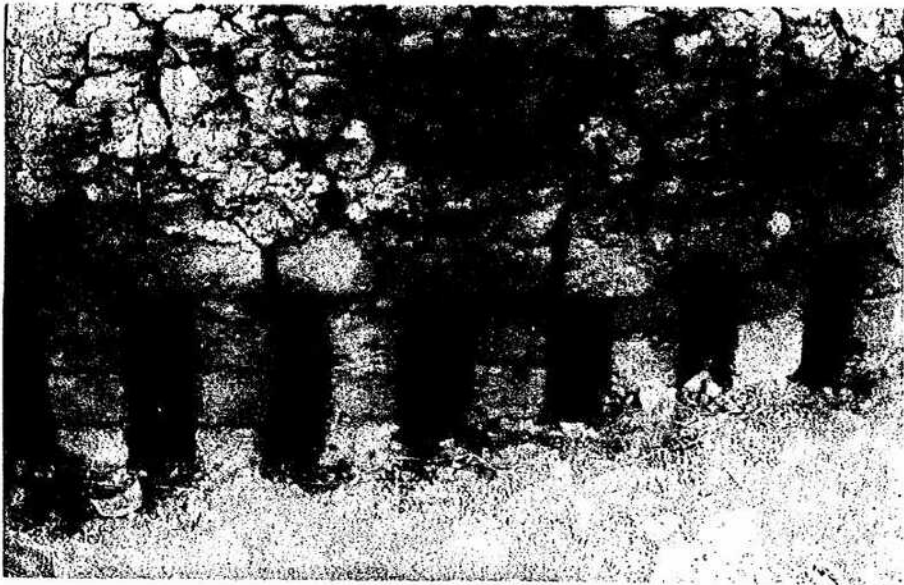
端で七尺八寸五



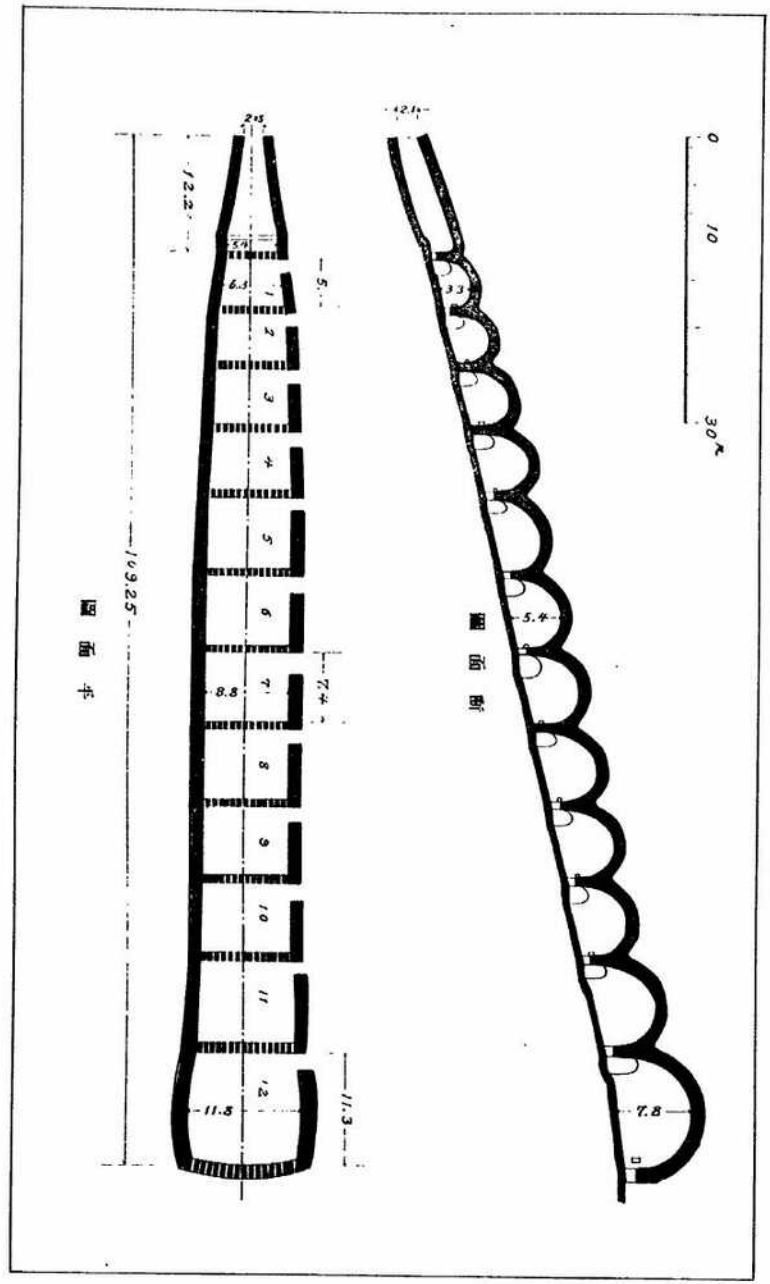
大田郡橋城前丸島里岡谷屋測圖



公州郡公州面陶窯



同上  
煙出孔



公州郡公州面陶管管測圖

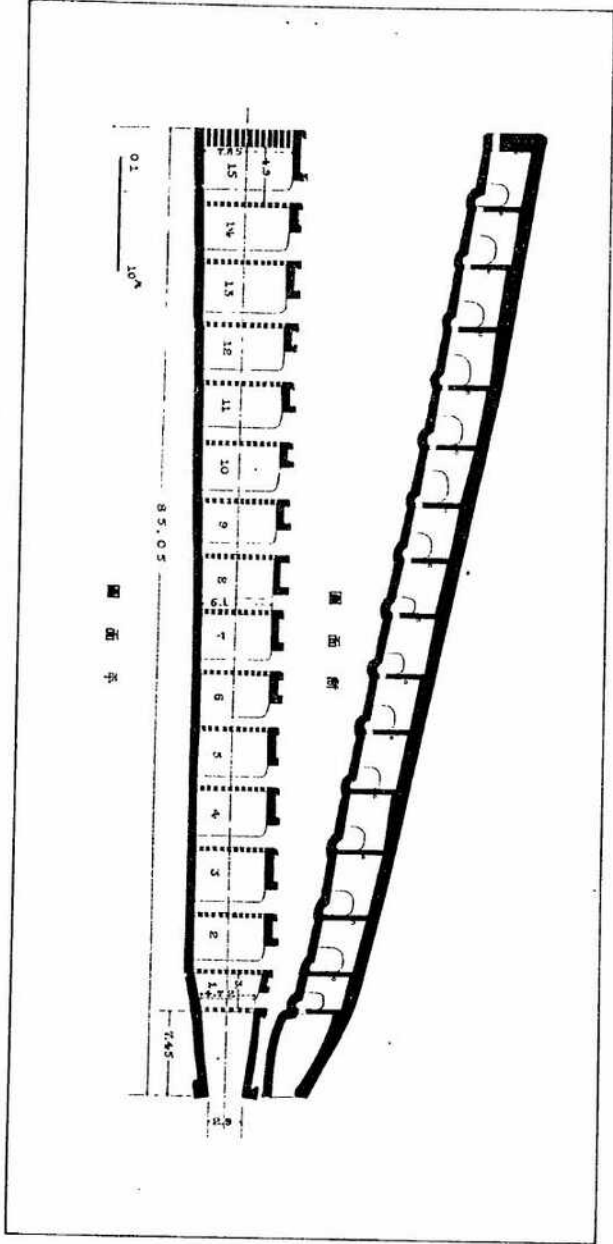
方なる最高所の後壁に十四個の煙出孔、前方の最低所に長さ約七尺四寸五分、廣さ約二寸九分の焚口を設け、更に此窯の内部を隔壁を以て十五室に區畫し其形狀竹筒を二つに割りて之れを傾斜面に伏せた様で、隔壁は恰も竹に節があるのとよく似てゐる。而して其隔壁の脚部に各七個乃至十數個の通焰孔を設け、更に各室前部に一個の出入口兼焚口、後部には底より約二尺四寸の高所に色見孔があり、窯床には砂を敷き、見取圖(挿圖第三)に示すが如き窯を築いたのであるが、勾配緩く通焰にふき爲め、更に最高所の後壁に稍や高き煙突を設けて煙の流出を容易ならしめてゐる。此窯では今普通に會寧燒と稱する海鼠色をせる雅味ある陶器が中性炎にて燒成されてゐる。火度はせーげる雉十番である(挿圖第二十)。

本窯の燒成法 素燒に釉藥を施せし器物を各室に密詰し終れば、出入口を徑六寸位の圓孔を残して其他を閉塞し、第二十八回最前部の焚口に於て約五時間、三百貫位の松薪木を燃し充分第一室の器物乾燥せば、第一室の燃料投入口より約一時間、六十貫位の松割木を投入して之を燒成し、更に第二室より第七室までの各室も亦第一室の如くなし、第八室は時間を減少して四十五分位、燃料は前と同じく投入して之れを燒き、第九室より第十五室までの各室も亦第八室と同様にして順順に燒成するのである。

又京畿道廣州郡南終面分院里にあるものは、自然の傾斜面に、長さ百二十五尺三寸、平均二寸九分勾配の實測圖(挿圖第三十)に示すが如く細長き窯で、白磁が燒成されてゐる(挿圖第二十九)此式の窯は平安道及黃海道にありて、白磁が燒成されてゐる。



鷺嶺山麓陶窯址調査報告  
 即ち反浦面の古窯は其形跡より見れば之れと同一形式であつたのである。



會樂面五洞陶窯見取圖

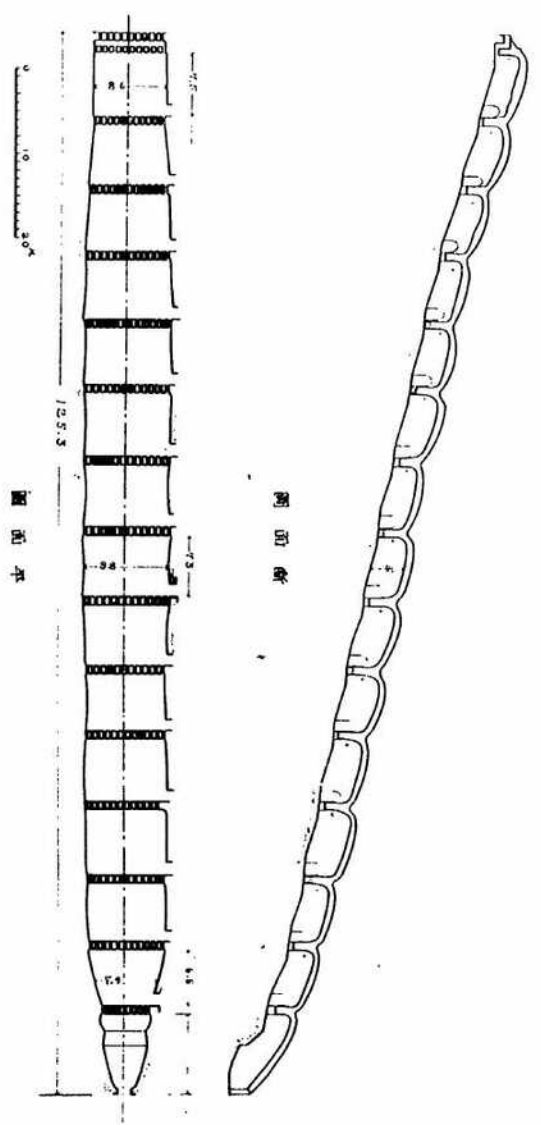




廣州郡南終面分院里陶窯



同上煙出孔



廣州部高終面分腔里圖察其測圖

## 二 大田郡鎮岑面青瓷窯址

### (一) 緒言

高麗時代の青瓷の窯址は、嘗て李王職事務官末松熊彦氏により全羅南道康津郡大口面に於て發見せられた。此大口面陶窯址は青瓷の素文、象嵌、繪高麗等の最優品より下手物の殘片を多量に出せるを以て著名となつたが、從來他の地方に於て、此種の青瓷窯は全く發見されることがなかつた。然るに今回小職等及び小川技手の調査により始めて大田郡鎮岑面に於て、青瓷素文及び象嵌の窯址三處(假りに第一、第二、第三と名づける)を發見した。是等の陶器は所謂高麗燒としては上等品にあらず、高麗末期若くは李朝初期にかけての者と思はれるが、康津郡以外に於ても青瓷が燒成された事實を確め、猶他の地方に於ける發見を豫期すべき前提として最も興味あることと思ふ。尤も野守は別に京畿道廣州郡南終面三白里、楊州郡芦海面牛耳洞に於ても青瓷窯址を調査したが、是れは前者よりは形式上明かに時代に於て後れ、李朝初期に屬する者と思はる。此窯の事につきては他日別に報告することとする。

### (二) 第一陶窯址

大田郡鎮岑面寺谷の民家の北方約三丁、鶴龍山支峯の錦繡峯の山麓にある窯址にして、既に大部分盜掘されてゐた。此窯は破片より見れば主として青瓷象嵌を燒成したのであるが、其

釉色重濁にして手法粗獷の下等品で、胎土は鼠色で、底足は極めて浅く列つてあるが、三島手の者よりは稍巧みの様に思はる。

青瓷象嵌と云ふのは、胎土の表面に篋の如きものを以て文様を彫り、或は文様を型押しとなし其窪みに白土を嵌入して文様をあらはし、其上に青瓷釉を施して焼成した者である。此窯にて焼成せし陶器には、皿、鉢、盃がある。日程の都合上發掘を見合せ、詳細の調査は他日を期することとした(挿圖第三十一回第三、三十二回第三十四回第三)。

本陶窯址發見陶器殘片及數量

品	目	數量	備	考
青瓷象嵌皿		八個	破損	
青瓷象嵌盤破片		一個		
青瓷象嵌鉢破片		二個		
青瓷象嵌盃破片		四個		

(三) 第二陶窯址

大田郡鎮岑面寺谷の東北約七町、新村の北方約八町、鶴龍山支峯の錦繡峯の山麓にある窯址にして、此窯にては主として青瓷のみを焼成したのである。其釉色は淺碧、帶綠、碧、黃褐、暗綠等

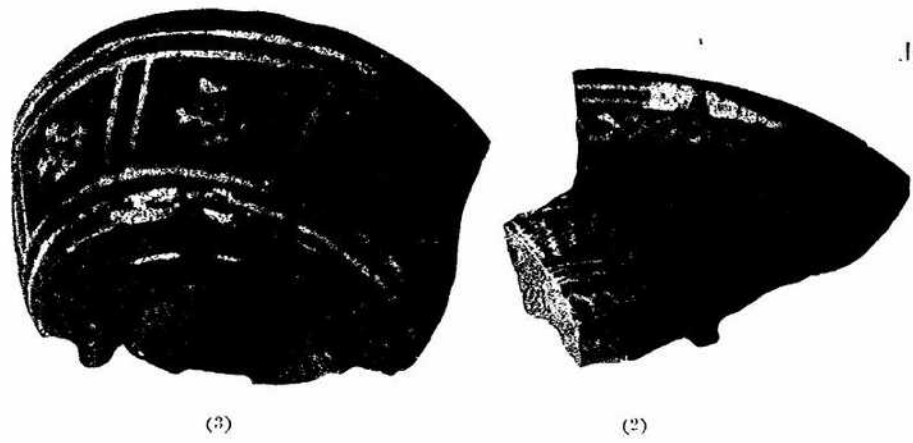
である。火力の如何により釉面に細裂文のあるものもある。胎土は灰白色、極めて堅緻にして、底足は浅く巧みに列られ、大部分のものは此の底に釉が掛かつてゐない。其手法には素文、陰刻及び陽刻のものがあり、陰刻は多く篋形であるが、陽刻は浮彫にして意匠豊富、技巧妙、釉色鮮美である。此陶窯址發見の器物は主として鉢、皿、盃等である。此陶窯址の東方約一丁の處にも同様の青瓷陶窯址(第三陶窯址)がある。是れは第二陶窯址と全く同種のもを焼成し、既に一部分發掘されて居るが、窯は猶完全に遺存して居る様に思はる。日程の都合上之れも發掘を見合せ、他日の調査を待つこととした(挿圖第三十三回、第三十四回参照)。

本陶窯址發見陶器殘片及數量

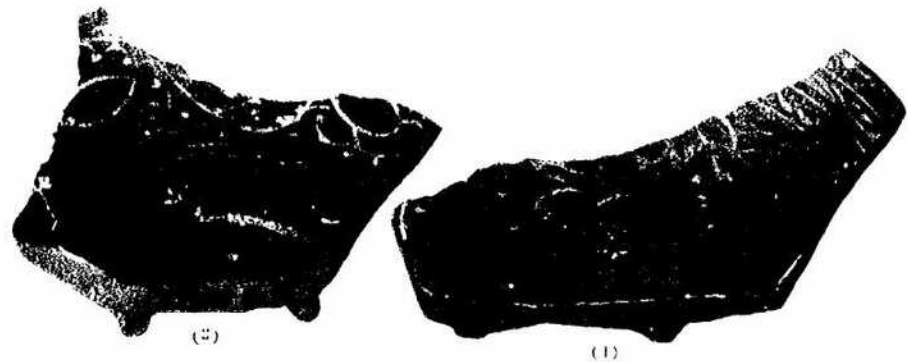
品	目	數量	備	考
青瓷鉢破片		四個	中一個外面陰刻、他素文	
青瓷鉢破片		四個	陽刻	
青瓷皿破片		四個	素文二、陽刻二、	



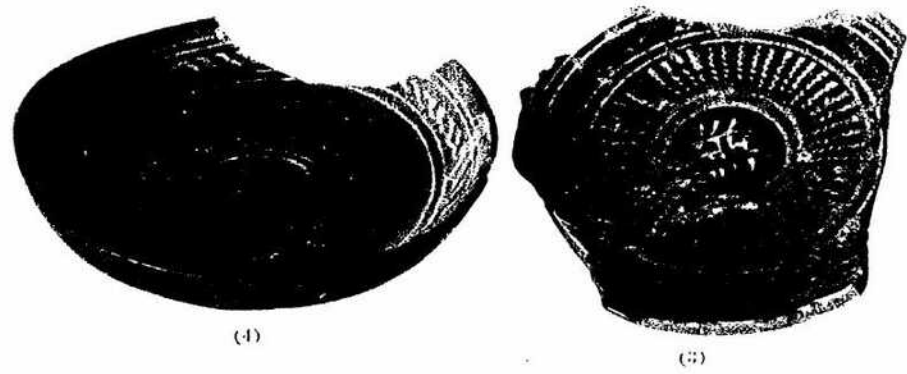
鎮野面第一陶窯址出土 陶器殘缺



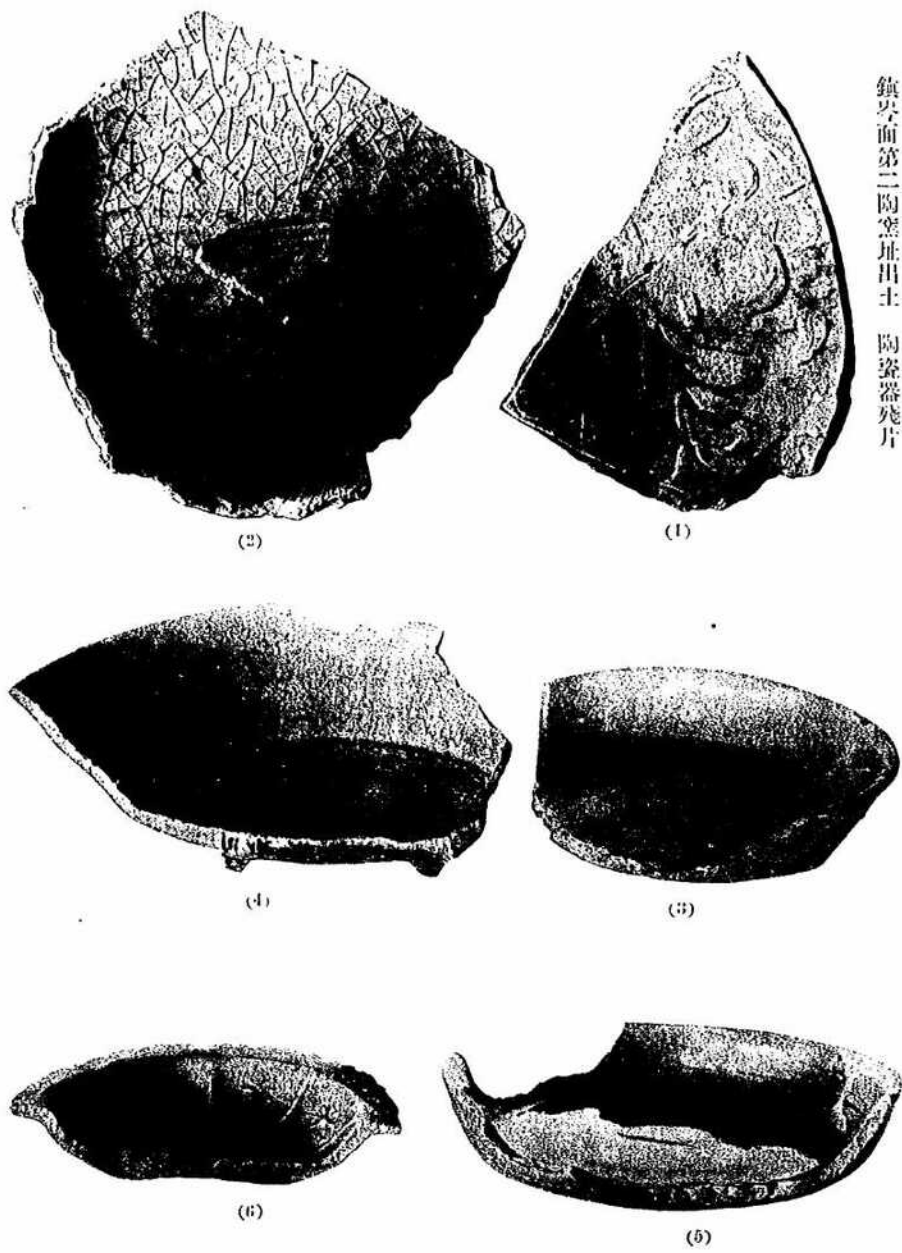
同上



須賀面第一陶器址出土 陶器殘缺

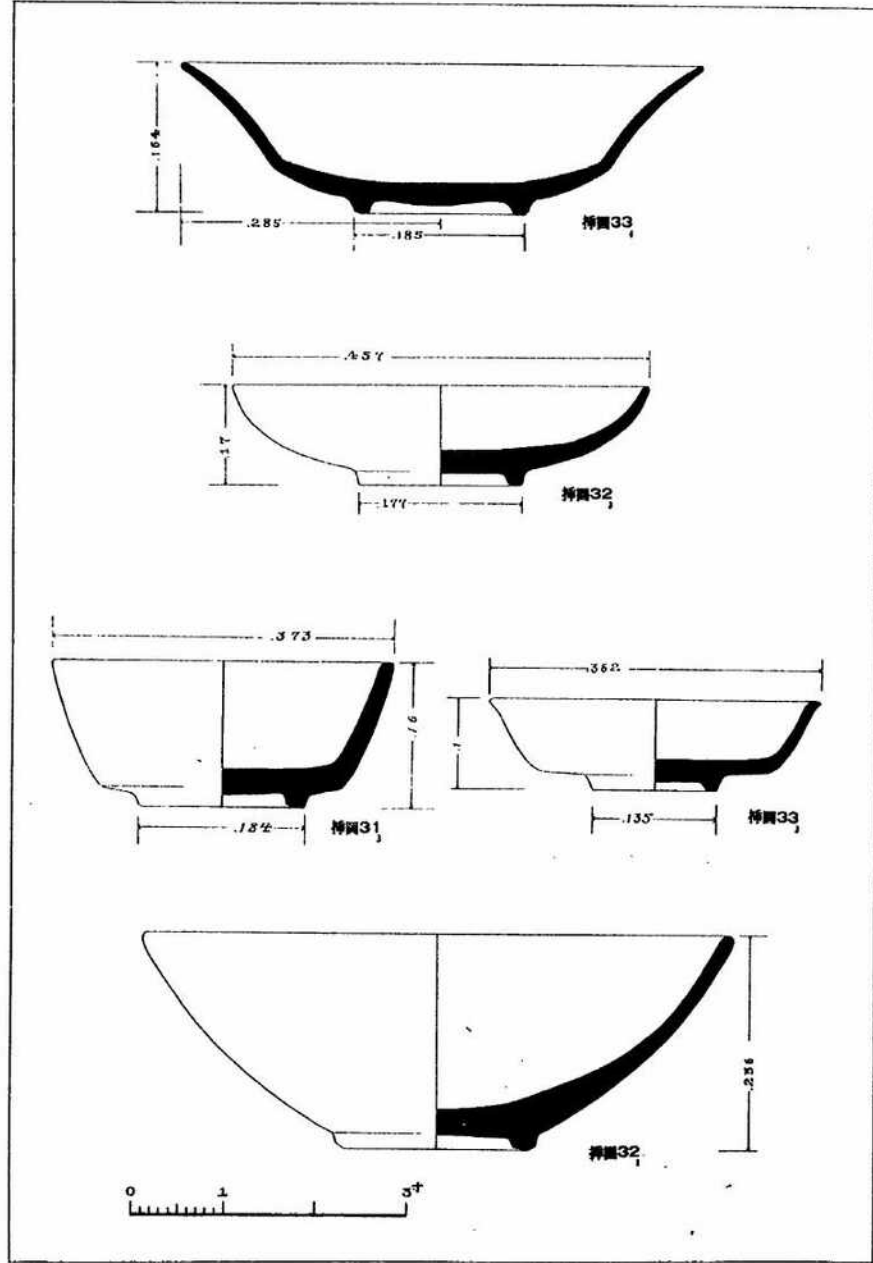


同上



鎮界面第二陶壙址出土 陶器殘片





鎮寧面第一陶窯址及第二陶窯址出土 陶器實測圖

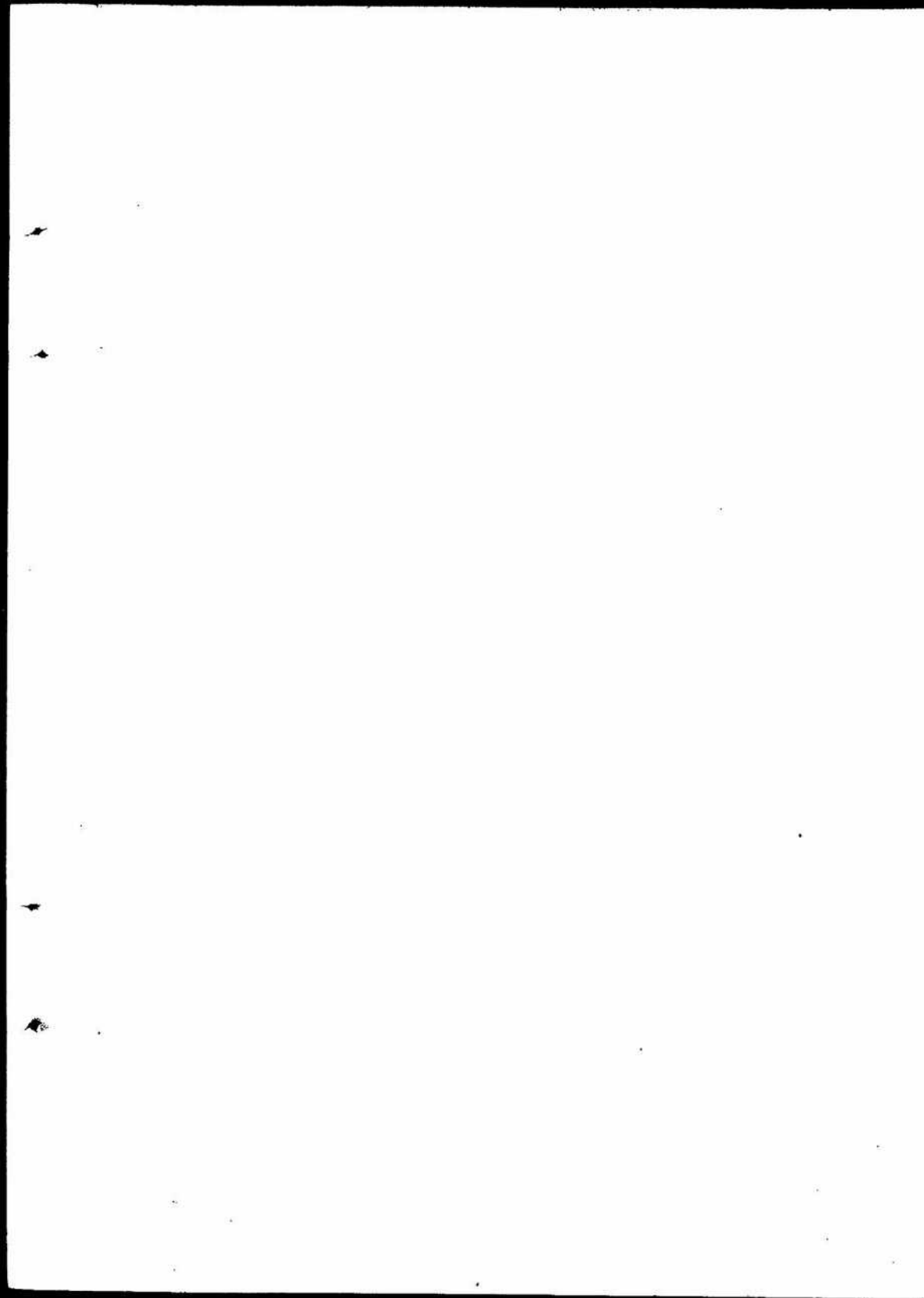
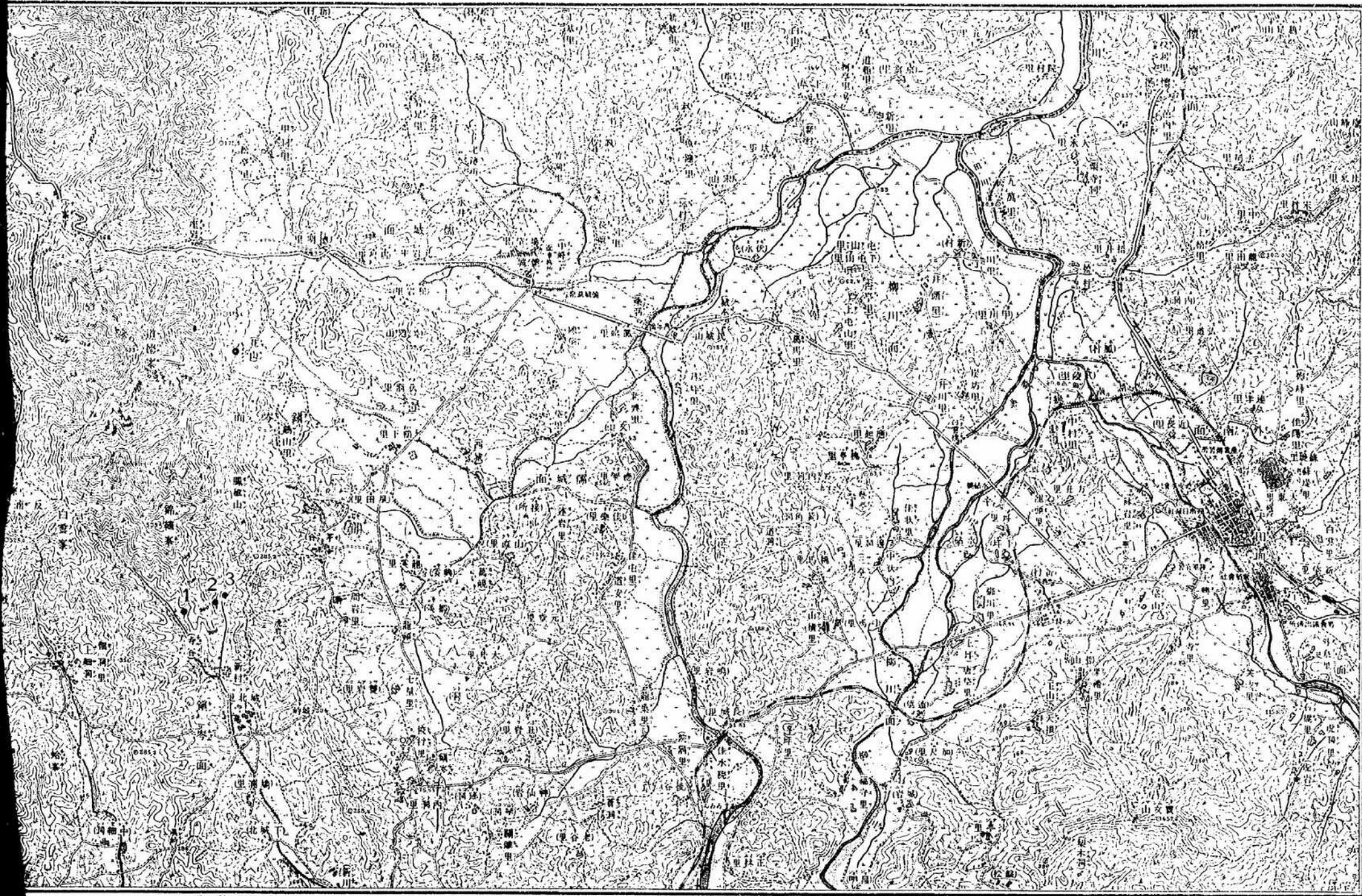
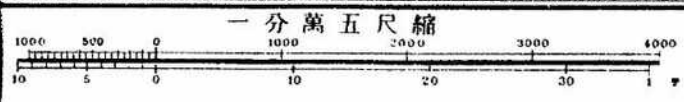


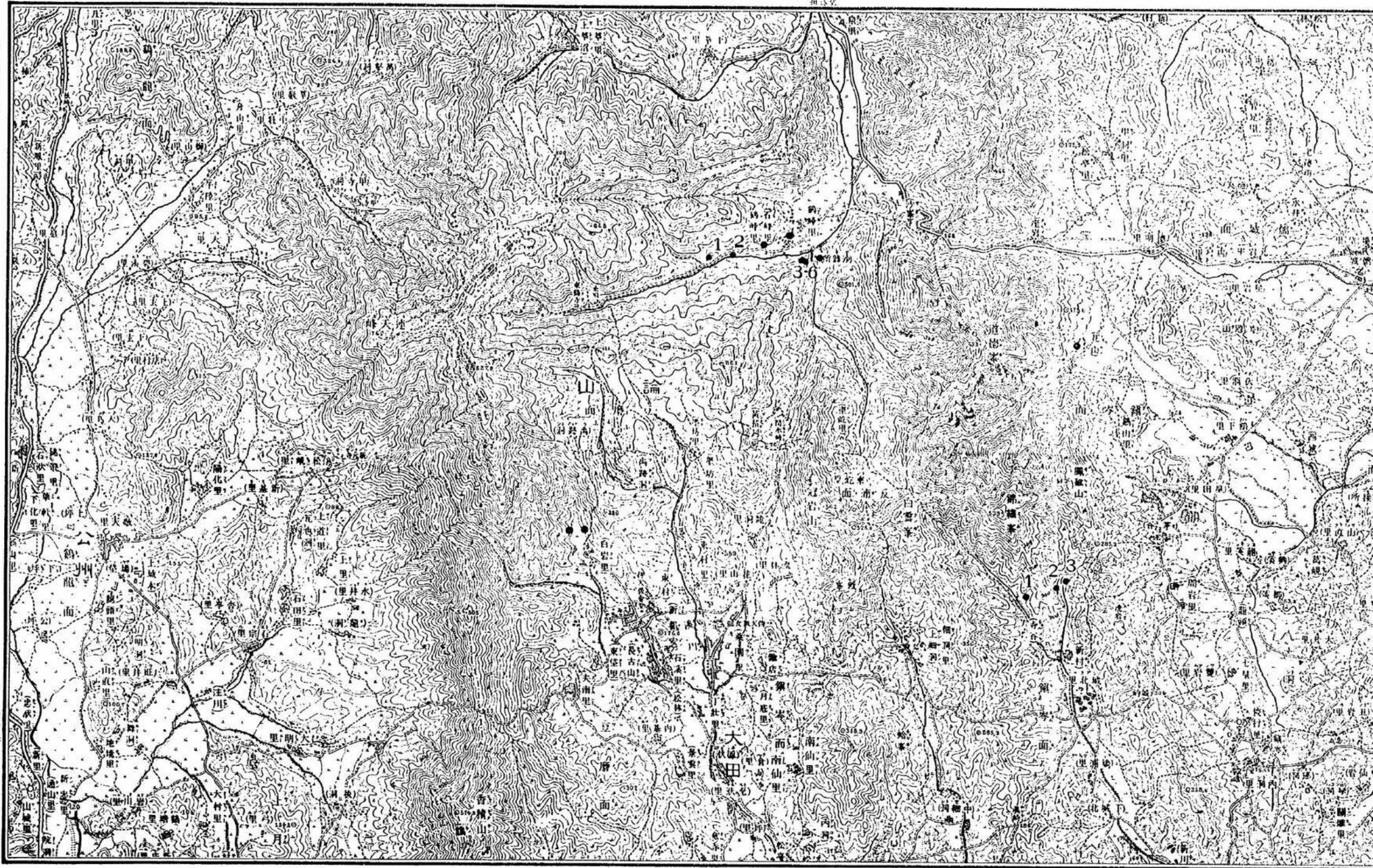
圖  
版

裏  
面  
白  
紙

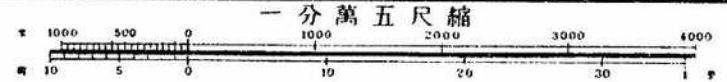


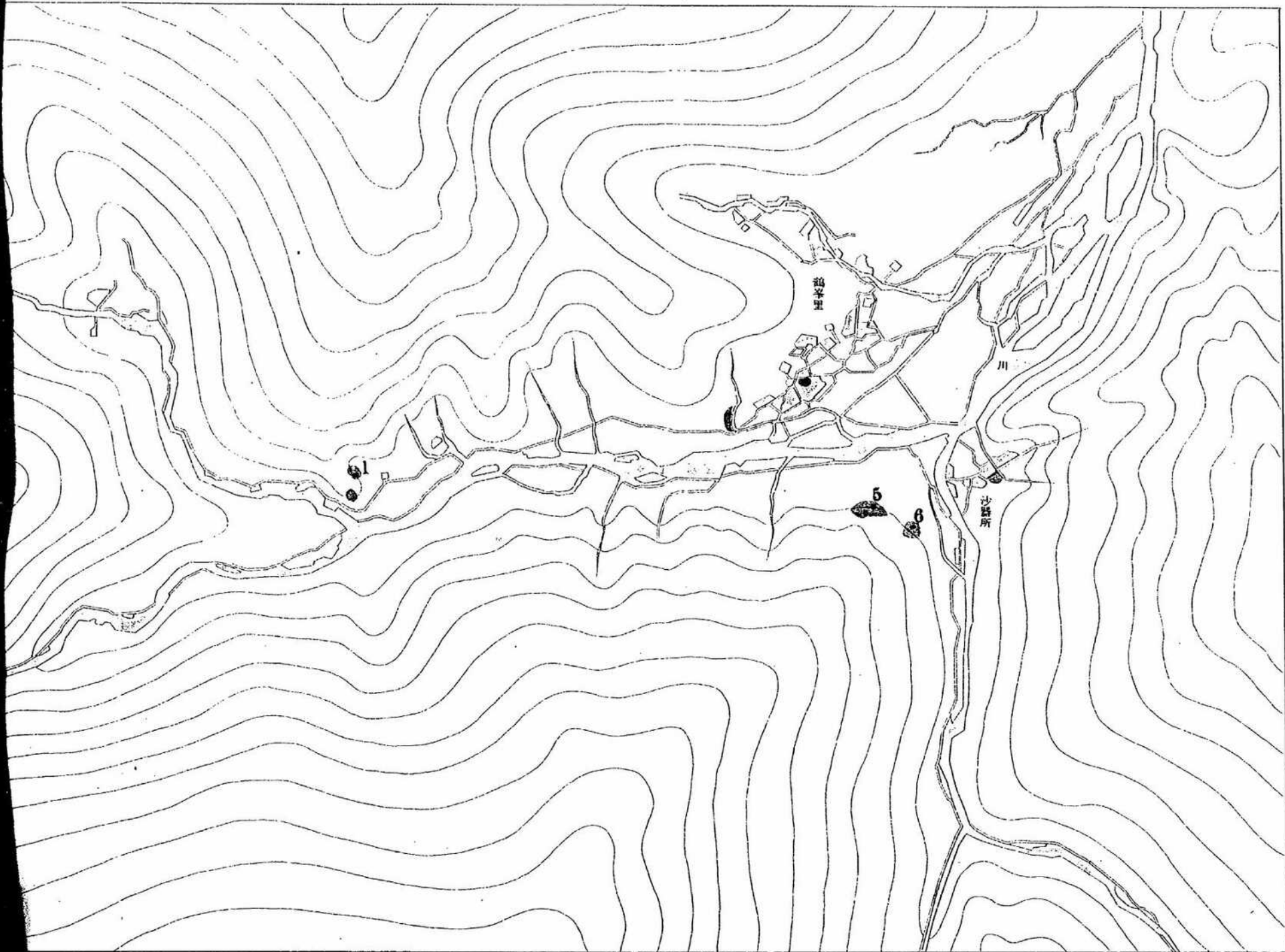
惠濟南道公州府反浦面及大田郡鎮峯面附近地圖 (陸地測量部五千分)





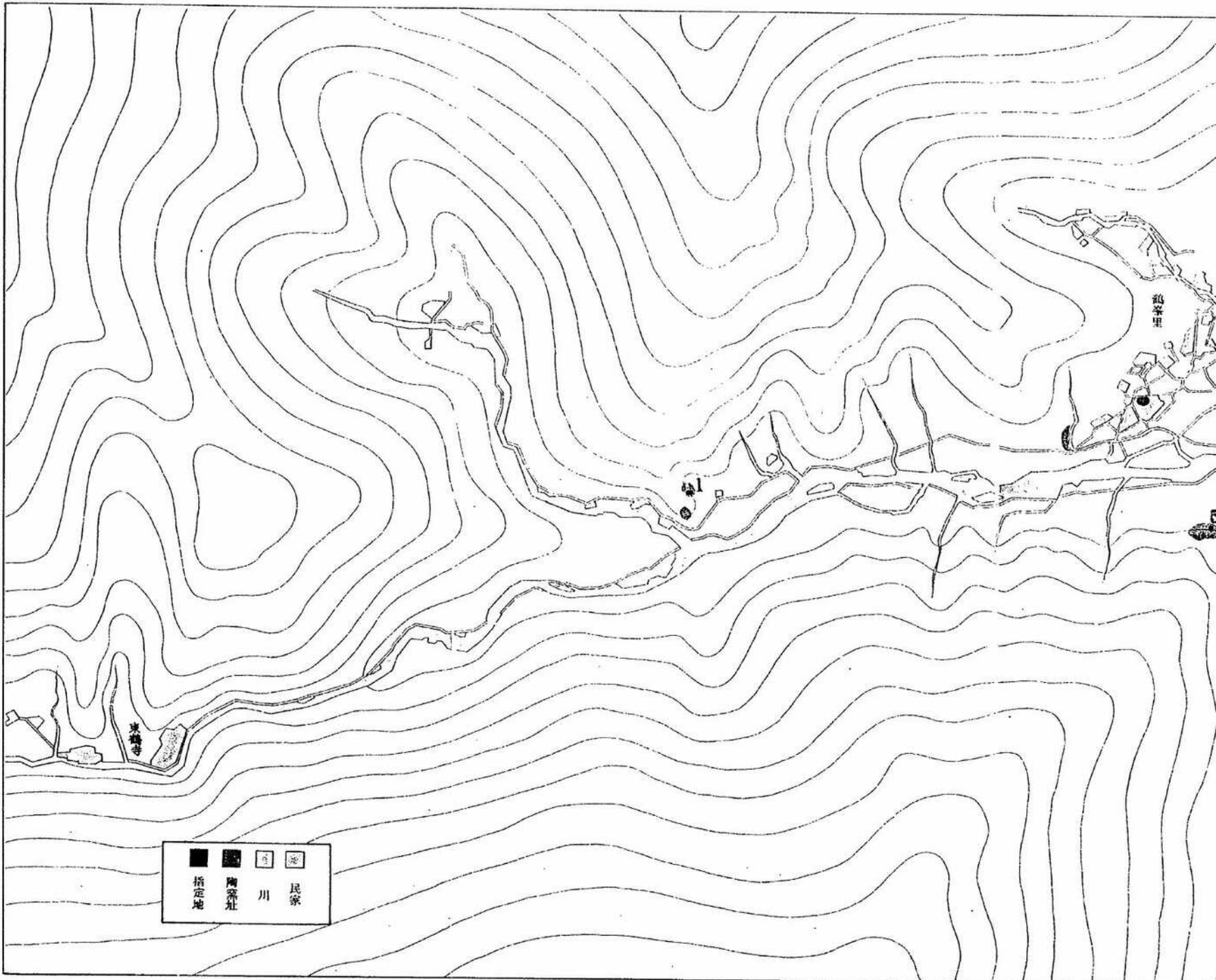
裏面白紙





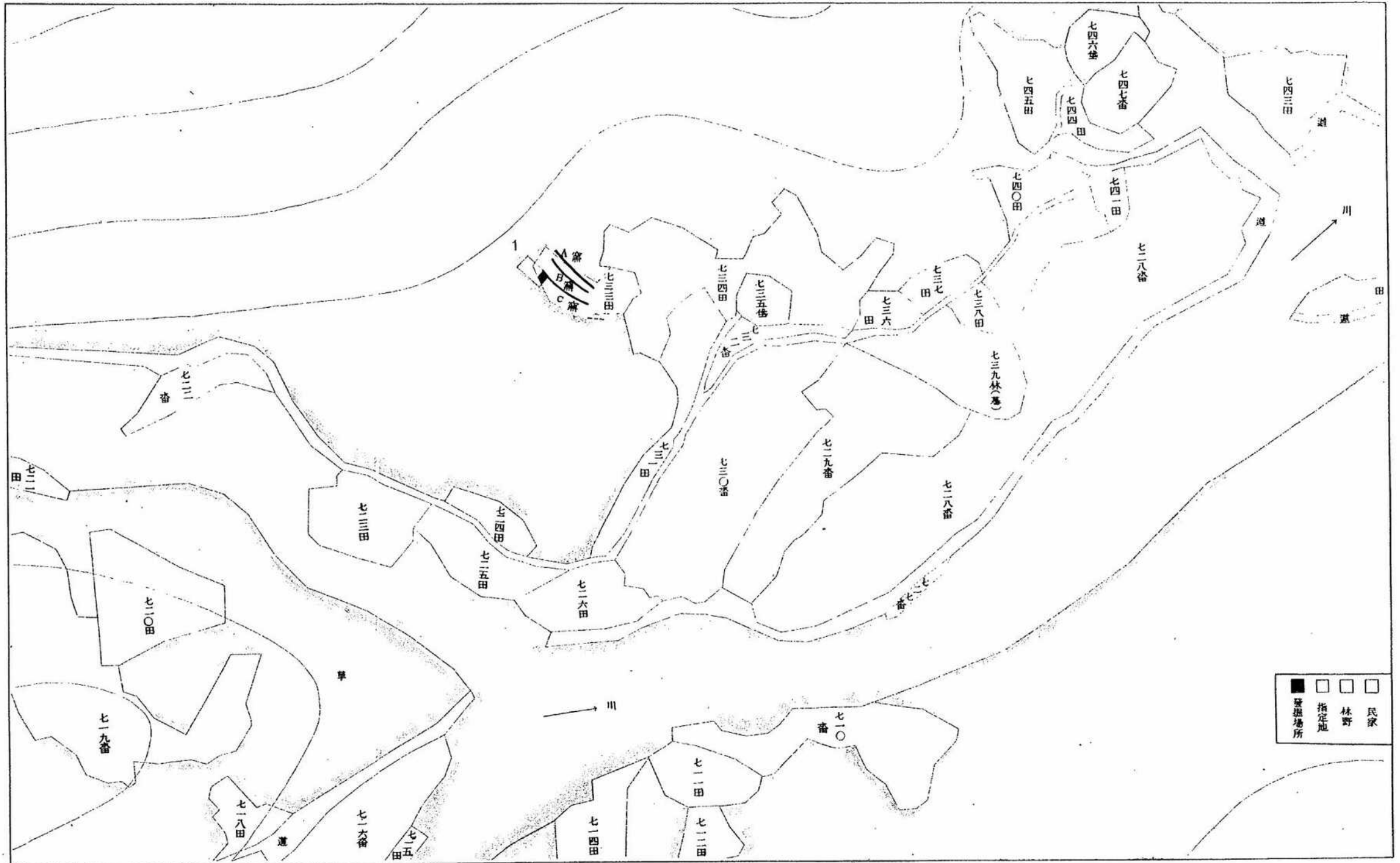
0 100 500m

圖版第二 公州郡反浦面鶴峯里附近之圖



裏面白紙

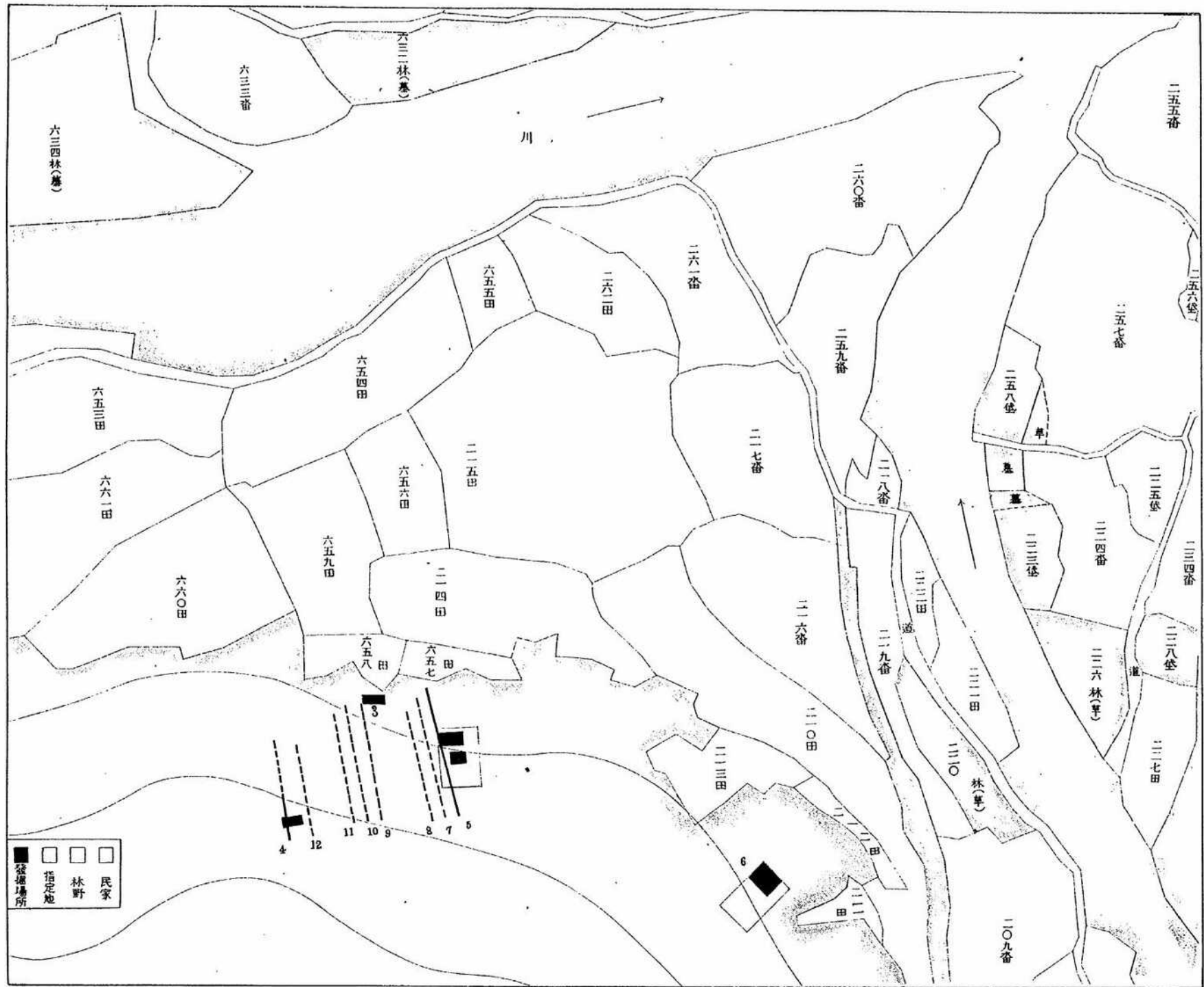
圖版第三 鶴峯里第一陶窯址附近之圖



■	□	□	□
發掘場所	指定地	林野	民家

裏面白紙





裏面白紙

鶴澤里陶窯址遠望



(1)

鶴澤里第一陶窯址



(2)

裏面白紙



(1)

鶴峯里第一陶窯址A及B窯

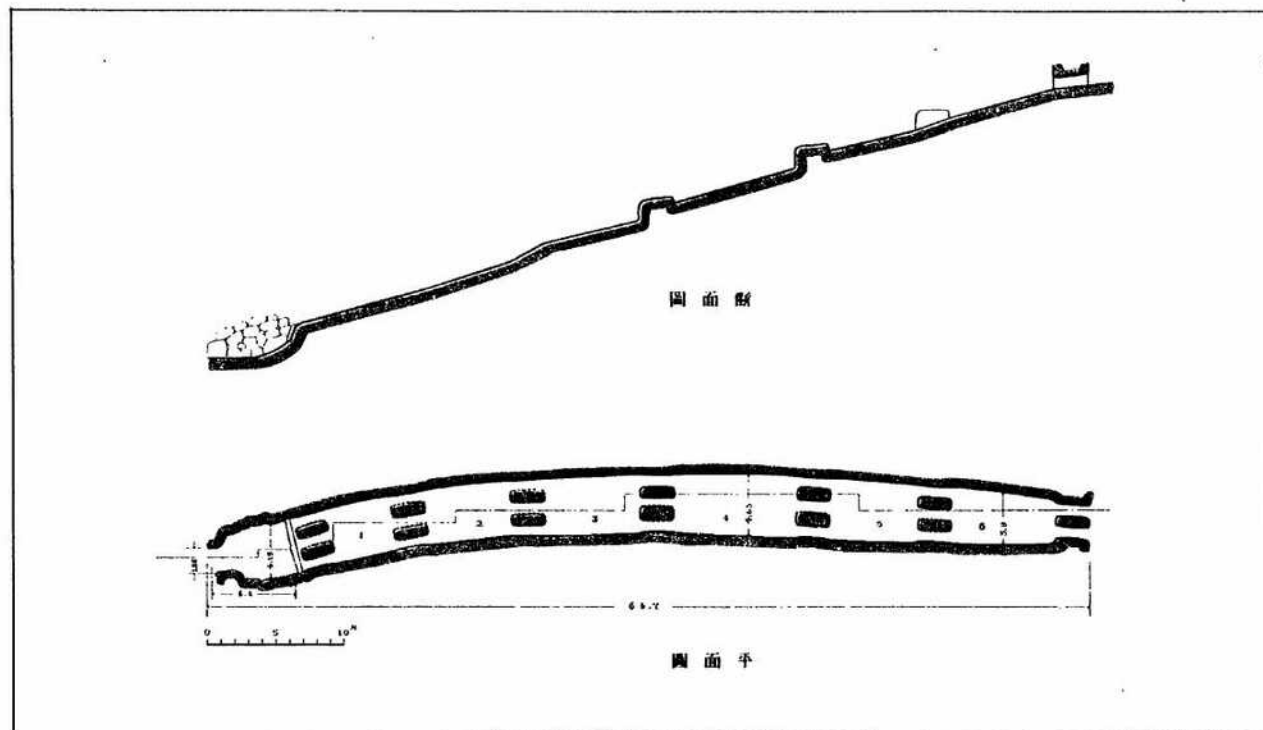


(2)

同上  
B 窯隔壁

裏面白紙

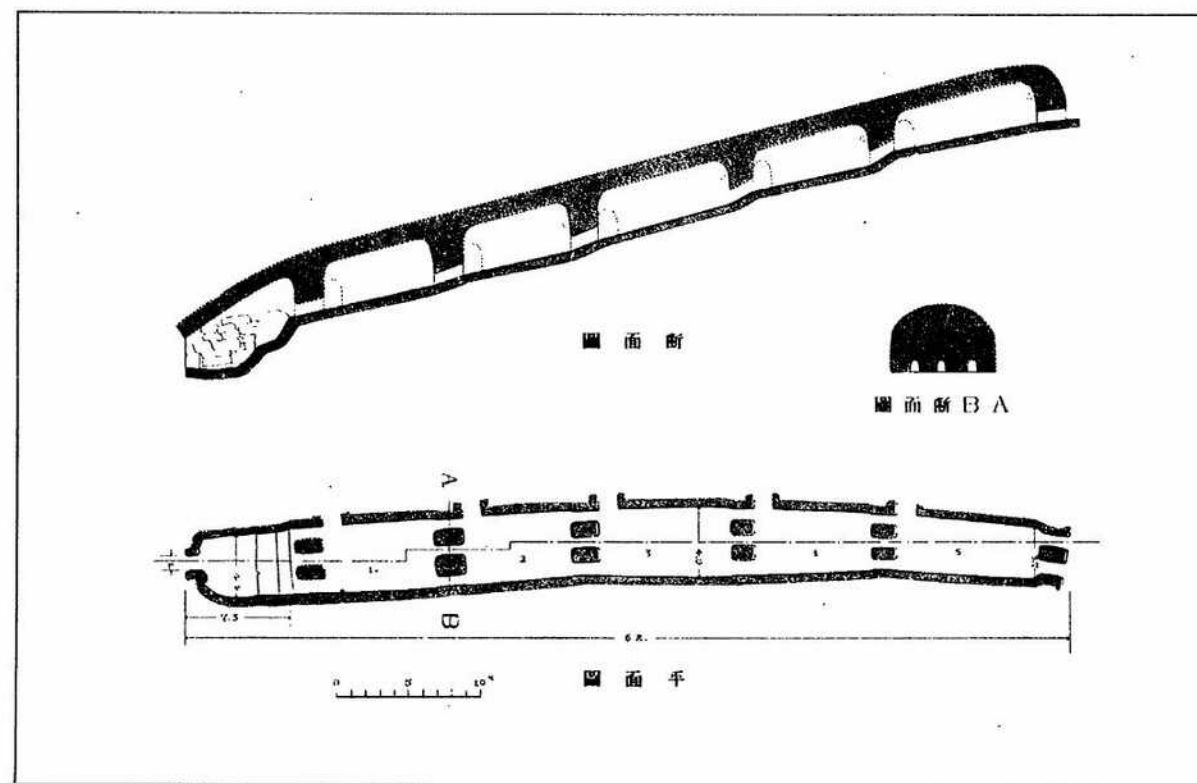
鶴峯里第一陶窯址A空實測圖



裏面白紙

圖版第七

鶴峯里第一陶窯址B窯實測圖

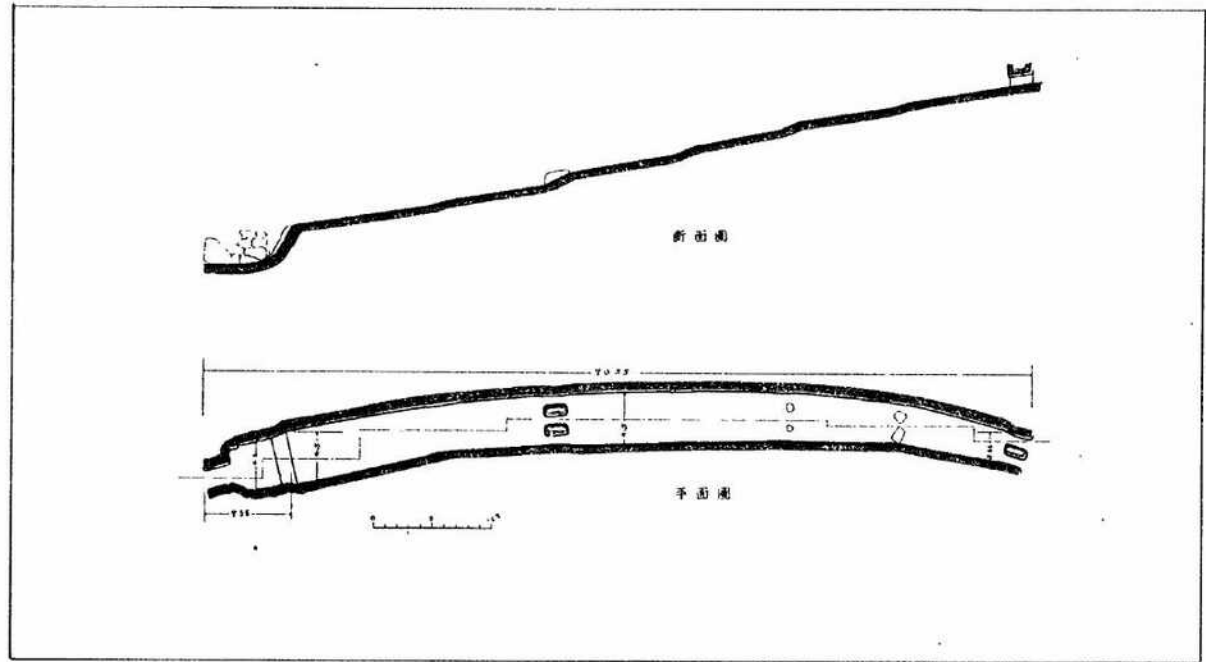


圖版第八

裏面白紙

裏面白紙

鶴峯里第一陶窯址C窯實測圖



圖版第九



鶴子里第一陶窯址出土 白磁器殘缺

長五分六分一 高 (1)



同上 黑釉壺

口徑四分三寸三 高 六分五寸三 (2)

裏面白紙



口徑一寸三分七分 (2)  
高四寸五分五厘



口徑一寸三分三厘 (1)  
高四寸八分

禮亭里第一陶窯址出土 黑釉瓶

裏面白紙

圖版 第一一



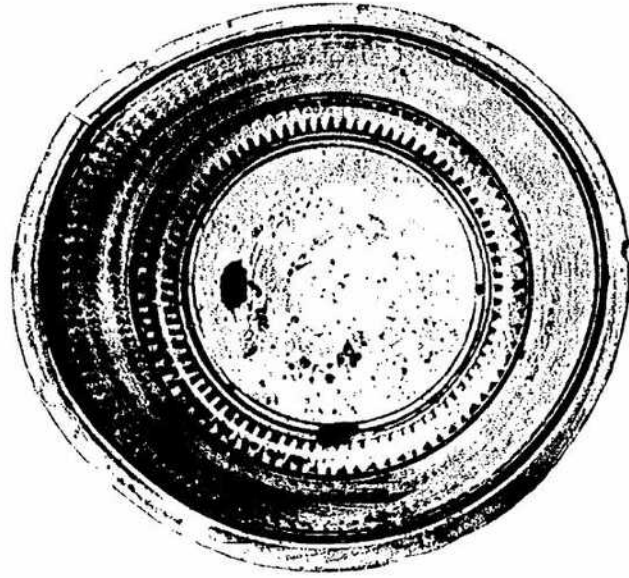


勸業里第三陶窯址陶片層剖面



同上

裏面白紙



饒平里落三陶器出土 三足土盤內面及口面



分四寸 寸四 高  
分九寸 一 日

裏面白紙



口径四寸四分 厚五分七分 (3)



(1)

鶴峯里第三陶窯址出土  
三島手小皿殘缺



現高三寸六分五厘 厚二寸五分 (4)



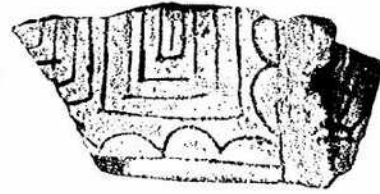
口径三寸三分九厘 厚六分四厘 (3)

同上  
刷毛目器及繪三島瓶殘缺

裏面白紙



分四寸一 高 (2)

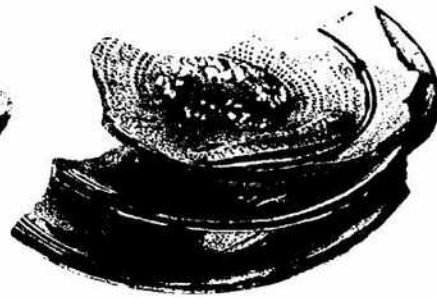


(1)

鶴峯里第三陶窯址上層出土  
三島破片及三島子小皿殘缺

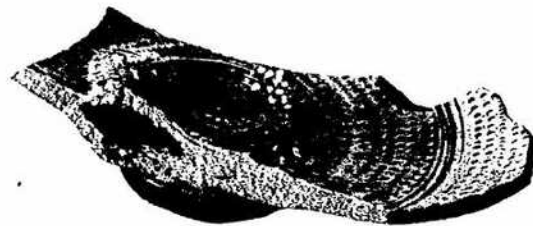


底三分七寸四 徑四寸一分五寸一 高 (4)

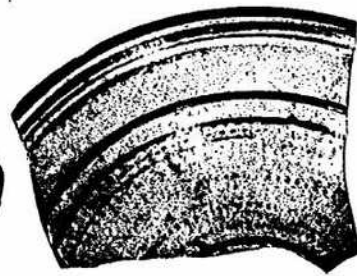


底四分七寸四 徑四寸 (3)

同上  
三島中層出土  
手小皿殘缺及刷毛目小皿殘缺



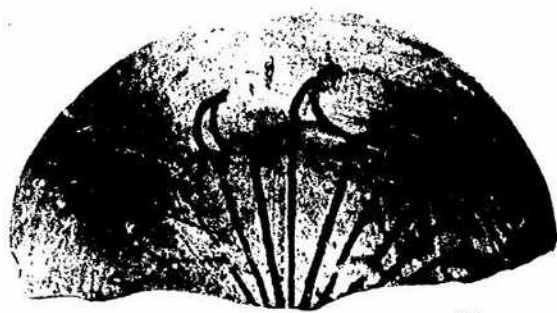
(6)



(5)

同上  
三島下層出土  
手小皿殘缺

裏面白紙



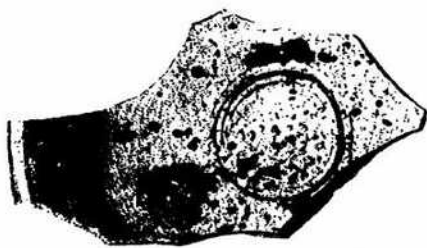
(1)

鶴峯里第三陶窯址上層出土  
繪三鳥馬壺殘缺

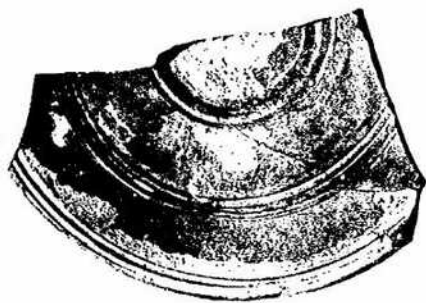


(2)

同上 下層出土  
繪三鳥依壺破片



(3)



(4)

同上 下層出土  
素燒小皿殘缺及刷毛口小皿殘缺

裏面白紙



口八分七寸四分 高一分二寸 (2)



口八分六寸四分 高一分四分 (1)

鶴峯里第四陶窯址出土  
白磁小皿



分五寸四 高一分 (1)



口六分一寸六分 高一分九寸 (3)

同上  
繪三鳥針殘缺  
白磁平鉢殘缺  
二個慈葱及



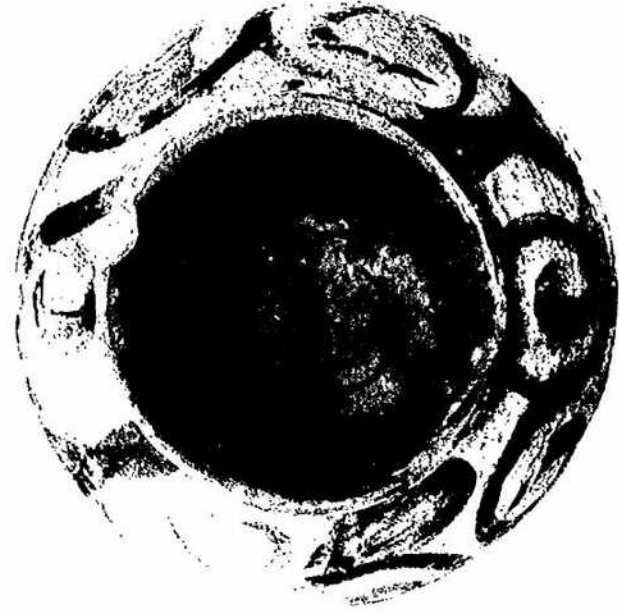
分四寸四分 高一分二分 (6)



口八分三寸四分 高一分五分六寸 (5)

同上  
刷毛目盤及刷毛目小皿

裏面白紙

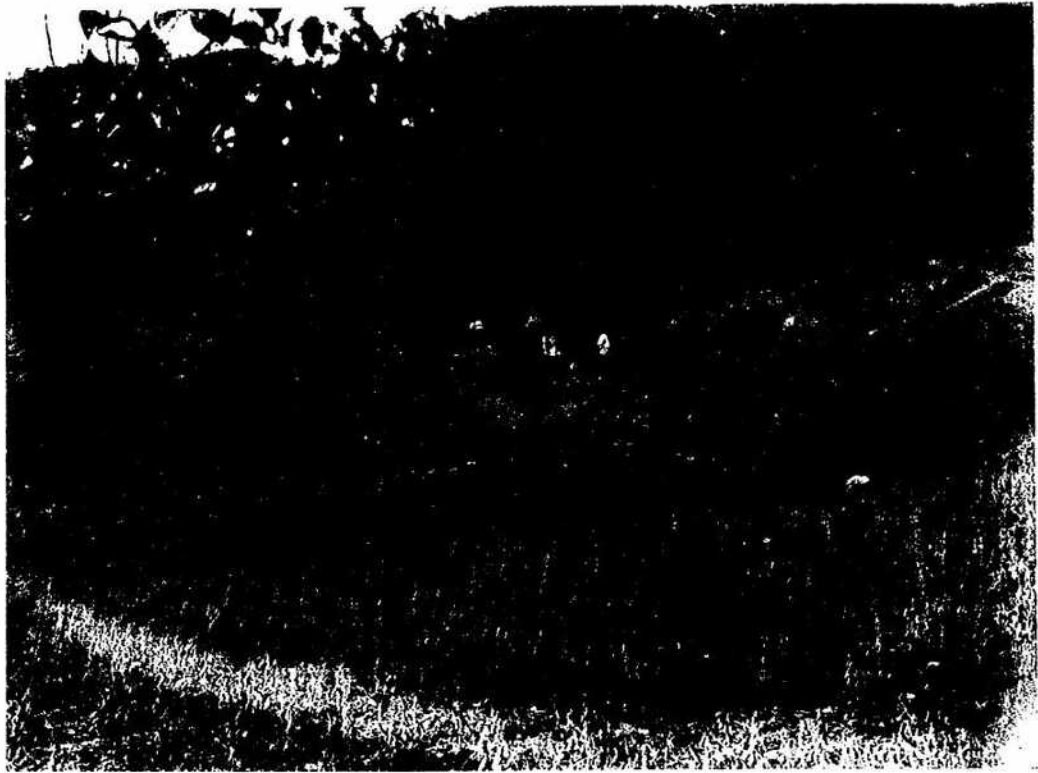


鶴峯皇帝四陶窯址出土 繪三鳥壺平面及陶面



口徑三寸一分九厘  
高四寸六厘

裏面白紙



鶴峯里第五陶窯址發掘狀況

圖版 第一九

裏面白紙

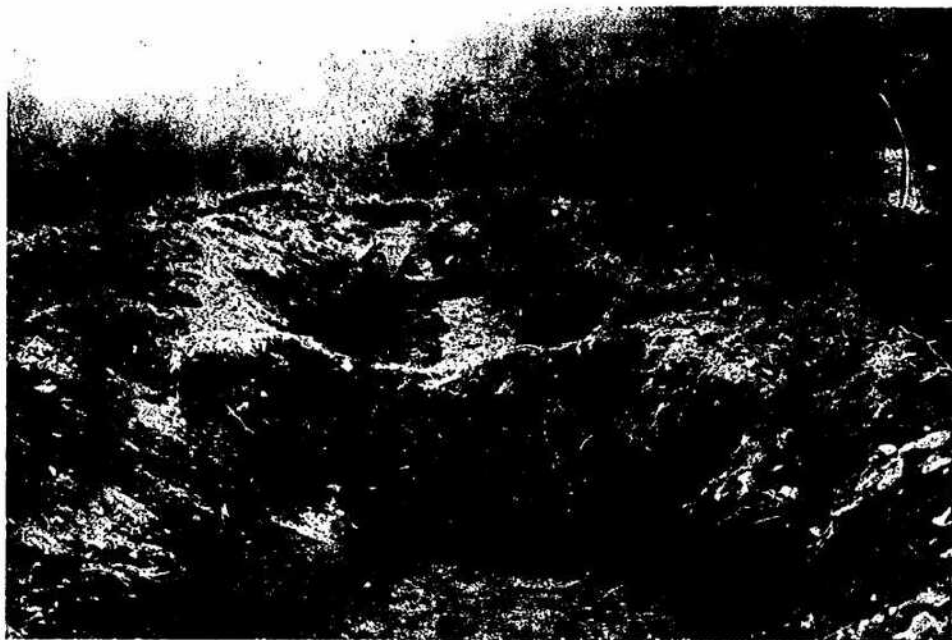




鶴峯里第五陶窯址陶層斷面及發掘狀況

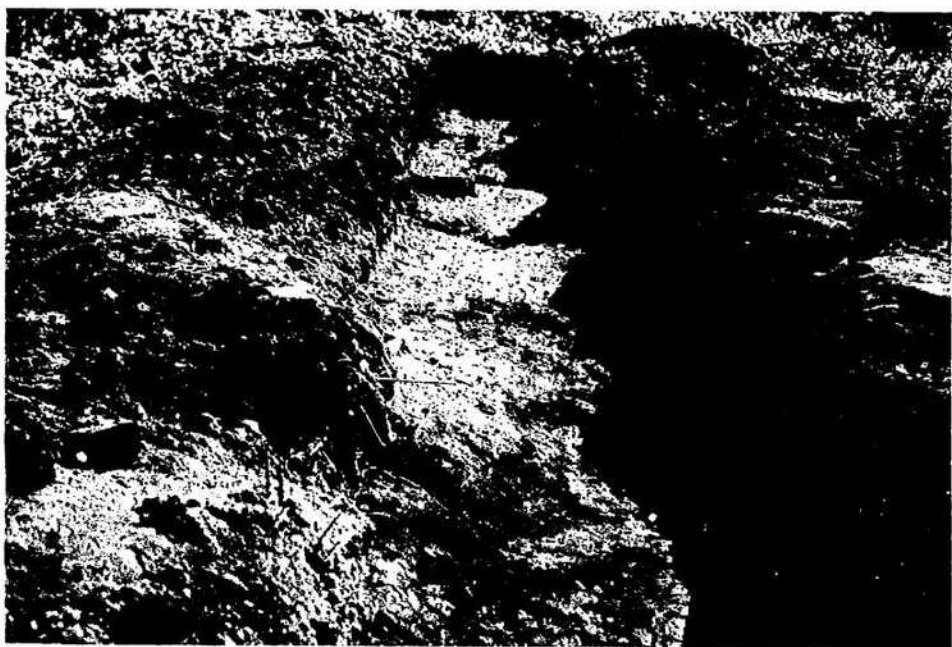
圖版 第 110

裏  
面  
白  
紙



鶴峯里第五陶器址第六室以上

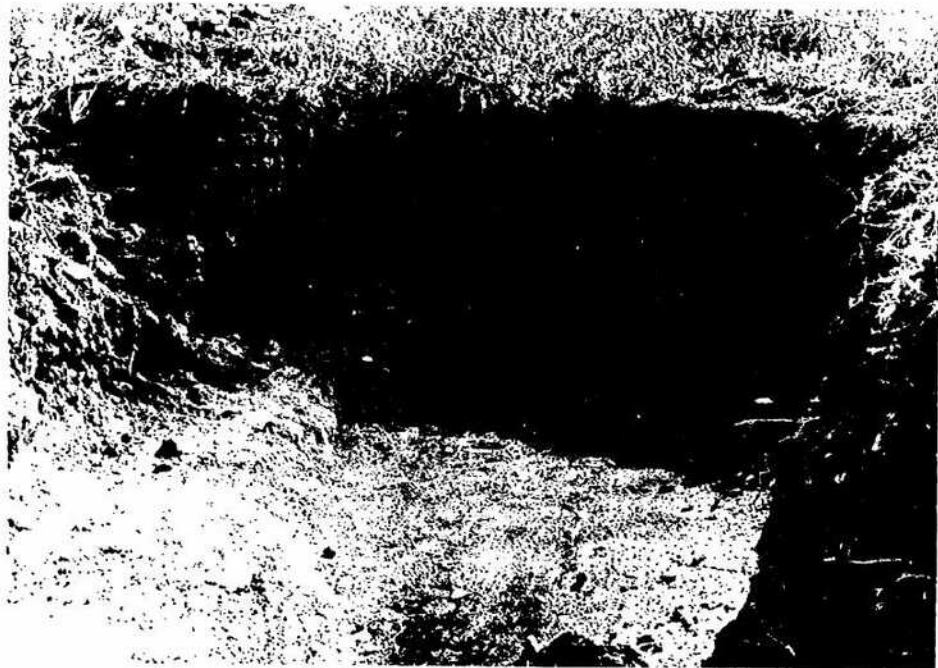
(1)



同上 第六室以下

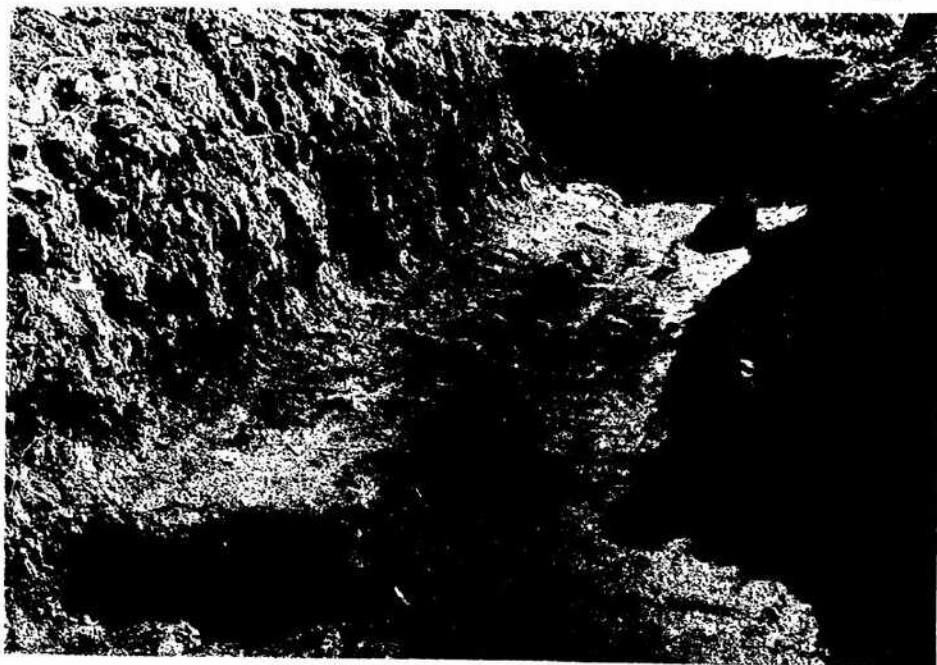
(2)

裏面白紙



(1)

鶴巻里第五岡窯址第六室陥壁



(2)

同上  
通竈孔間の束柱

裏  
面  
白  
紙



鶴澤第五陶室址煙出孔

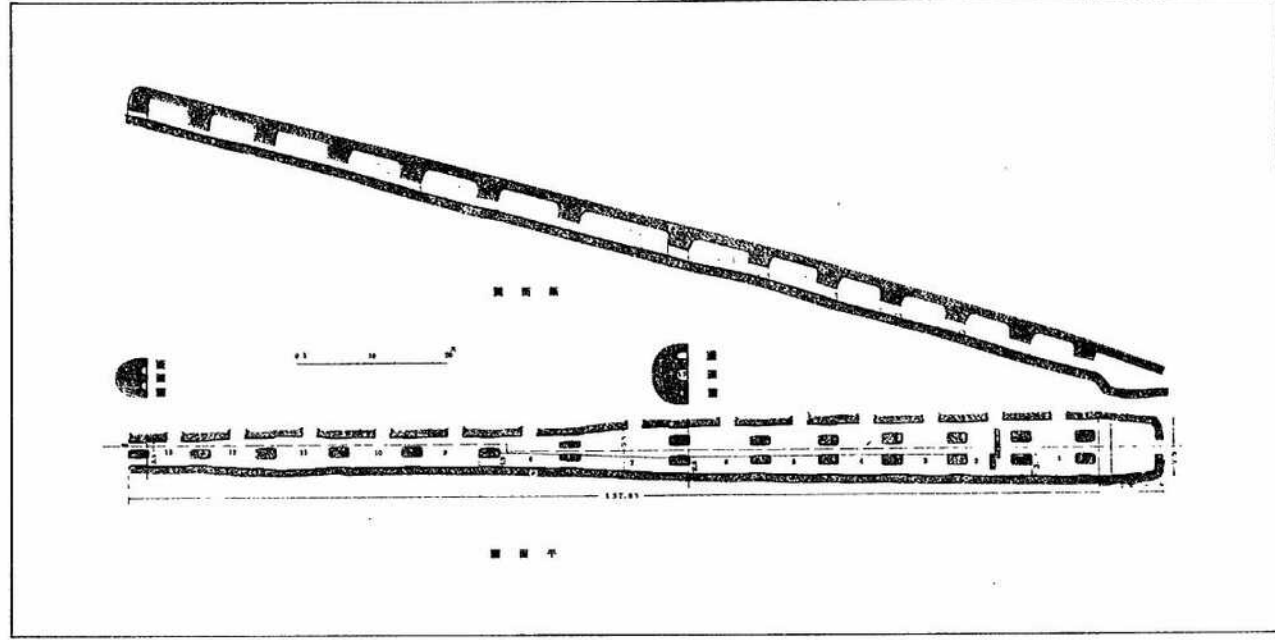
(1)



同上第七室出入口

(2)

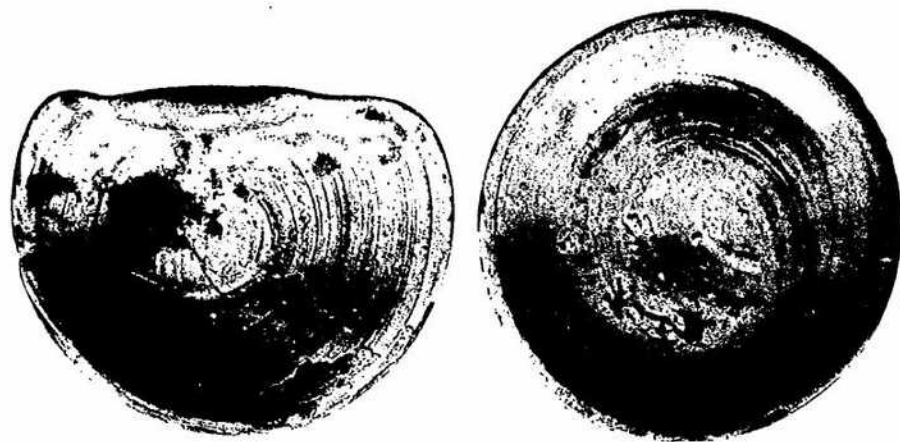
裏面白紙



新里第五陶窯實測圖

裏面白紙

圖版 第二四



鶴峰里第五陶窯址出土 刷毛目小皿內面及側面

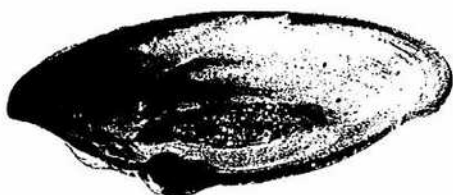


徑二分五寸四 標口 (2)  
厚四分九 高



分四寸四 標口 (1)  
厚四分九 高

同上 三島手小皿殘缺及刷毛目皿殘缺



分三寸五 標口 (1)  
分五寸一 高



徑八分八寸三 標口 (3)  
厚五分三寸一 高

裏面白紙

鶴峯里第五陶窯址出土 繪三鳥盤殘缺內面及側面



分九寸一 高 (1)



分三寸二 高 (2)

同上 繪三鳥水注殘缺



分二寸五 口徑 (3)  
分五寸八寸二 高

同上 繪三鳥盤



口径四寸三分 厚二分 高一寸



口径四寸三分 厚二分 高一寸

鶴峯里第五陶窯址出土 刷毛目鉢



口径四寸四分 厚五分 高一寸三分



口径四寸四分 厚七分 高一寸三分

同上 刷毛目平鉢



口径六寸一分 厚六分 高一寸六分



口径四寸二分 高一寸

同上 刷毛目鉢

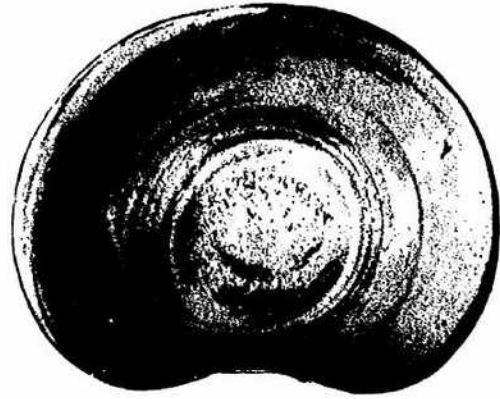
裏面白紙



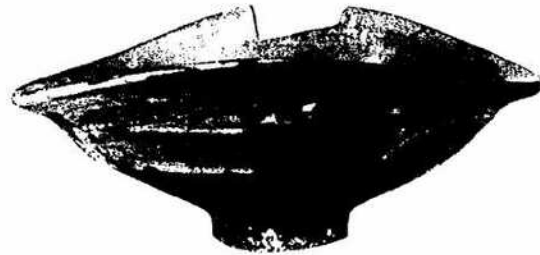


分一寸四(1.4)寸口 (1)  
厚五分五寸一 高

揚州第五陶窯址出土  
刷毛日器

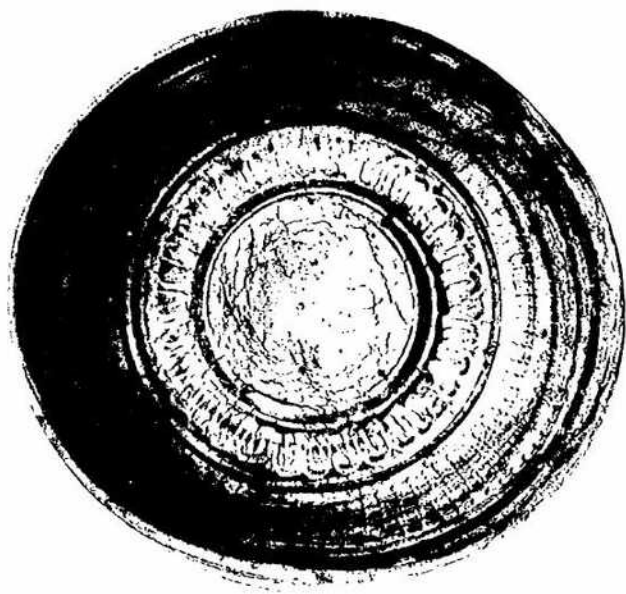


同上 刷毛日器內面及側面



加二分三寸四(1.2)寸口 (2)  
厚四分七寸一 高

裏面白紙



葛峰里第五陶壺出土 三島手平鉢内面及側面之圖案



口徑六寸一分九分 高一寸六分

裏面白紙

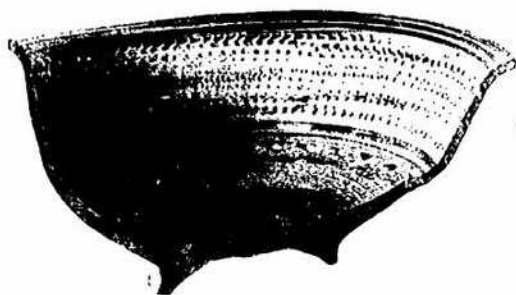


分三寸二 高 (2)



分八寸二 高 (1)

鶴峯里第五陶窯址出土  
繪三鳥盤外缺



分五寸二 高 (4)



分四寸六寸三 高 (3)  
分三寸二 高

同  
三鳥手盤及同外缺



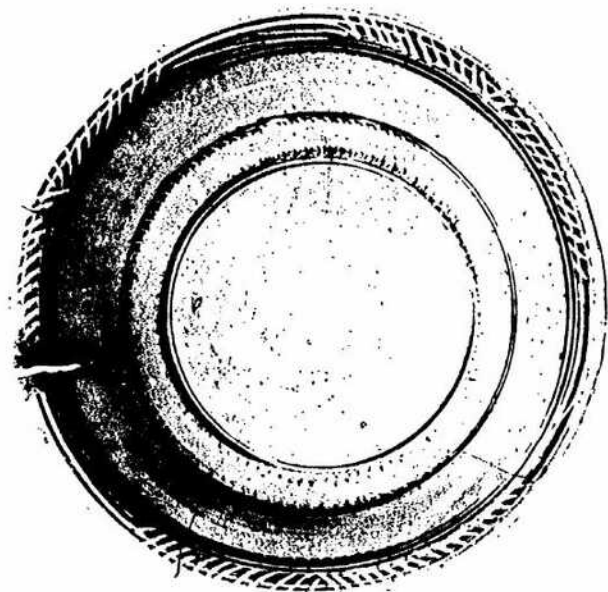
分七寸二 高 (6)



分六寸三 高 (5)  
分六分四寸二 高

同  
繪三鳥脚附杯

裏面白紙



鶴峯里第五陶窯址出土三鳥手鉢内面及側面

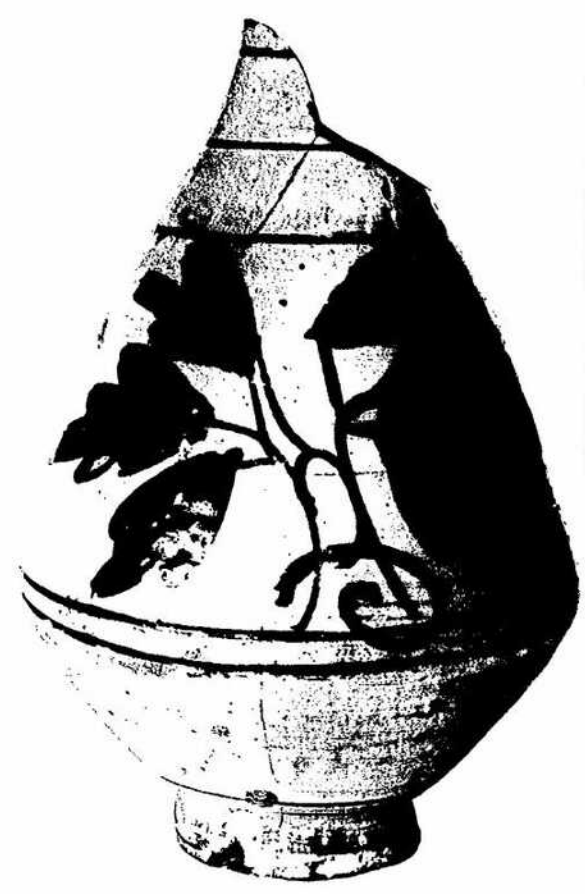


口徑九寸五分 高九寸二分

裏面白紙

裏面白紙

鶴峯里第五陶窯址出土 繪三鳥瓶殘缺



高 八寸三分六厘  
闊 五寸六分八厘 (1)



徑 二寸五分九厘  
高 二寸 (2)

同上 繪三鳥平鉢殘缺

圖版 第三三



勸業館第五回空井出土 繪三島壺外缺六種

裏面白紙



口径八分二寸三釐 (2)  
底五分八寸三釐 高



口径九寸二釐 (1)  
底四分八寸三釐 高

勸業里第五陶窯址出土 繪三鳥壺



(5)



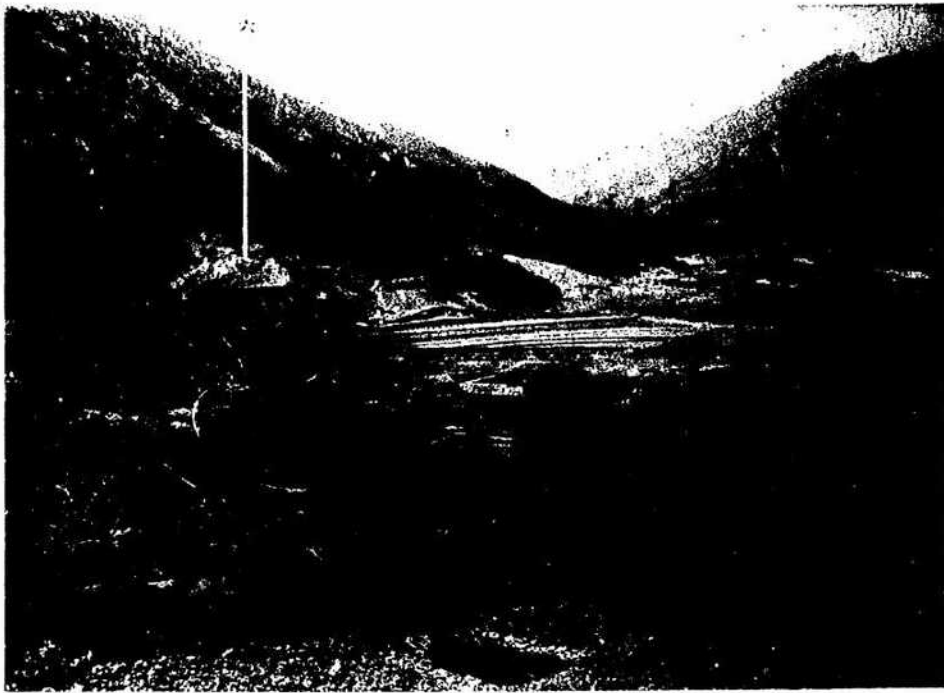
(4)



(3)

同上 繪三鳥瓶殘缺

裏面白紙



鶴峯里陶窯址遠望

(1)

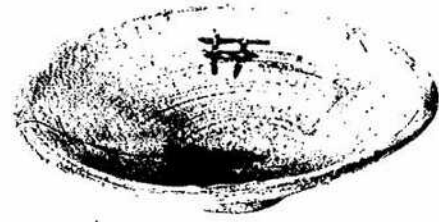


鶴峯里第六陶窯址發掘狀況

(2)

裏面白紙



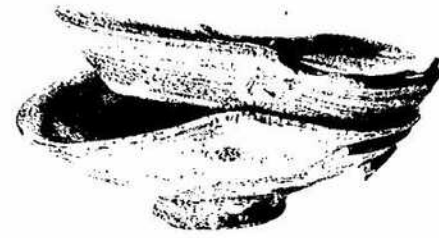


加八分五寸四 徑 口 (2)  
分二寸一 高

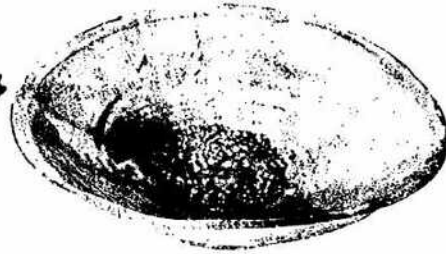


加七分一寸一 高 (1)

鶴峯里第六陶室出土  
刷毛目小皿



加五分九寸三 徑 口 (4)  
加五分一寸一 高

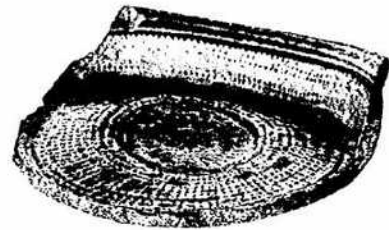


加一分四寸四 徑 口 (3)  
加七分二寸一 高

同  
刷毛目小皿



加五分六寸四 徑 口 (6)  
加七分一寸一 高



(5)

同  
三島手上小皿殘缺

裏面白紙



鶴岡里第六陶器出土 繪三島皿殘内面及側面

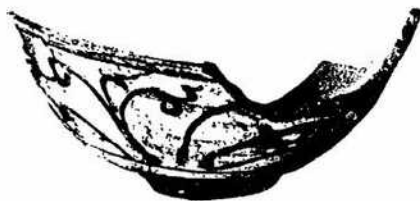


口径四寸七分  
高一寸三分九厘

裏面白紙

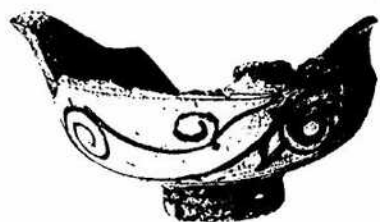


寬一分四寸二分 高一分 (9)



寬一分四寸二分 高一分 (10)

鶴峯里第六陶窯址出土  
繪三鳥器殘缺



寬一分四寸二分 高一分 (11)



寬一分四寸二分 高一分 (12)

同上



寬一分四寸二分 高一分 (13)



寬一分四寸二分 高一分 (14)

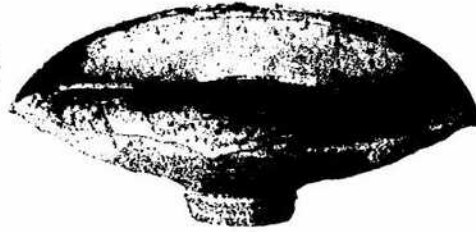
同上  
刷毛目銀

裏面白紙

鶴峯里第六陶窯址出土  
刷毛目鉢



分一寸六 口 (2)  
分八寸二 高

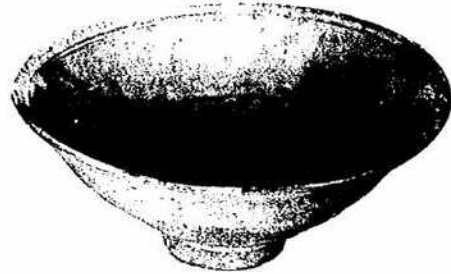


厘五分七寸六 口 (1)  
分九寸二 高

同上

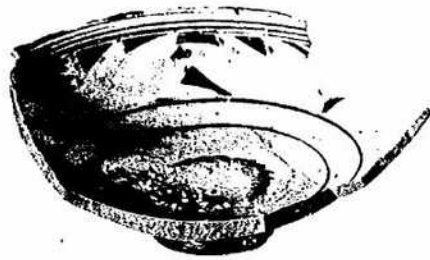


厘五寸六 口 (4)  
厘七分四寸二 高

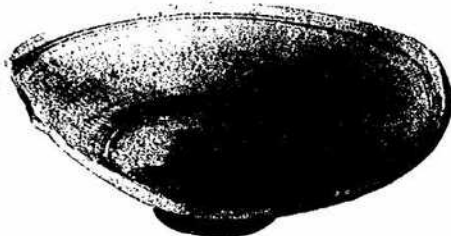


厘八分四寸六 口 (3)  
厘二分六寸二 高

同上  
三島手平鉢殘缺

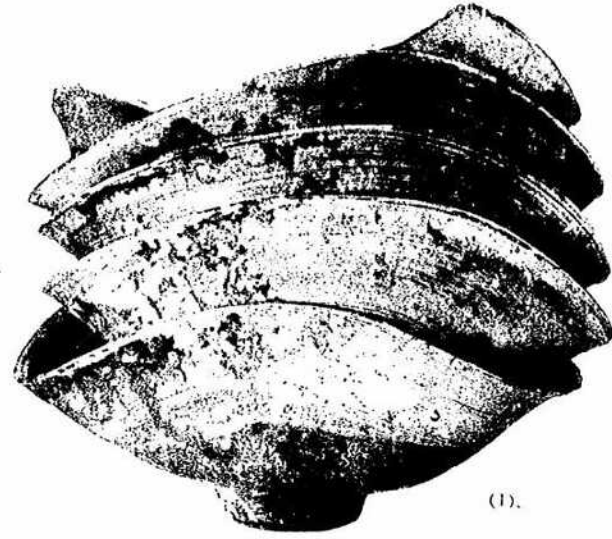


分六寸二 高 (6)



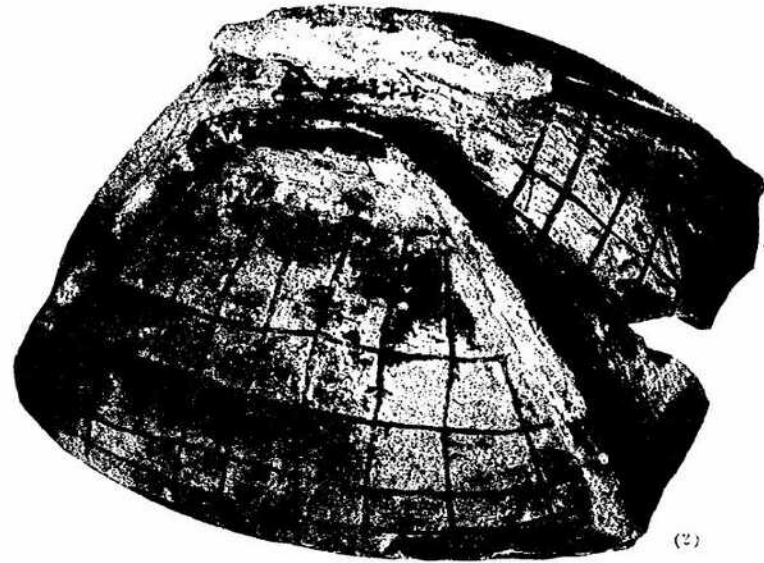
厘八分六寸六 口 (5)  
厘一寸二 高

裏面白紙



(1)

勸孝里第六陶窯址出土 刷土目鉢 五胡鉢



(2)

同上 素燒蓋

裏面白紙

鶴峯里第六陶窯所出土  
白磁



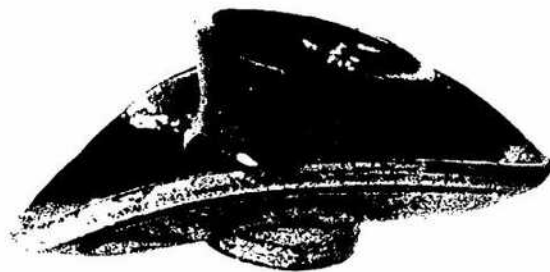
口径一寸三分 高一寸二分

同上 繪三鳥



口径一寸三分 高一寸二分

同上 繪三鳥

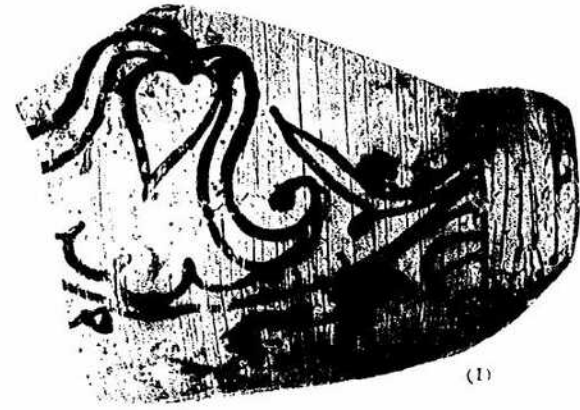


(3)

圖版 第一

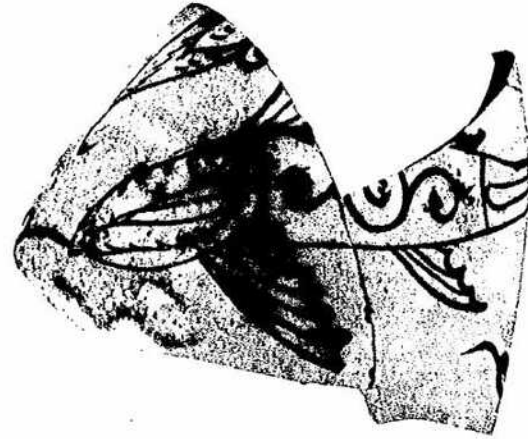
裏面白紙

勸業里第六陶窯址出土  
繪三鳥陶器破片



(1)

同上



(2)

同上 臺灣陶版斷片



(3)

圖版 第四二

裏面白紙



蔡誌陶版斷片 本府博物館藏

(1)

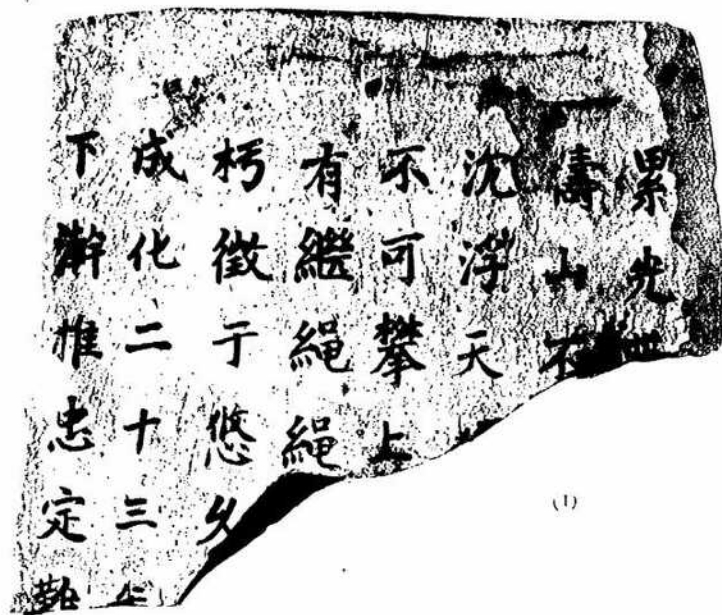


蔡誌陶版斷片

本府博物館藏

圖版 第四三





墓誌附版圖片

上海博物館藏

(1)



同上

同上

(2)

裏面白紙

同上



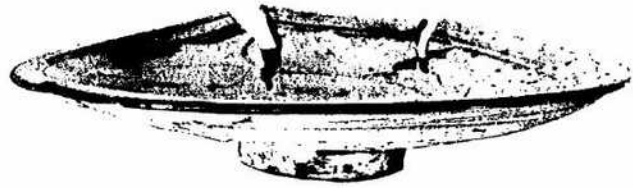
嘉治陶版斷片

本館博物館藏

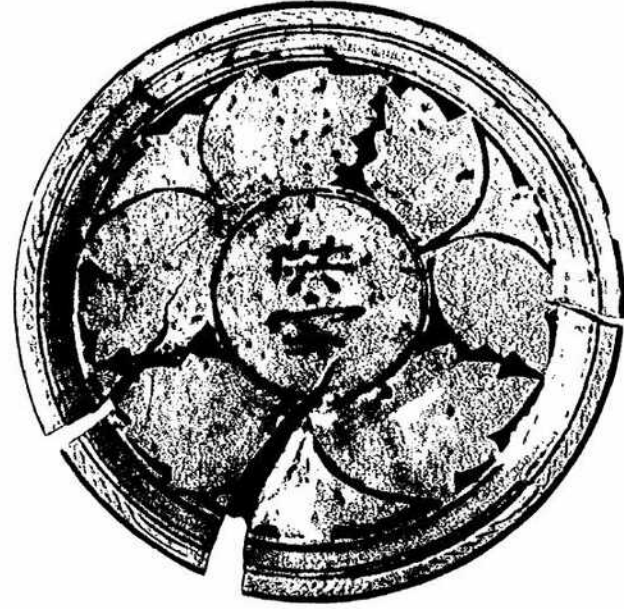
(1)

裏面白紙

三島手皿前面及内面



本館博物館蔵



分六寸五分 口高 (1)

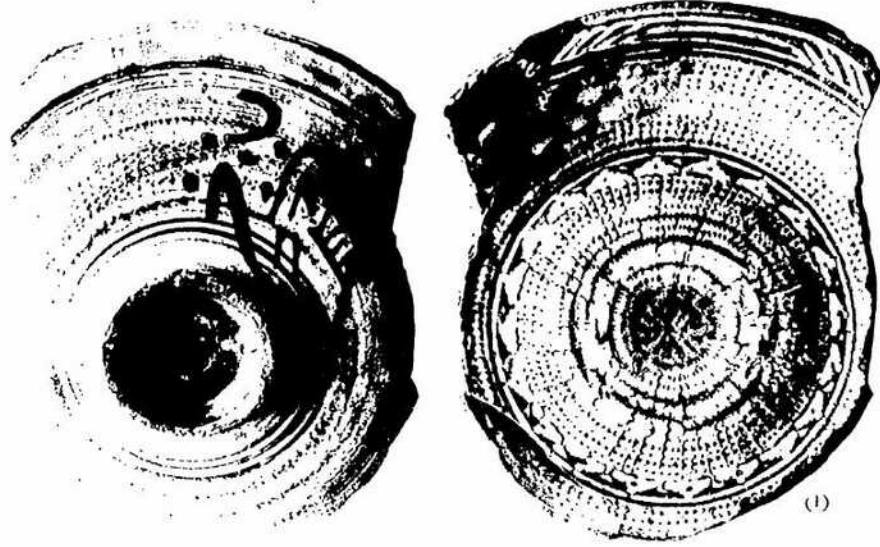
紫誌陶版



本館博物館蔵

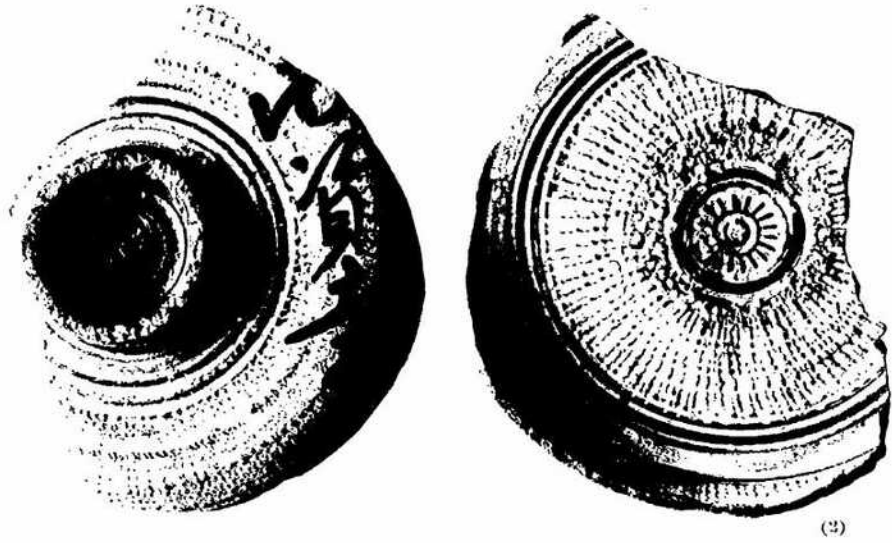
厚五分七寸九 長 (2)

圖版 第四六



三島十平針殘缺內面及裏面

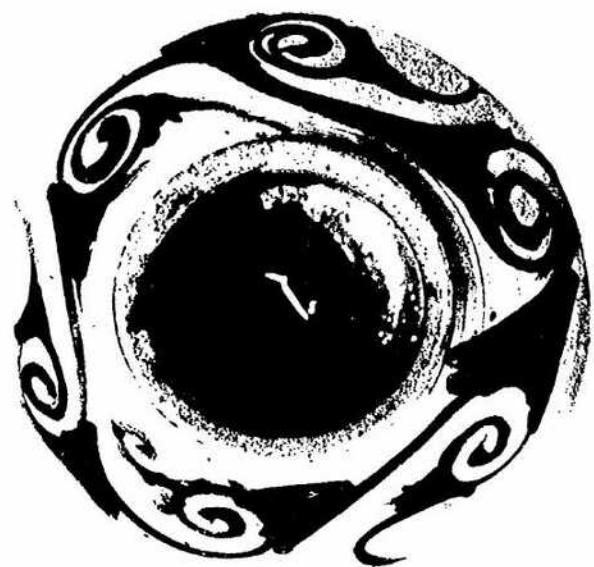
平尾傳鈔圖



同上

同上

裏面白紙



繪三島壺平面及側面



本麻博物館藏

口徑一分三寸四分  
高一分一寸五分

裏面白紙



繪三鳥盃  
小倉神戶館藏

口徑六寸五分  
高八分二厘 (1)



同上

鈴木式司氏藏

口徑九寸五分  
高四寸五分 (2)

裏面白紙



繪三島壺

野村朝古氏藏

(1) 口徑三寸三分  
高五寸二分

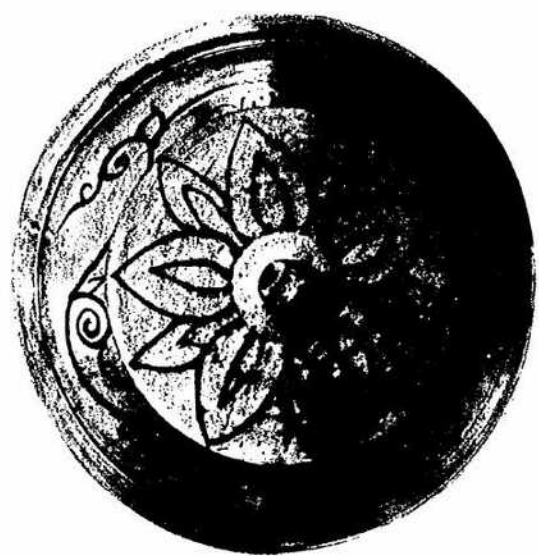


繪三島蓋附壺

李王家博物館藏

(2) 口徑三寸二分  
高四寸八分

裏面白紙



繪三鳥蓋附壺側面及平面

本府博物館藏

口徑八分二寸四  
高八分六寸九

圖版 第五 一

裏面白紙



繪  
三  
島  
水  
注

カ  
ス  
ビ  
ー  
氏  
藏



分二寸七 高 (2)

刷  
毛  
口  
横  
口  
瓶

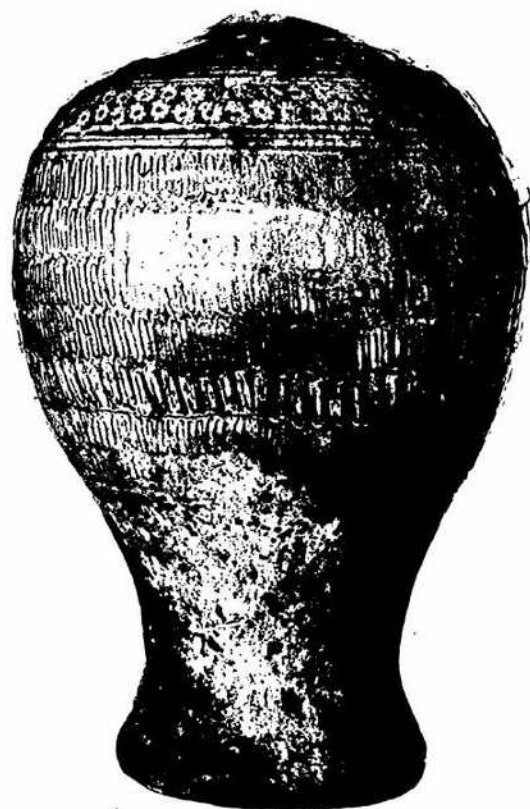
本  
府  
博  
物  
館  
藏



瓶七分九寸五 肩 附 (1)  
分九寸七 高

裏  
面  
白  
紙

三島手取殘缺



本館博物館藏

分七寸五釐圖(2)

三島手取



本館博物館藏

分二寸四釐口  
寸二尺一高(1)

國原 第五冊

裏面白紙

裏面白紙

繪三島瓶



淺川伯教氏藏

圖四分四寸二釐圓 (1)



繪三島瓶

鈴木式司氏藏

圖五分六寸一釐圓 (2)

圖版 第五四

裏面白紙

繪三鳥瓶



渡邊定一郎氏藏

分一吋三 口 高 (1)  
尺 一 高

繪三鳥瓶



李王家博物館藏

吋二分八寸一 口 高 (2)  
厘二分七寸八 高

圖版 第五 五



李王家博物館藏

圖版 第五六



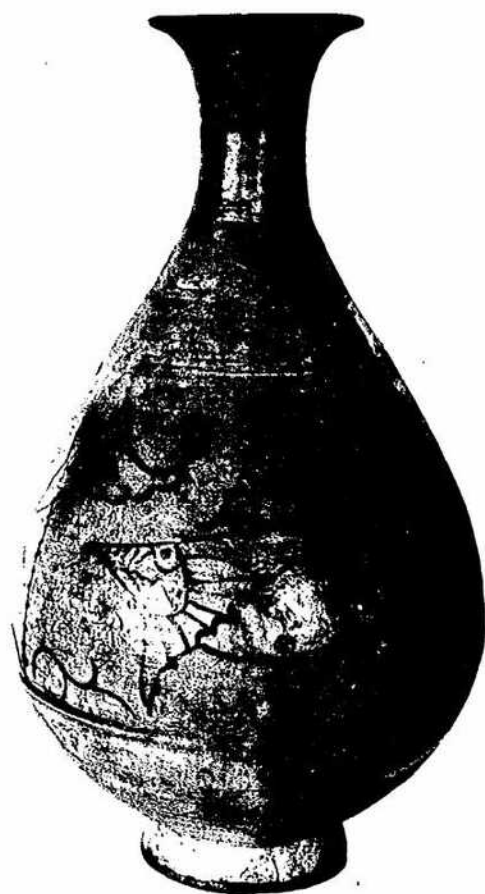
繪三島瓶

分九寸五厘 高  
厘五分七寸九

裏面白紙

裏面白紙

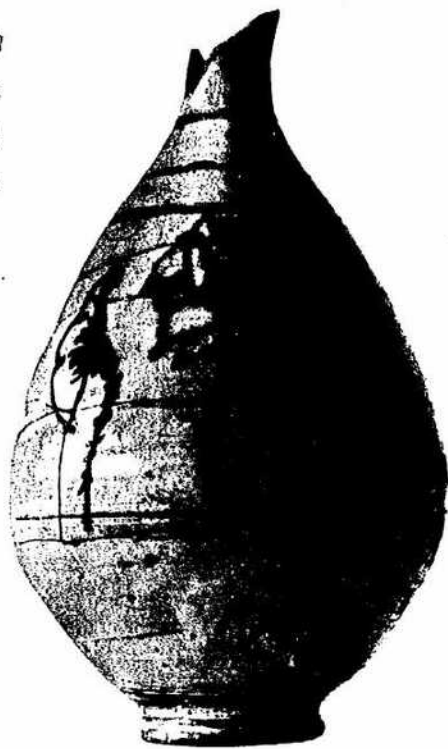
繪三島瓶



本府博物館藏

口徑二寸三分四厘 高九寸五分七厘 (1)

繪三島瓶

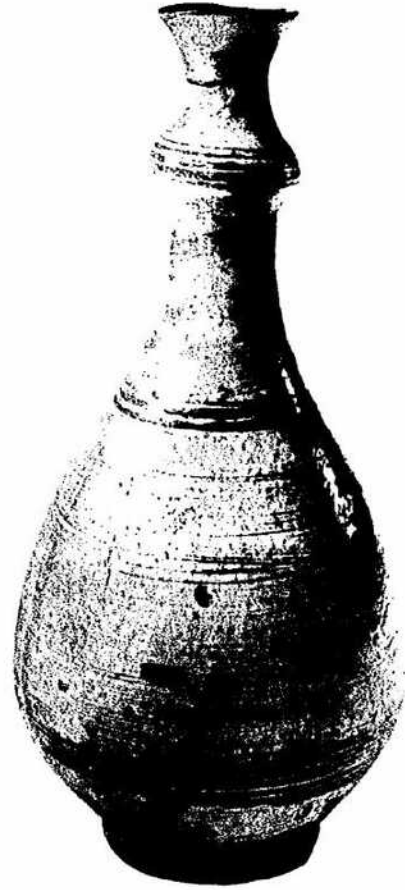


高木サ子氏藏

(2) 闊六寸五分

五七 版圖

鬍毛日弧形瓶



住丹屋男氏藏

徑五寸四指圖 (2)

圖版 第五八

三島手漬瓶



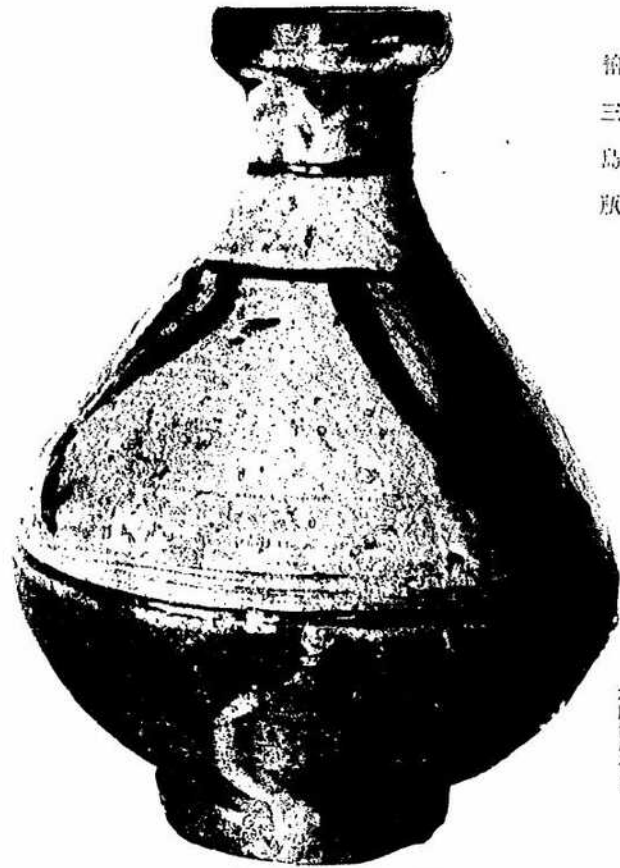
本府博物館藏

(1)

裏面白紙

裏面白紙

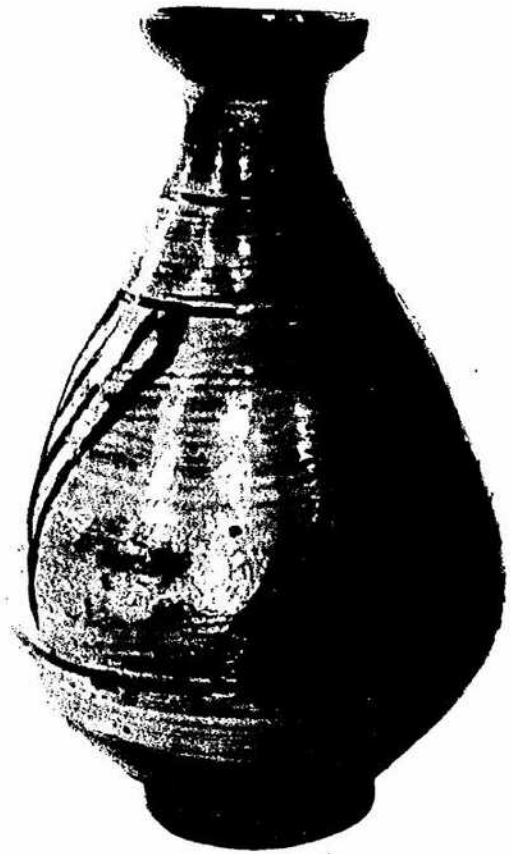
繪三島瓶



本府博物館藏

口徑一分二寸八分 高四寸四分 (1)

繪三島瓶



住井辰男氏藏

口徑一分二寸五分 高四寸七分 (2)

九 五 三 瓶 圖



繪三島水注



唐田常太郎氏藏

分四寸五 高 (1)

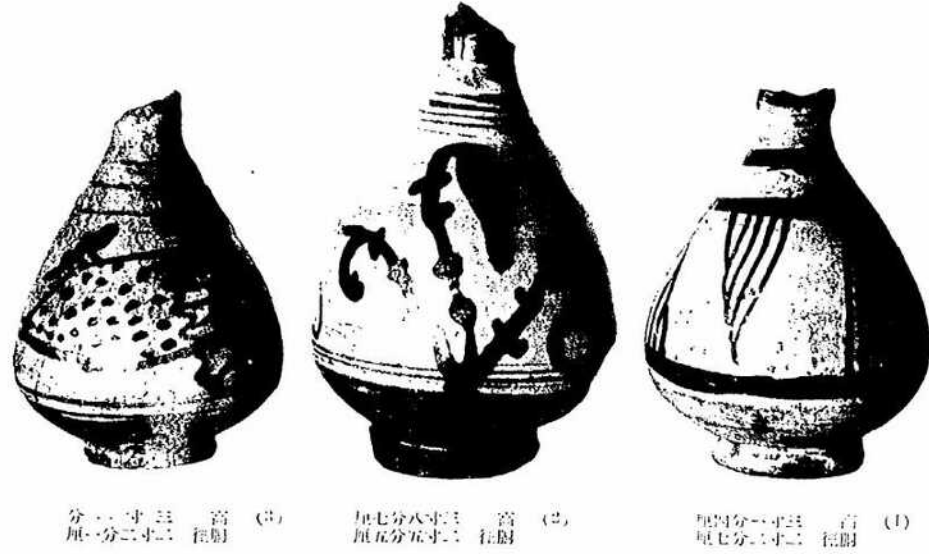
繪三島瓶



鈴木式司氏藏

寸一 瓶口 (2)  
分七寸四 高

圖版第六〇



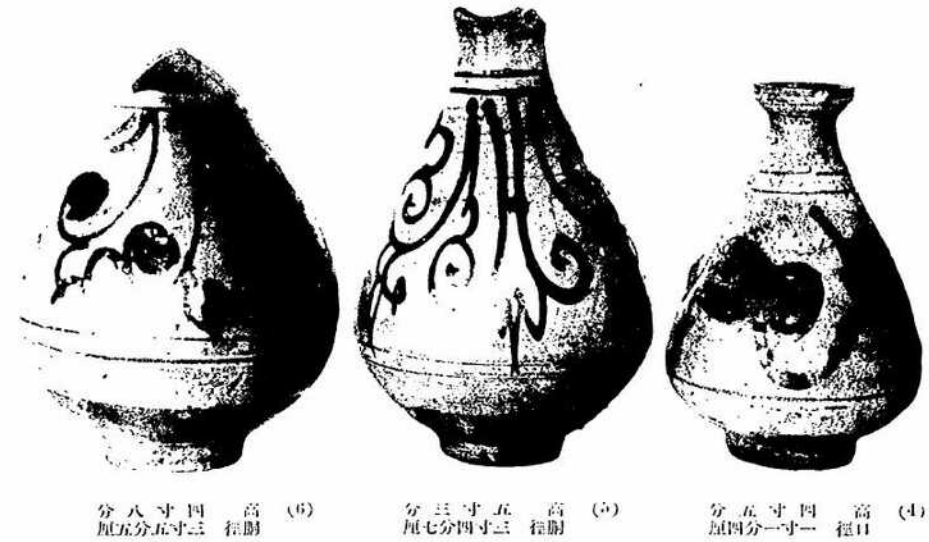
繪三鳥瓶殘缺

李王家博物館藏

分一吋三 高 (3)  
厘一分二二二 徑闊

分七分八寸三 高 (2)  
厘五分五寸三 徑闊

分四分一吋三 高 (1)  
厘七分二寸三 徑闊



繪三鳥瓶及殘缺

本館博物館藏

分八寸四 高 (6)  
厘五分五寸三 徑闊

分三寸五 高 (5)  
厘七分四寸三 徑闊

分五寸四 高 (4)  
厘四分一吋一 徑闊

裏面白紙

刷毛口小壺

鈴木武司氏藏



口径一分七寸五厘 (2)  
高一分六寸五厘

刷毛口盞

本府博物館藏



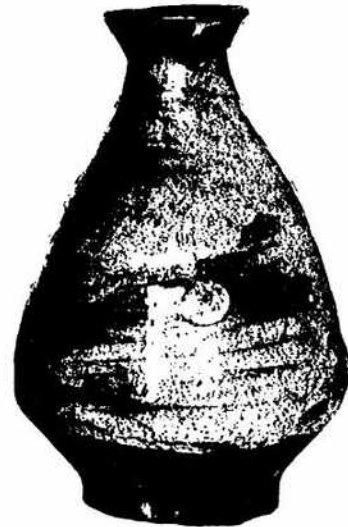
口径二分五厘 (3)  
高一分四寸五厘



口径四分二厘 (5)  
高八分二厘

刷毛口瓶

鈴木武司氏藏



口径八分五厘 (1)  
高九分二厘

繪三島瓶

井島隆氏藏



口径四分九厘 (4)  
高三分三厘

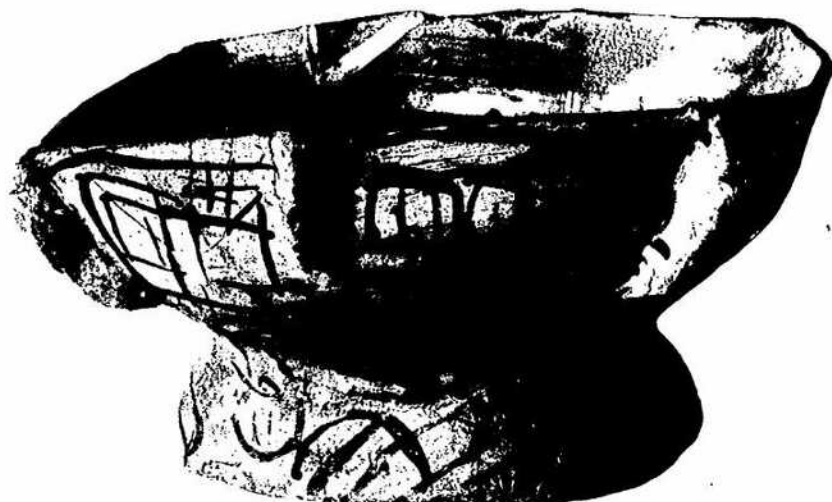
裏面白紙



黑釉水注

本館博物前藏

口徑二寸三分 高三寸五分 厚五分 (1)



繪三鳥窠形陶器

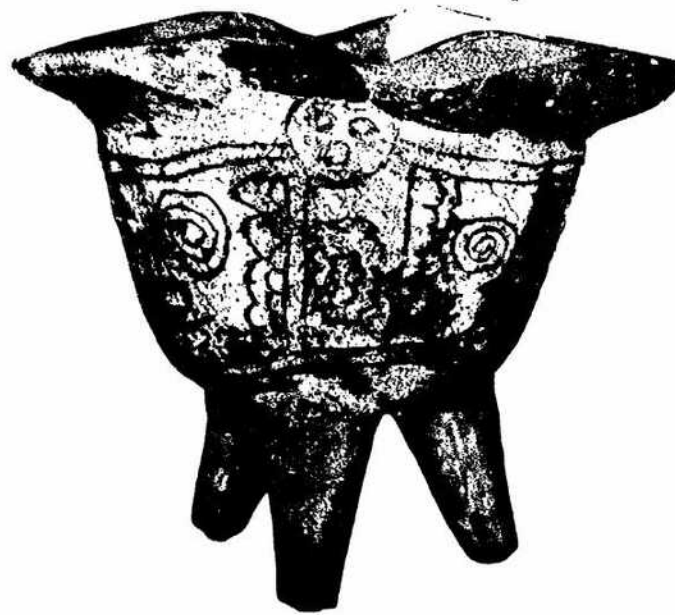
同上

口徑一丈七寸二分 高三寸六分 厚二分 (2)

裏面白紙

形三鳥形陶器

本府博物館藏



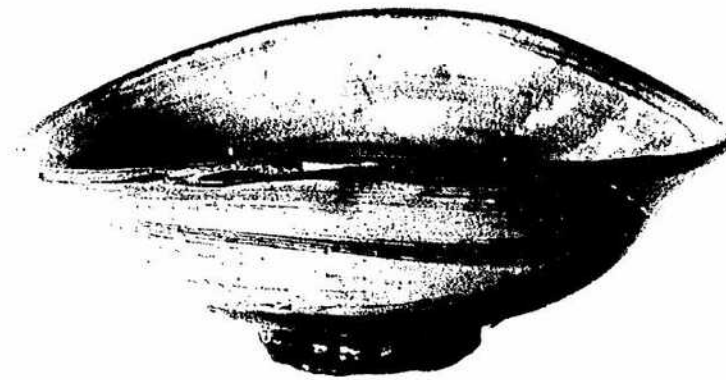
分六寸四(口)寸(高) (1)  
分五寸三



分八分四寸四(口)寸(高) (2)  
分五分九寸二

刷毛目形陶器

同上



刷毛目盤  
且井辰男氏藏

分八寸三釐口 (1)  
分八寸一釐高



三島手盤  
同上

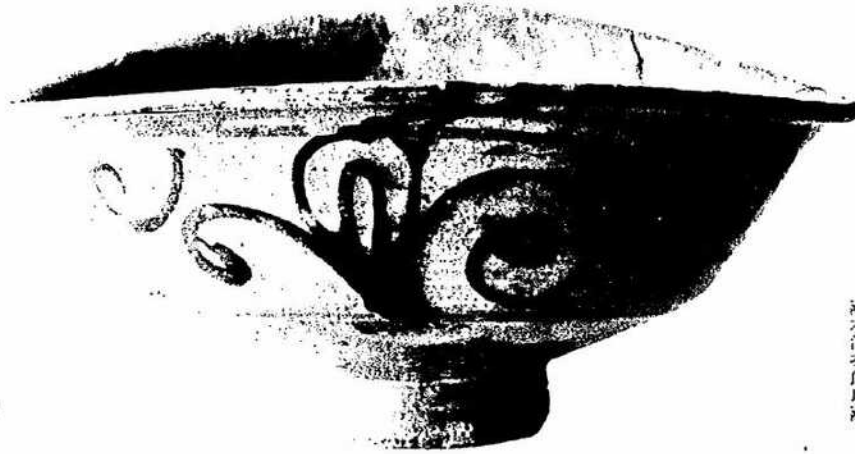
分五寸四釐口 (2)  
厘五分九寸一高

裏面白紙



繪  
三  
島  
鉢  
  
有  
賀  
光  
豐  
氏  
藏

分四寸四釐口 (D)  
分一寸二釐高

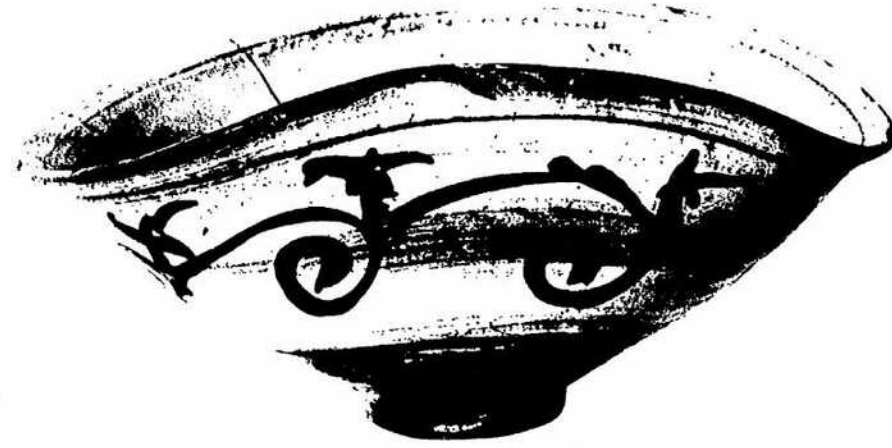


同  
上

藏  
本  
吉  
次  
郎  
氏  
藏

(E)

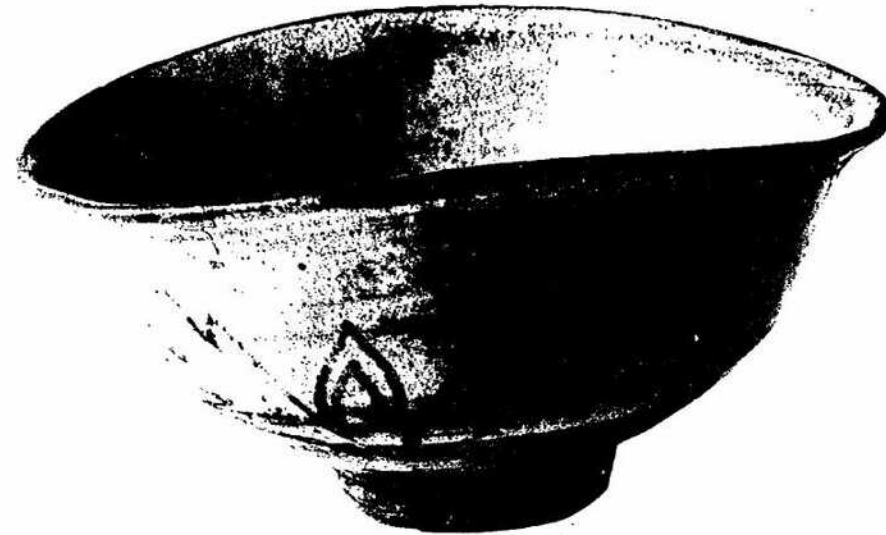
裏  
面  
白  
紙



分四寸六(長) 口徑 (1)  
分四寸二 高

繪三島壺鉢

横田五郎氏藏



分一寸五 口徑 (2)  
分五寸二 高

繪三島壺鉢

住井辰男氏藏

裏面白紙





通五分五寸五 徑四寸 高 通五分八寸 徑四寸 高

通五分五寸五 徑四寸 高  
通五分八寸 徑四寸 高



通五分九寸五 徑四寸 高 通六分六寸二 徑四寸 高

同 上  
同 上

裏面白紙



(2)



(1)

三鳥狀殘缺及針殘缺

平島原約前藏



(3) 口徑六寸九分 高四寸九分

三鳥把手附鉢

朴暗經氏藏

裏面白紙

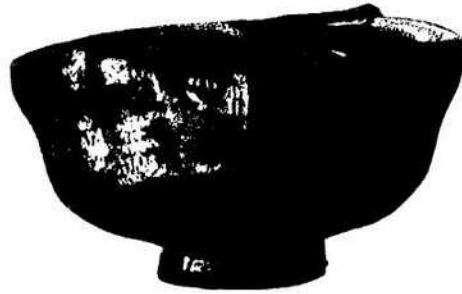


分六寸七寸三寸口 分七寸二寸 高 (2)



分二寸六寸四寸口 分一寸三寸 高 (1)

繪三鳥及三鳥手腳附杯 君島氏藏



分三寸四寸口 分二寸二寸 高 (4)



分三寸四寸口 分九寸二寸 高 (3)

彫三鳥空脚附杯及桐毛口空盤 同上

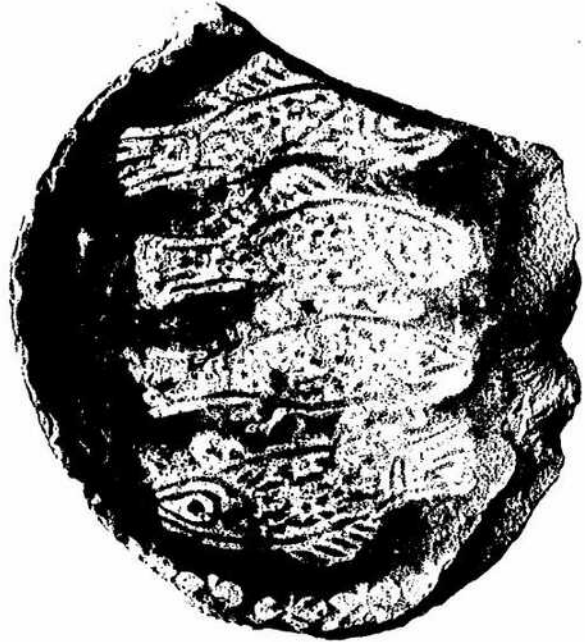
裏面白紙



繪三島蓋平面

井田經氏藏

寸五 五 (四)



三島手鉢殘缺

本館博物會藏

(一)

裏面白紙



繪三島片目

在井辰男氏藏

分九寸三寸口 (1)  
分三寸二寸高



三島手片目

越田常太郎氏藏

寸三寸五口 (2)  
分三寸二寸高

裏面白紙



刷毛目片口

本館博物館藏

(1) 口徑三寸四分  
高一寸九分



繪三鳥依蓋

作井辰男氏藏

(2) 長八寸八分  
高六寸三分

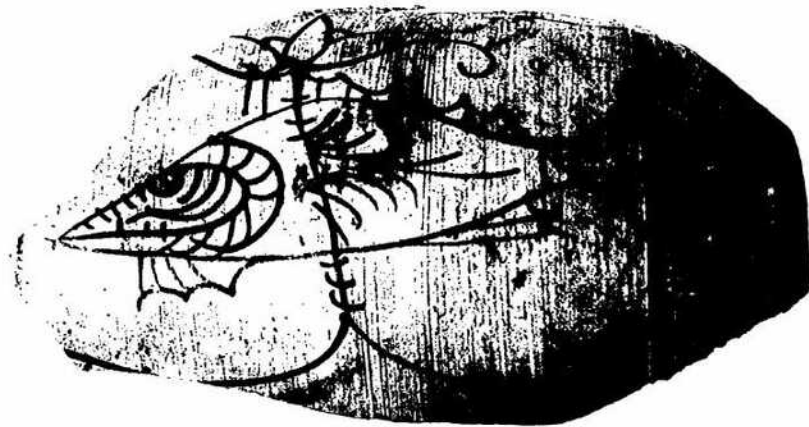
裏面白紙



(1)

繪三鳥依壺殘缺

本館藏有複製



(2)

同上

本館藏有複製

裏面白紙



(2)



(1)

黒袖及刷毛目水筒  
野崎朝吉氏藏



(3)

刷毛目鏡  
同上



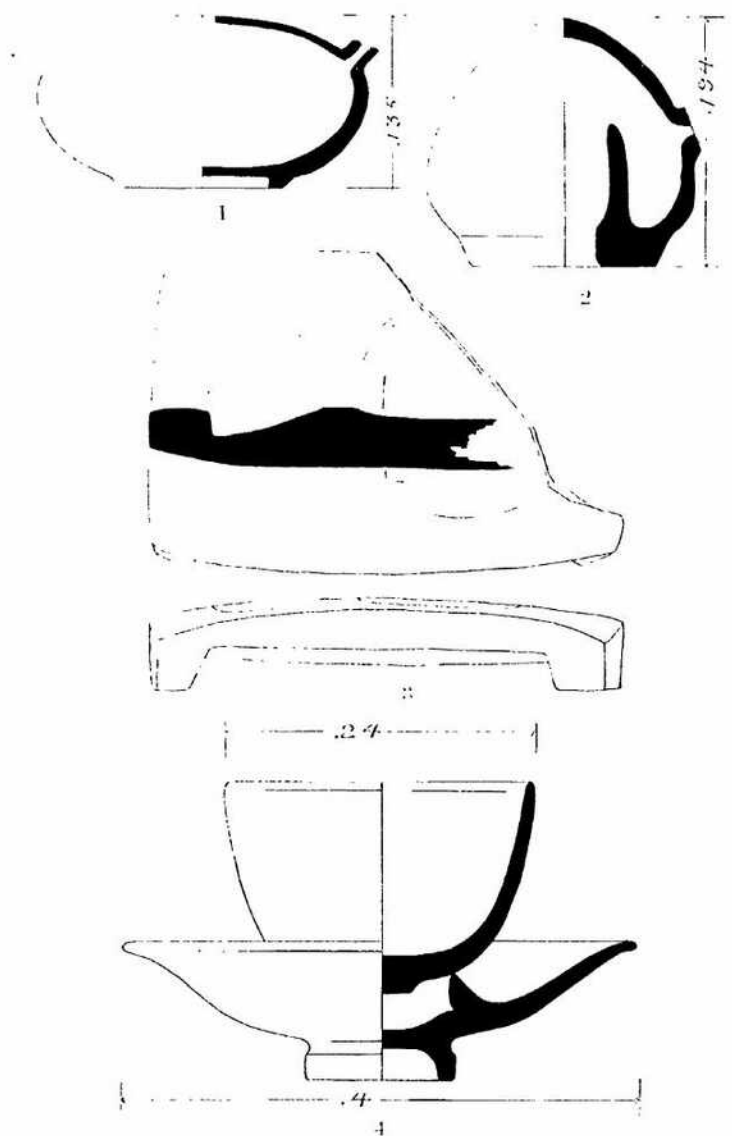
(4)

刷毛目托盤

同上

裏面白紙





野崎朝吉氏藏陶器見取圖

裏面白紙



(79)



(1)

繪三島陶器破片

土原博物館藏



(1)

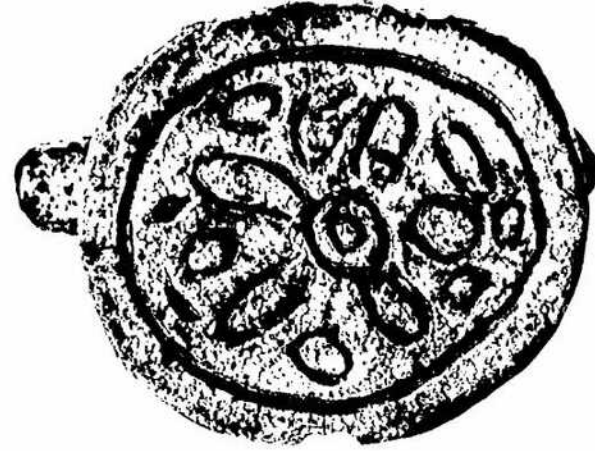


(2)

三島手陶器破片及陶製押型

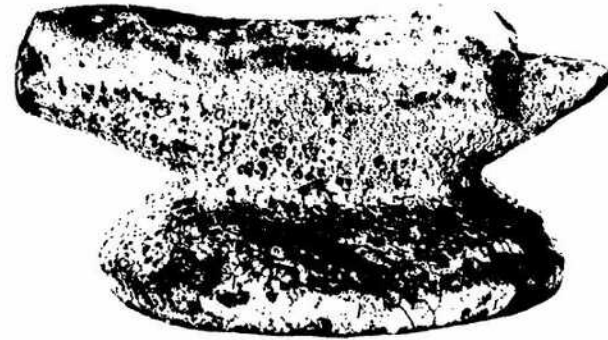
同上

裏面白紙



彫三鳥押型表面及側面

分八寸二 徑 (1)  
厘二分七寸一 高



本館博物館藏



陶製押型 同上

厘一分二寸一 徑 (2)  
厘四分五寸二 長

裏面白紙



前二島平鉢殘缺

(1)



前二島扁帶殘缺

(2)



前二島平鉢殘缺

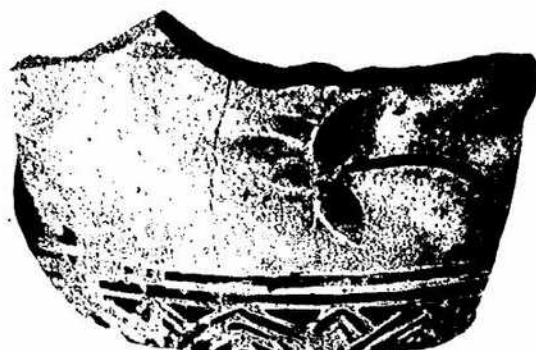
(3)

土師博物館藏

裏面白紙

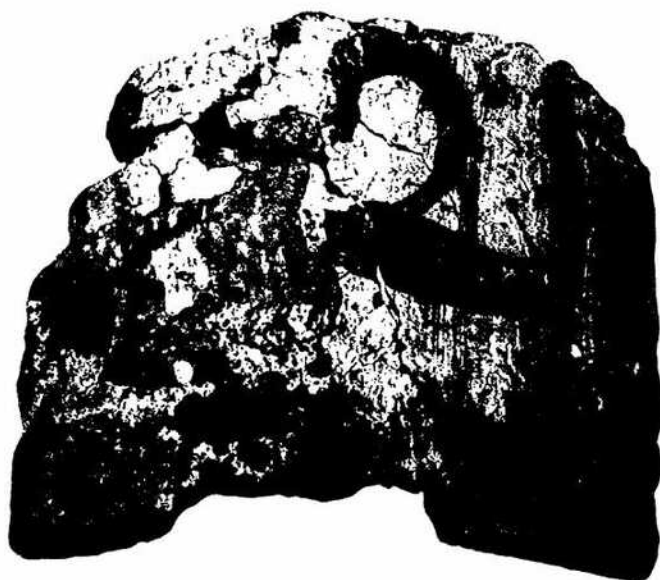


(2)



(1)

三島手植木鉢殘缺

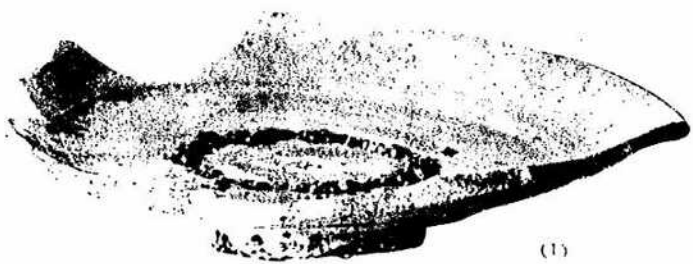


(3)

繪三島平瓦殘缺

本府博物館藏

裏面白紙



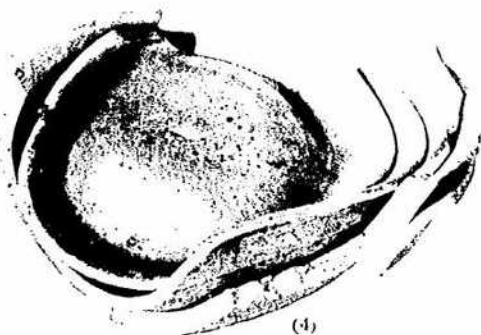
(1)

白磁皿及鉢殘缺

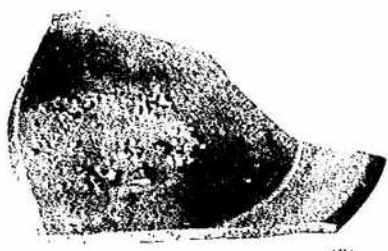


(2)

木胎厚均青磁



(3)



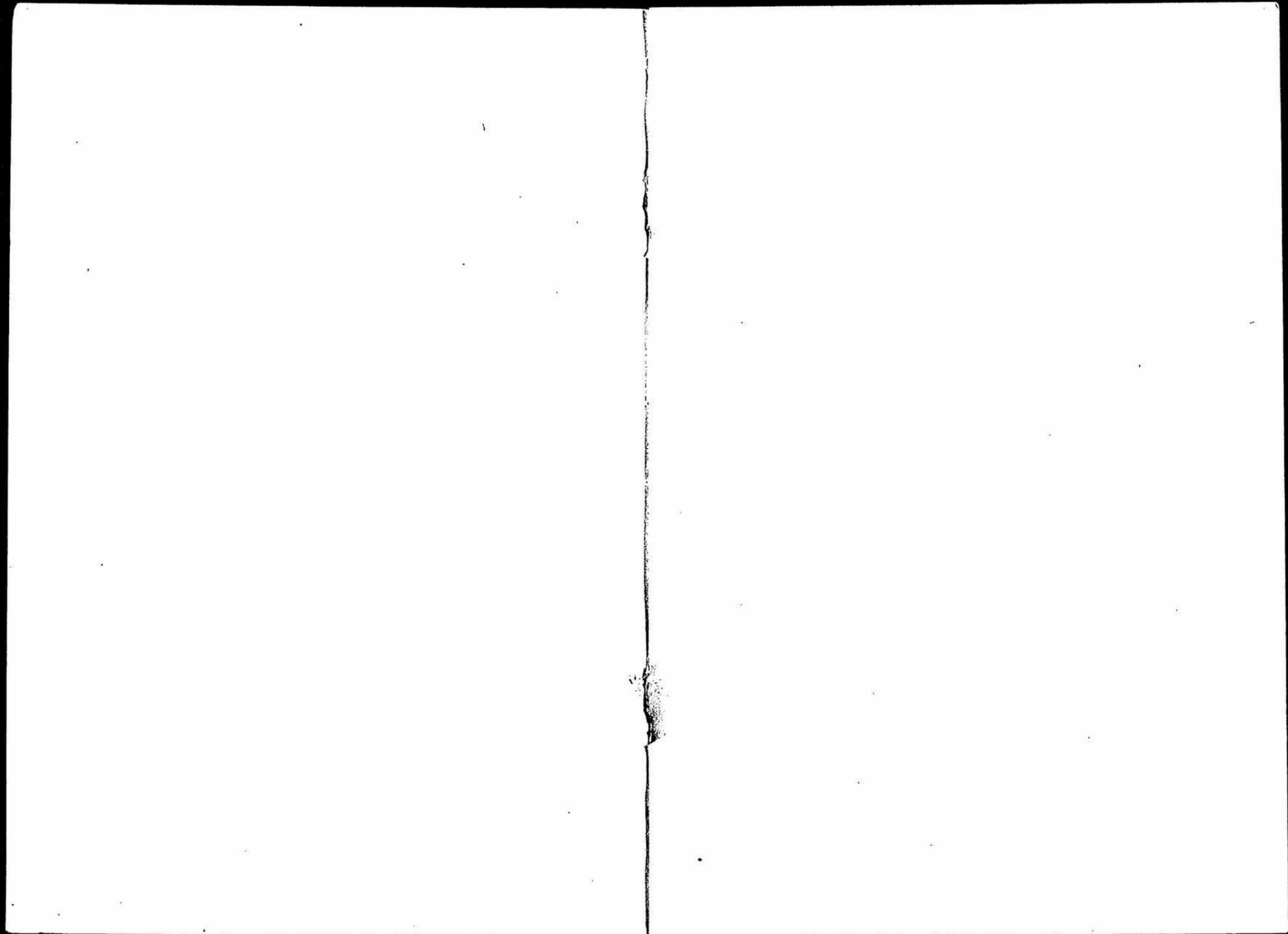
(4)

裏面白紙

昭和四年三月二十二日印刷  
昭和四年三月二十五日發行

朝鮮總督府

京城府蓬萊町三ノ六二  
印刷所 朝鮮印刷株式會社





正誤表

箇所	誤	正
一六頁末行 四七頁初行	猶六ヶ所に 廣さ約二寸九分	猶五ヶ所に 廣さ約二尺九寸
圖版第一頁書説明中	陸地測量部五十分之一地形圖分載	陸地測量部五十分之一地形圖分載
圖版第一三	口徑四寸四分 高一寸九分	口徑四寸二分 高一寸九分四厘
圖版第七三上圖	口徑三寸四分 高一寸九分	口徑三寸二分九厘 高二寸
圖版第八〇下圖	繪三島平五殘缺	繪三島九五殘缺